

元総社蒼海遺跡群(140)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021.3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群(140)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 1. 3

前橋市教育委員会

卷頭写真図版 1



1区遠景（東から）



1区W-2号溝跡（南西から）

卷頭写真図版 2



2区全景（上が北）



2区H-2号住居跡カマド 遺物出土状態（西から）



2区D-3号土坑（南から）



1区標準堆積土層（埋没谷、南から）



2区標準堆積土層（南から）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群(140)は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、古墳時代・平安時代の堅穴住居跡、中世蒼海城に関連する堀跡などが発見されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和3年3月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例　　言

1. 本報告書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（140）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺　跡　所　在　地	前橋市元総社町 1388-1, 1388-9, 1388-12, 1394, 1395
遺　跡　番　号	2A254
発　掘　調　査　期　間	令和2年6月18日～令和2年8月12日
整理・報告書作成期間	令和2年8月13日～令和3年3月16日
発　掘・整　理　担　当　者	高橋清文（有限会社毛野考古学研究所）
測　量・空　撮　技　師	小出拓磨・田村貴広（有限会社毛野考古学研究所）

3. 本書は高橋が編集し、執筆はIを小峰篤（前橋市教育委員会 文化財保護課）が、VIIの人骨分析を田口哲也（國學院大學研究開発機構共同研究員）、奈良貴史（新潟医療福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科教授）が、他を高橋が担当した。遺物写真は井上太（有限会社毛野考古学研究所）が、遺物実測・観察表は宮本久子（有限会社毛野考古学研究所）が受け持ち、瓦は須田茂（有限会社毛野考古学研究所）が監修した。

4. 発掘調査で出土した遺物および図面・写真などの資料は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管する。

5. 発掘調査・整理作業に係わった方々は次のとおりである。

【発掘調査】阿久津伸子・荒井滋道・新井友己・梅島邦一・鬼形敦子・久保さつき・佐藤清仁・高見壽美子・土佐庸好・森田昇

【整理作業】石川陽子・石原理久子・磯洋子・内田恵美子・閑野一枝・合田幸子・田村健志・富澤友理・永島美和子・深谷道子・舛田光代・山口昌子

6. 以下の諸氏に有益な御指導・御協力を賜った（順不同、敬称略）。

中村岳彦・吉田智哉

凡　　例

1. 座標値は日本測地系を使用し、水準値は海拔標高（m）を示す。

2. 遺構の略称は、次のとおりである。H：竪穴住居跡　W：溝跡　D B：土坑墓　D：土坑　P：ピット

3. 各図版の縮尺は遺構図が1/60・1/30、遺物実測図が1/4・1/3・1/2・1/1を基本とし、スケールを付した。

4. 遺構図中の推定線・復元線は一点鎖線で、重複する下位の遺構や掘り方は粗い破線、住居跡床面の硬化範囲は細かい破線で表現した。

5. 本文・挿表中の計測値において、〔 〕は残存値を、（ ）は推定値を表す。

6. 本文中の遺物記載に伴う（ ）や挿図中のゴシック体による数字は掲載遺物番号を示す。

7. 遺構図中の遺物出土位置は、土師器・須恵器類を「●」、瓦を「■」、石器・石製品を「□」、鉄製品を「△」で示す。また、遺構図中の「S」は礫・石製品を、「P」は土器類を表す。

8. 遺物の検出量は、整理作業で利用した育苗箱（浅型60×30cm）に敷き並べた状態を基準とし、その数で把握した。2箱以上を多量、1箱を中量、1/2箱以下を少量、数点のものを微量とする。

9. As-B-As-C-Hr-FA等は本書で使用する火山灰指標テフラの略称で、詳細はIII章に記載する。

10. 遺構覆土および土器類の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財团法人日本色彩研究所監修 2006）に拠った。

目 次

卷頭写真図版	4, 1 区土坑墓 10
はじめに	5, 1 区土坑 10
例言	6, 1 区ピット 11
凡例	7, 1 区硬化面 11
目次	8, 1 区遺構外出土遺物 11
引用・参考文献	VI 2 区の遺構と遺物 22
I 調査に至る経緯	1, 2 区の概要 22
II 調査方針と経過	2, 2 区堅穴住居跡 23
1 調査方針	3, 2 区溝跡 26
2 調査経過	4, 2 区土坑 26
III 遺跡の位置と環境	5, 2 区ピット 26
1 地理的環境	6, 2 区遺構外出土遺物 27
2 歴史的環境	VII 元総社蒼海遺跡群(140)出土の人骨 40
IV 標準堆積土層	VIII まとめ 43
V 1 区の遺構と遺物	写真図版
1. 1 区の概要	抄録
2. 1 区堅穴住居跡	奥付
3. 1 区溝跡	9

挿図目次

Fig. 1 調査区域図	1
Fig. 2 遺跡位置図	3
Fig. 3 遺跡分布図	4
Fig. 4 元総社蒼海遺跡群の位置	5
Fig. 5 標準堆積土層	7
Fig. 6 1 区全体図	12
Fig. 7 1 区遺構実測図 1 (H-1 号住居跡)	13
Fig. 8 1 区遺構実測図 2 (H-2・4 号住居跡)	14
Fig. 9 1 区遺構実測図 3 (H-3・5 号住居跡)	15
Fig. 10 1 区遺構実測図 4 (H-3 号住居跡、DB-1・2 号土坑墓)	16
Fig. 11 1 区遺構実測図 5 (W-1・2・3 号溝跡)	17
Fig. 12 1 区遺構実測図 6 (D-1・4・5・6・7・8・9 号土坑、P-7 号ピット、硬化面)	18
Fig. 13 1 区遺構実測図 7 (H-1・2 号住居跡)	19
Fig. 14 1 区遺構実測図 8 (H-2～5 号住居跡、W-1・2 号溝跡、DB-1・2 号土坑墓、D-6 号土坑、硬化面、遺構外)	20
Fig. 15 2 区全体図	28
Fig. 16 2 区遺構実測図 1 (H-1・4 号住居跡)	29
Fig. 17 2 区遺構実測図 2 (H-2・5・11 号住居跡)	30
Fig. 18 2 区遺構実測図 3 (H-3・6・12 号住居跡)	31
Fig. 19 2 区遺構実測図 4 (H-7・8・9・10 号住居跡)	32
Fig. 20 2 区遺構実測図 5 (W-1 号溝跡、D-1・2・4・5 号土坑)	33
Fig. 21 2 区遺構実測図 6 (D-3・6・7・9・10 号土坑、P-20 号ピット)	34
Fig. 22 2 区遺構実測図 7 (H-1・2・3・6 号住居跡)	35
Fig. 23 2 区遺構実測図 8 (H-3・4・5・6・7・8・9・10・11 号住居跡)	36
Fig. 24 2 区遺構実測図 9 (2 区 D-1・2・3 号土坑、P-7・59 号ピット、遺構外)	37
Fig. 25 前橋市の中世墓における埋葬姿勢の割合	41
Fig. 26 横臥(側臥)埋葬における埋葬方向の割合	41
Fig. 27 元総社遺跡群における中世墓の分布	45
Fig. 28 元総社蒼海遺跡群の中世墓(1)	45
Fig. 29 元総社蒼海遺跡群の中世墓(2)	46

表目次

Tab. 1	1区土坑一覧表	11
Tab. 2	1区ピット一覧表	11
Tab. 3	1区出土遺物観察表（1）	21
Tab. 4	1区出土遺物観察表（2）	22
Tab. 5	2区土坑一覧表	26
Tab. 6	2区ピット一覧表	27
Tab. 7	2区出土遺物観察表（1）	37
Tab. 8	2区出土遺物観察表（2）	38
Tab. 9	2区出土遺物観察表（3）	39
Tab. 10	元総社蒼海遺跡群（140）出土人骨の歯冠計測値および比較表	41
Tab. 11	元総社蒼海遺跡群の散在型中世墓一覧	44
Tab. 12	元総社蒼海遺跡群の群集型中世墓一覧	44

写真図版目次

春浦真実	1区遠景	2区全景
国版 1	1区W-2号溝跡	P L. 7 2区H-1号住居跡
春浦真実	2区全景	2区H-1号住居跡 撮り方
国版 2	2区H-2号住居跡カマド 遺物出土状態	2区H-1号住居跡 カマド断削り
	2区D-3号土坑	2区H-2・11号住居跡
	1区標準堆積土層（埋没谷）	2区H-2号住居跡 カマド
	2区標準堆積土層	2区H-2号住居跡 P 1貯蔵穴
P L. 1	1区全景	2区H-2号住居跡 D 1床下土坑
	1区全景	2区H-2号住居跡 撮り方
P L. 2	1区H-1号住居跡	P L. 8 2区H-3・6・12号住居跡
	1区H-1号住居跡 撮り方	2区H-3号住居跡 カマド
	1区H-1号住居跡 カマド	2区H-6号住居跡 カマド
	1区H-1号住居跡 カマド断削り	2区H-3・6号住居跡 D 1貯蔵穴
	1区H-2号住居跡	2区H-3・6号住居跡 D 2貯蔵穴
	1区H-2号住居跡 遺物出土状態	2区H-3・6・12号住居跡 撮り方
	1区H-2号住居跡 D 1貯蔵穴	2区H-4号住居跡
	1区H-2号住居跡 撮り方	2区H-5号住居跡
P L. 3	1区H-3号住居跡	P L. 9 2区H-7・10号住居跡
	1区H-3号住居跡 遺物出土状態	2区H-10号住居跡 D 2・3床下土坑
	1区H-3号住居跡 カマド	2区H-8号住居跡
	1区H-3号住居跡 カマド支脚	2区H-9号住居跡
	1区H-3号住居跡 D 1貯蔵穴	2区H-11号住居跡 D 1床下土坑
	1区H-3号住居跡 撮り方	2区W-1号溝跡
	1区H-4号住居跡	2区D-1号土坑
	1区H-5号住居跡	2区D-2号土坑
P L. 4	1区W-1号溝跡	P L. 10 2区D-3号土坑
	1区W-2号溝跡	2区D-3号土坑 覆土堆積状態
	1区W-2号溝跡	2区D-4号土坑
	1区W-3号溝跡	2区D-5号土坑
	1区D B-1号土坑墓	2区D-6号土坑
	1区D B-1号土坑墓	2区D-7号土坑
	1区D B-2号土坑墓	2区D-9・10号土坑
	1区D B-2号土坑墓	2区ピット群（H-7北側）
P L. 5	1区D-1号土坑	P L. 11 1区出土遺物1（H-1号住居跡）
	1区D-4・5・6号土坑	P L. 12 1区出土遺物2（H-2・3・4・5号住居跡、W-1・2号溝跡）
	1区D-7号土坑	P L. 13 1区出土遺物3（D B-1・2号土坑墓、D-6号土坑、硬化面、遺構外）
	1区D-8号土坑	2区出土遺物1（H-1・2号住居跡）
	1区D-9号土坑	P L. 14 2区出土遺物2（H-3・4・5・6・7・8号住居跡）
	1区P-7号ピット	P L. 15 2区出土遺物3（H-9・10・11号住居跡、D-1・2・3号土坑、P-7・59号ピット、遺構外）
P L. 6	2区遠景	

引用·参考文献

- | | |
|--|--|
| 前橋市農業さん委員会 1961『前橋市史』第一卷 | 前橋市理農文化財挖掘調査班 2010『元総社新海道群』(30) |
| 群馬県農業さん委員会 1989『群馬県史』通史編 3 中世 | 前橋市教育委員会 2011『元総社新海道群』(31) |
| 群馬県農業さん委員会 1990『群馬県史』通史編 1 初始古代 | 前橋市教育委員会 2011『元総社新海道群』(32)・(33) |
| 群馬県農業委員会 1971『群馬縣農政年報』(1) (更正版) | 前橋市教育委員会 2011『元総社新海道群』(34) |
| 群馬県農業委員会 1969・1970『上野ノ原分野寺跡調査報告書』 | 前橋市教育委員会 2011『元総社新海道群』(35) |
| 群馬県農業委員会 1989『史料記 上野分野寺跡発掘調査報告書』 | 前橋市教育委員会 2011『元総社新海道群』(36) |
| 前橋市農業委員会 1970・1980・1982『山王山・星野山跡発掘調査報告書』 | 前橋市教育委員会 2011『元総社新海道群』(37) |
| 前橋市農業委員会 2007・2009・2011『山王山跡』 | 前橋市教育委員会 2012『元総社新海道群』(38) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1983『元総社明神跡』I | 前橋市教育委員会 2013『元総社新海道群』(39) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1984『元総社明神跡』II | 前橋市教育委員会 2013『元総社新海道群』(40)・(46)・(49)・(50) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1986『元総社明神跡』III・IV | 前橋市教育委員会 2013『元総社新海道群』(41)～(43) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1987『元総社明神跡』V | 前橋市教育委員会 2013『元総社新海道群』(44)・(45) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1988『元総社明神跡』VI | 前橋市教育委員会 2013『元総社新海道群』(47) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1989『元総社明神跡』VII | 前橋市教育委員会 2014『元総社新海道群』(48) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1990『元総社明神跡』VIII | 前橋市教育委員会 2014『元総社新海道群』(51)～(55)・(66)～(68) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1991『元総社明神跡』IX | 前橋市教育委員会 2014『元総社新海道群』(66)・(67)・(72)・(73) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1992『元総社明神跡』X | 前橋市教育委員会 2014『元総社新海道群』(57)～(59) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1993『元総社明神跡』XI | 前橋市教育委員会 2014『元総社新海道群』(60) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1994『元総社明神跡』XII | 前橋市教育委員会 2016『元総社新海道群』(62)～(64) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1995『元総社明神跡』XIII | 前橋市教育委員会 2016『元総社新海道群』(65) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1983『閑原遺跡』 | 前橋市教育委員会 2017『元総社新海道群』(74)～(80)・(92)～(94) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1985『閑原山遺跡』 | 前橋市教育委員会 2018『元総社新海道群』(81)～(84) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1988『元祇草作遺跡』 | 前橋市教育委員会 2015『元総社新海道群』(85)～(88)～(90)・(96)～(98) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1993『大屋敷遺跡』I | 前橋市教育委員会 2015『元総社新海道群』(91)・(95)・(102) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1994『大屋敷遺跡』II | 前橋市教育委員会 2015『元総社新海道群』(99) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1995『大屋敷遺跡』III | 前橋市教育委員会 2014『元総社新海道群』(100)・(101) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1996『大屋敷遺跡』IV | 前橋市教育委員会 2016『元総社新海道群』(103) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 1997『大屋敷遺跡』V | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(116)・(123) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2000『大屋敷遺跡』VI | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(117)・(118) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2000『閑原景明神跡』 | 前橋市教育委員会 2016『元総社新海道群』(129) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2001『元祇小見遺跡』 | 前橋市教育委員会 2017『元総社新海道群』(121) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2003『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2017『元総社新海道群』(122) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2004『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2017『元総社新海道群』(124) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2005『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2018『元総社新海道群』(126) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(127) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(128) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(129) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(130) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2019『元総社新海道群』(131) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(134) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(135) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(136) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(137) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(138) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(139) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(141) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2016『元総社新海道群』(17街区) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2020『元総社新海道群』(17街区)・(17街区)・(17街区) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2016『元総社新海道群』(街区) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2018『元祇小見II遺跡』(94街区) |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市理農文化財挖掘調査会 2009『上野郡分野寺跡城郭調査』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市理農文化財挖掘調査会 2009『上野郡分野寺跡城郭調査日』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2013『推定上野府野・平成23年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2013『推定上野府野・平成24年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2015『推定上野府野・平成25年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2015『推定上野府野・平成26年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2017『推定上野府野・平成27年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2018『推定上野府野・平成28年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2019『推定上野府野・平成29年度発掘調査報告』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2021『大渡遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 前橋市教育委員会 2016『大渡遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 群馬町教育委員会 1984・1985『中尾遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 1985・1988『中尾遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 1986・1988・1990・1992『鳥羽遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 1986・1988・1990・1992『鳥羽遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 『上野郡分野寺・寺中町中城城』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 1993・1994・1996『元総社寺田遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 2001『元総社川舟遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 2003『総社御苑東遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 財团法人群馬県理農文化財挖掘事業団 2007『上野郡分野寺・寺中町中城遺跡』 |
| 前橋市理農文化財挖掘調査会 2006『元祇小見II遺跡』 | 牛込山遺跡・元総社川舟遺跡・元祇小見II内遺跡・山崎一 1971『群馬県古墳遺跡の研究』群馬県文化遺産調査会 |

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元總社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、22年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和2年4月10日付で前橋市長 山本 龍(区画整理課)(以下「前橋市」という。)より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が前橋市教育委員会(以下「市教委」という。)に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年6月3日付で前橋市と民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所との間で業務委託契約が締結され発掘調査着手に至った。

なお、遺跡名称「元總社蒼海遺跡群(140)」(遺跡コード: 2A254)の「元總社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「(140)」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

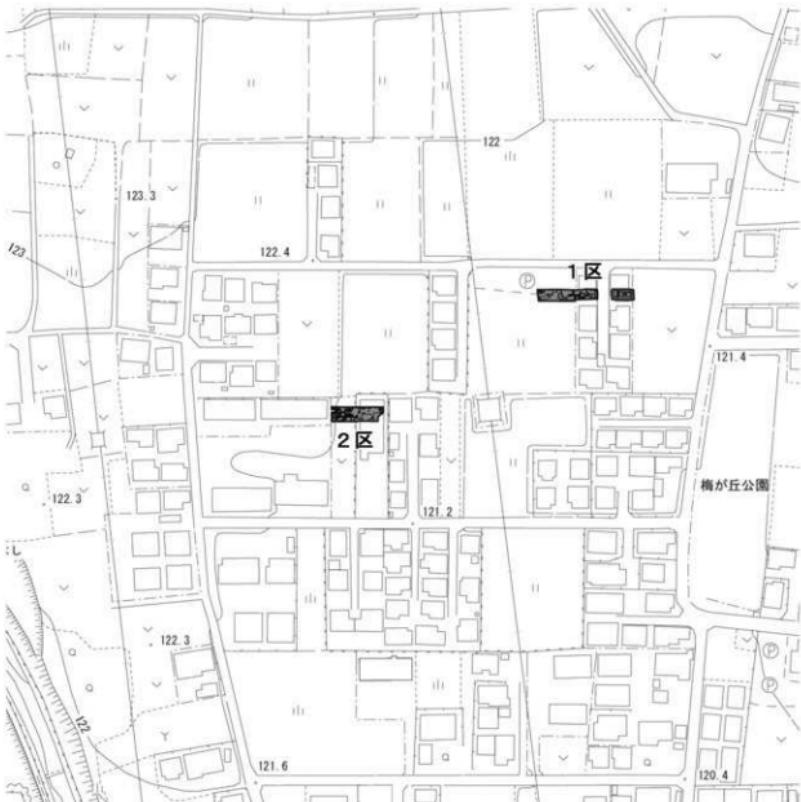


Fig. 1 調査区域図(前橋市役所発行『前橋市現形図』1/1,000 を200%拡大・変換)

II 調査方針と経過

1 調査方針 (Fig. 1)

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地である。調査区は2地点に分かれており、東側を1区、西側を2区と呼称している。調査面積は1区が193m²、2区が133m²で総調査面積は326m²である。遺構名称（番号）は各区ごとに付した。グリッド座標は上野国分尼寺域確認調査（2000年）から用いられている4m間隔の方眼を使用する。国家座標（日本測地系第IX系）X=44000.000, Y=-72200.000（X0・Y0）を基点とし、経線をX、緯線をYとして北西隅を起点に番号を付した。本調査区（1区）X 93, Y 176 の公共座標は以下のとおりである。

日本測地系 X=43296.000 Y=-71828.000 世界測地系 X=43650.911 Y=-72119.758

遺構確認面までの表土除去は重機（0.45m³バックホー）を使用し、1区の排水はダンプトラック（10t）で近隣の借用地に搬出した。前橋市教育委員会と協議して、近接する宅地や植木に配慮した安全帯を確保し、2区の上水道管範囲などを避けている。遺構確認面は黒褐色As-C混入土層ないし黒褐色土層を目安としたが、残存状況が良好でないことから総社砂層ないしその漸移層上面とした箇所が多い。遺構調査は、検出遺構の複雑さを考慮して、2区から1区の順で進めることとした。遺構確認面はジョレンを用いて精査し、著しい重複により判別の困難な部分はベルトを残して面的に掘り下げている。遺構掘削は遺物出土状態やベルトないし半截による埋没状態の記録化を経て、使用面・底面および掘り方底面まで掘り下げた。埋戻しは、振動ローラーによる締固めと並行して重機（0.45m³バックホー）・ダンプトラック（10t）を用いて実施した。なお、現地調査にあたって、調査区が道路沿いに面している部分にバリケード・夜間点滅灯などを設置し安全に配慮した。

測量や写真撮影による記録保存は、調査の進捗に合わせて適宜実施した。遺構測量（第一次原図）は平面をトータルステーションで、断面を基準点からの測り込みで対応した。写真記録には35mm判のフィルムカメラ（モノクロ・リバーサル）やデジタルカメラを、空撮にはドローンを用いた。

報告書作成にあたって、遺構図面は平面図データや断面図のデジタルトレースデータを修正して第二次原図を作成した。出土遺物は洗浄・注記・接合・復元の後に、一眼レフカメラによる写真撮影、実測・拓本・デジタルトレースを実施している。最後に、レイアウトソフトを用いて編集を進めた。

2 調査経過（令和2年6月4日～令和3年3月16日）

令和2年6月4日に市教育委員会文化財保護課・都市計画部区画整理課・有限会社毛野考古学研究所の三者で事前現地打ち合わせを実施し、8日に調査範囲設定、12日にトイレ設置、16日に現場機材搬入など諸準備を経て、18日から発掘調査を開始した。重機による調査区の表土除去を、18・19日に1区で、22日に2区で実施している。2区の表土除去中に上水道管が露出し、水道整備課による立ち合いがなされた。23日に測量基準点を設定し、作業員による遺構調査を2区から着手した。最初の遺構確認後、24日から遺構掘削を始めている。7月15日に2区全景の空撮、市教育委員会による終了確認をおこない、17日に掘り方調査を含めた2区の遺構調査が終了した。同日には1区の遺構確認をおこない、20日から1区の遺構掘削を始めている。31日に1区全景の空撮、市教育委員会による1区の終了確認をおこない、8月5日に掘り方調査を含めた1区の遺構調査が終了した。以後、現場機材の片付けと並行して、調査区の埋め戻しを6・7日に1区で、10日に2区で実施している。最後に、残土置場の草刈りを経て、12日にトイレ・機材を撤収した。

整理作業・報告書作成にあたって、遺構図面の修正・図版作成を8・9・1月、遺物の洗浄・注記・接合・復元を8・9月、遺物の写真撮影・画像処理を10・11月、遺物の実測・トレース・図版作成を10・11・12・1月、原稿執筆・編集を1・2月、入稿・校正を2・3月、報告書の印刷・製本・納品を3月の工程で進めた。

III 遺跡の位置と環境

1 地理的環境 (Fig. 2·3)

本遺跡が所在する前橋市は群馬県の中央やや南寄りに位置し、北東に赤城山、北西に棲名山、西に浅間山を望む。元総社町は前橋市の南西部に位置し、元総社蒼海遺跡群はその南西域を占める。調査地点は、相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行域にあたり、染谷川左岸の自然堤防と牛池川右岸の台地に挟まれた北西-南東方向に展開する低地に位置する。

前橋台地は前橋泥流（約 20,000 万年前）を基層とする緩傾斜地の扇状地性台地である。相馬ヶ原扇状地は榛名山の陣場岩屑なだれ（約 17,000 万年前）に起因し、前橋台地上に砂礫層が厚く堆積する。前橋台地や相馬ヶ原扇状地の上には、湿地に由来する前橋下部泥炭層や浅間－板鼻黃色輕石（As-YP：約 16,500～15,000 年前降下）、浅間－總社輕石（As-Sj：約 12,000 年前降下）を含む前橋上部泥炭層が堆積し、さらにその上を洪水性堆植物である總社砂層（約 12,000～5,000 年前）が厚く覆う。

台地の東部には広瀬川低地帯との間に崖線が走り、低地内を利根川が南流する。利根川の現流路は中世以降のもので、旧流路は現在の広瀬川流域とされている。本遺跡地周辺には榛名山麓を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの中小河川が南東に流れ、扇状地や台地を刻んで帶状に画している。

総社砂層上には黒ボク土が形成され、火山碎屑物である浅間C輕石(As-C: 3世紀後半~末降下)・棟名-二ツ岳荒川テフラ(Hr-FA: 6世紀初頭降下)・棟名-二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FF: 6世紀中葉降下)・浅間B輕石(As-B: 1108年降下)・浅間A輕石(As-A: 1783年降下)などが降下した。これらの降灰や噴火に伴う泥流は谷筋を埋没させ、今日に近い比較的平坦な地形を造り出している。

調査区周辺は畠地が広がっていたが、1998年から始まった元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって急速に市街地化が進み、幹線道路の整備や商業施設・マンションの林立が際立つ。

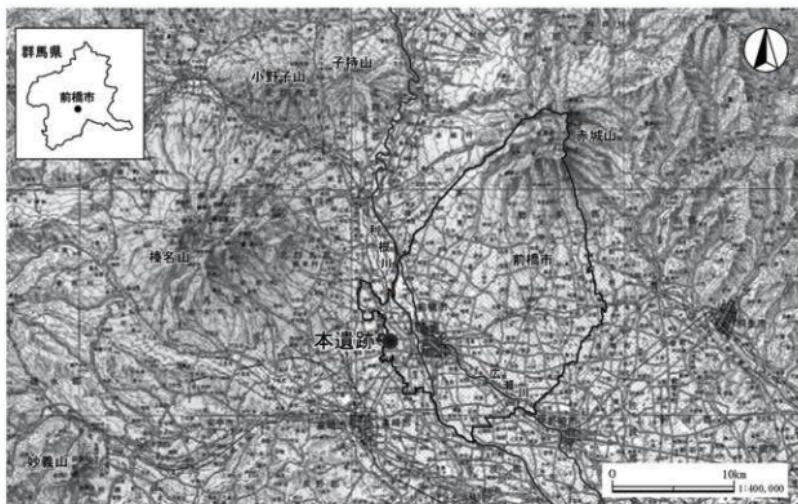


Fig. 2 遺跡位置図(国土地理院発行『宝都宮』・『長野』1/200,000を50%縮小: 改変)

2 歴史的環境 (Fig. 3・4)

元総社町周辺において總社砂層より上層で確認される遺構は、縄文時代前期後葉以降となる。その集落は諸磯c式期を最盛期とし、染谷川左岸の自然堤防に沿って帯状に分布する（元総社蒼海遺跡群3・4・13・24・35・40・41・48・50・116・94街区：以下「蒼海」、小見V～VII遺跡）。中期になると同様自然堤防の北端から榛名山南東裾にわたる緩やかで広い南傾斜面が選ばれ、集落が環状に発展する（蒼海3・40・116・123、上野国分僧寺・尼寺中間地域）。後・晚期は、染谷川左岸低地の蒼海（101）で後期前～中葉の土坑群が、牛池川左岸の蒼海（9・10）で晚期前半の住居跡が確認されており、低地を見据えた溝地がなされる。

弥生時代は調査事例が少なく、蒼海（37・39・61）、小見内III遺跡など屈曲する牛池川を望む右岸台地端部で前期末～後期の遺物が、染谷川左岸の上野国分僧寺・尼寺中間地域で後期樽式期の住居跡が散見される。

古墳時代前期の集落は前代の分布域を踏襲する牛池川右岸の蒼海（38・39・17街区）、小見内III遺跡や染谷川自然堤防にある蒼海（40・48・116）、小見II・V・VI遺跡に加えて、牛池川左岸の蒼海（38・56・61）などで頗著となる。蒼海（56・61・62・81・100）で周溝墓が、蒼海（128）で島跡が、低地平野の関泉明神北IV・V遺跡・元総社明神遺跡・元総社寺田遺跡で水田跡が確認されており、牛池川左岸では居住域・墓域・生産域を含む

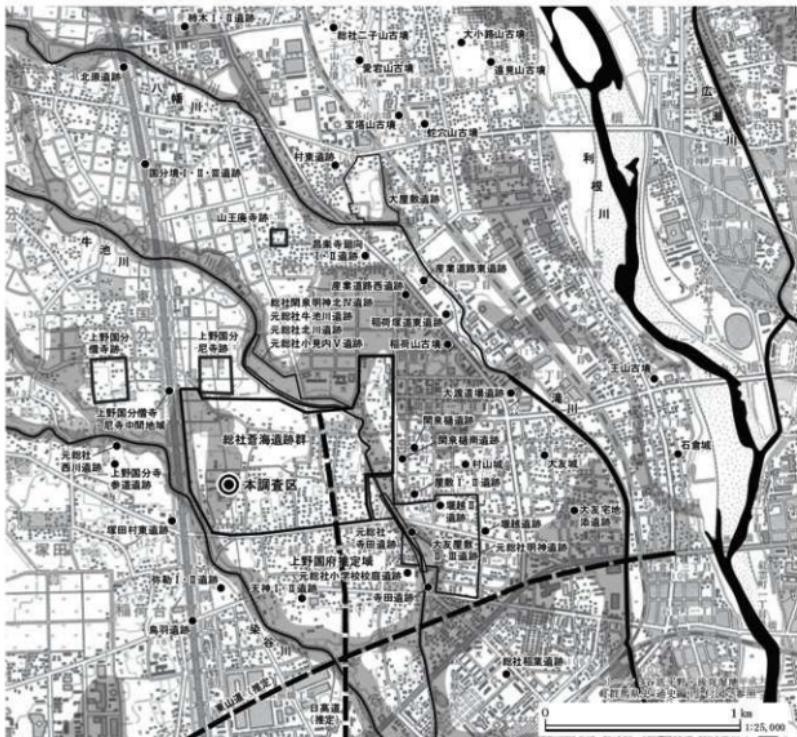
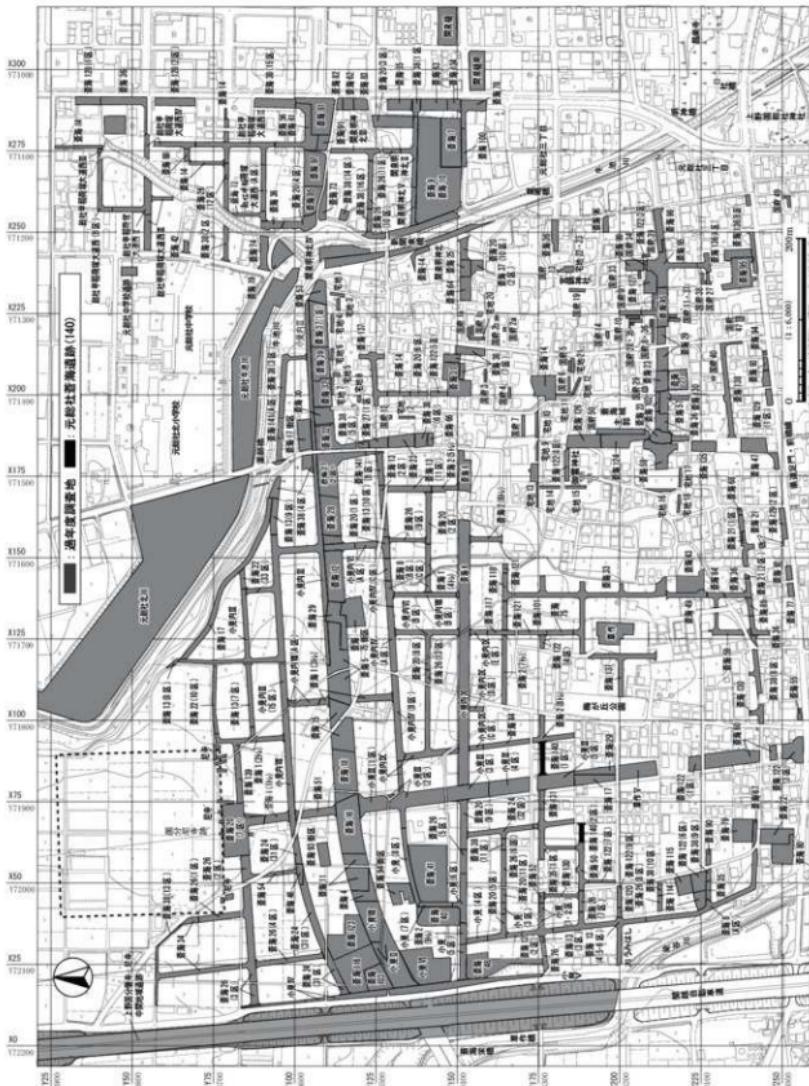


Fig. 3 遺跡分布図（國土地理院発行『前橋』1/25,000を改変）

一体的な集落景観を目の当たりにする。中期は牛池川左岸に多く、蒼海(35・81・91)、甲稻荷塚大道西II遺跡、元総社中学校遺跡などで多くの住居跡が調査された。墓域は約2km北東の総社古墳群に遠見山古墳(5世紀後半)が見いだされる。後期になると遺跡数が増大し、遺跡群のはば全域で住居跡が確認されようになる。7世紀には、



建物の方向が一定の規則性を示す大規模な掘立柱建物跡や区画溝が蒼海（7・9・10・35）で調査されており、拠点的な集落の性格が垣間見られる。古墳は約2km東の王山古墳（6世紀初頭）や総社古墳群中の總社二子山古墳（6世紀後半）・愛宕山古墳（7世紀前半）・宝塔山古墳（7世紀後半）・蛇穴山古墳（7世紀末）といった首長墓が目を引く。また、7世紀後半に山王庵寺（放光寺）が建立され、塔心礎・石製鶴尾・根巻石などの石造技術は宝塔山古墳や蛇穴山古墳と同系統のものであることが指摘されている。生産域として蒼海（9）・元総社北川遺跡・閑泉明神北IV・V遺跡・元総社寺田遺跡・元総社明神遺跡など低地内の遺跡でHr-FP 洪水層下水田ないしHr-FP 洪水層下水田が調査されており、牛池川流域の事例が蓄積されている。

奈良・平安時代は上野国府・国分僧寺・国分尼寺が置かれ、政治的中心地として再編される。国府は遺跡群東側が推定城となっており、蒼海（99・127・136）などで掘込地業をもつ建物跡が、蒼海（95・136）で大型掘立柱建物跡が検出されている。また、直進性を志向する大規模な道路網が整備され、国分僧寺・尼寺南面の東西道路や山王庵寺西側に連なると予測される日高道などが調査されている。さらに周辺遺跡からは須恵器盤・高盤が多数出土し、都城の器種組成である土師器暗文坏・多角柱の棒状脚部をもつ白色の酸化焰焼成窯坏、「ての字状口縁」皿、三彩陶器および円面鏡、巡方、「阿部私印」銅印などが出土し、国府城を特徴づける資料が増加している。国府城でなくとも、本調査地点に近い染谷川左岸自然堤防上の蒼海（8・13）では大量の綠釉陶器が検出されている。住居跡は全城に展開するものの、8世紀後半から9世紀末葉では国府推定城中心部で希薄となり、明確な区分けが予想される。一方で、10世紀には住居跡がさらに増大して偏在性がなくなり、数こそ減少するものの、その傾向は11世紀まで継続する。こうした変化は、国府関連施設や国分寺などの衰退が連想され、カマドの構築材として同施設の瓦が転用されていることがこれを傍証する事例として挙げられている。まさに、平安時代中期の国府城は、平将門の乱（天慶2年：939年）の舞台となっている。

中世は、上野守護代に任命された総社長尾氏が15世紀前半に総社城（蒼海城）を築城して本拠とし、国府城は大規模な地形改変を受けた。同城は、染谷川とその支流牛池川に挟まれた1.2km間を縦張りとし、県内最古級に位置付けられている。国府推定地内に位置する蒼海（23・29・65）などでは、主郭周辺の堀跡群や建物跡などの関連遺構が調査され、蒼海（27）では、堀跡および二の丸に展開する無数の柱穴群が確認され、その帰属時期は15世紀を中心とする。蒼海（24・25・27）では、青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・持腰香炉、白磁などの貿易陶磁が多数出土した。なお、永禄6年（1563年）には武田信玄による侵攻で落城したとされている。

近世になり、慶長6年（1601年）に秋元長朝が入封するも、利根川西岸線の植野に総社城を築いて蒼海城は廢城となった。なお、総社城が完成するまで、慶長9年（1604年）からの10年間は蒼海城の東に位置する八日市城に在城している。

IV 標準堆積土層 (Fig. 5・6, 卷頭写真2)

I区における基本層序の観察は、西側を調査区北壁に設けたトレンチで、東側を深い堀跡（W-2号溝跡）の壁面で実施した。また、削平を免れた埋没谷覆土を調査区中央で記録した。これらの結果から、I～III層が確認されている。

I層は現代の盛土層で、大量の礫を含む。東側の敷地では特徴的な灰白色粘質土が厚く堆積していた。II層は浅間B軽石（As-B）の混入土層で4層（II a・b・c・d層）に分かれる。II a層は繊りがやや弱く、As-Bの混入が少ない。II b層は頗著な鉄分凝集層であり、水田に関連することが予想される。I区H-3号住居跡中央（X86・X87の中間）から東側に分布する。II c層は色調が暗く、II b層と同様の範囲に見受けられる（I区H-3号住居跡断面A参照）。II d層は分布域が広がるもの、トレンチ部分を含めた調査区北西側には及ばない。III層は黒褐色土層で、As-Bの混入は目立たないが、形成時期は重複するI区D B-2より新しい中世以降に比

定される。III a 層は調査区西端に偏在し、総社砂層上面（VII a 層）を削剥する。III b 層は調査区東端に見られ、埋没し切っていないW-2・3号溝跡を覆う。IV層は浅間C輕石（As-C）の混入土層、V層は黒ボク土層、VI層は黄灰色土層で、標高が低い調査区東側に残存する。IV層には不自然な堆積がみられた。VII層は総社砂層への漸移層で、VIII層が総社砂層に相当する。総社砂層は構成する砂・シルトの状態から亜層群に分かれる。

2 区における基本層序の観察は、調査区中央の北壁に設けたトレンチと深い土坑（2 区 D - 3 号土坑）の壁面で実施した。その結果、I・II・III・V・VII・VIII層が確認され、IV・VI層は検出されなかつた。

I 層は表土層で浅間 A 輕石（As-A）の混入土層にある。東側にはコンクリートが入っているような現代のカクラン坑よりも新しい盛土がなされていた。II 層は I 区と同様であるが、II c 層は認められない。また、西側の II b 層は厚く、鉄分が粗放となる。その境界は現在の敷地と合致しており、異なる土地利用に供されていた状況が窺われる。褐灰色を呈する II d 層では磁器（波佐見碗）が出土し、形成時期は近世でも As-A 降下（1783 年）以前に限定される。III c 層は層順から 1 区の III a・b 層に相当すると判断され、2 区では部分的に見受けられる。V 層は中央トレンチの周囲のみにみられる薄い層だが、下位が VII 層であり層面も明瞭であることから、識別できなかった遺構覆土である可能性も考慮する必要がある。2 区の総社砂層上位（VII a 層）では径 20～30cm ほどの縞が出土している。なお、1 区・2 区の標高を比べると、現況にあまり差がないにもかかわらず、VII 層が 2 区では 1.2 m ほど高くなっている、後世の著しい削平が予察される。

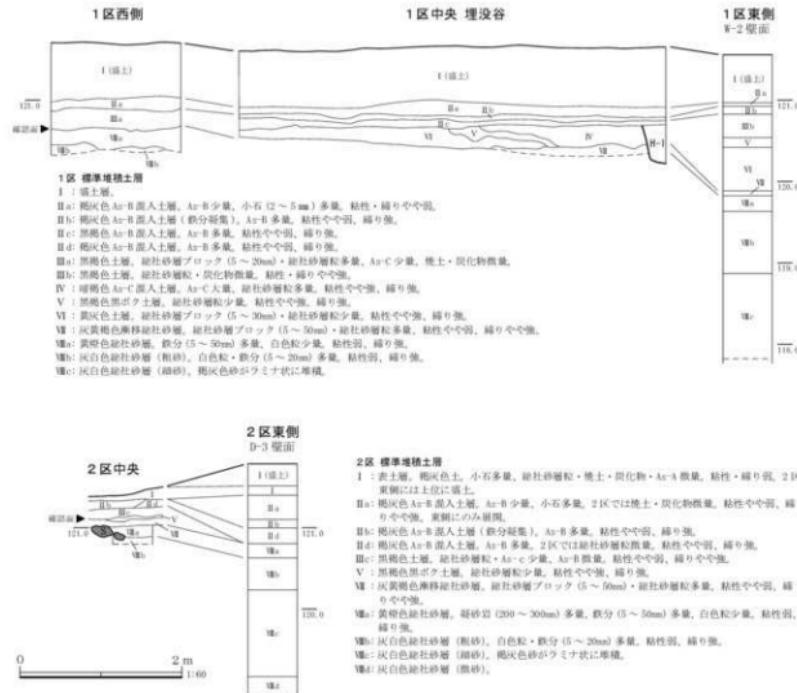


Fig. 5 標準堆積土層

V 1区の遺構と遺物

1. 1区の概要

1区は染谷川左岸の自然堤防と牛池川右岸の台地に挟まれた幅200mほどの低地に位置し、調査範囲内の約40m間で東側が50cmほど低くなっている。また、南側へも若干傾斜している。調査区の多くは中近世以降の造成により総社砂層（Ⅶ層）まで削平されていたが、東側にはAs-C混土層や黒ボク土が残存しており、遺構が壊されずに保存される傾向にある。

遺構は、堅穴住居跡5軒（H-1～5）、溝跡3条（W-1～3）、土坑墓2基（D B-1・2）、土坑7基（D-1・4～9、D-2・3・3次番）、ピット29基（P 1～29）が確認され、時期は平安時代・室町時代を主体とする。H-3・5号住居跡が古墳時代後期（6・7世紀）、H-1・2・4号住居跡が平安時代（9・10世紀）、W-2号溝跡、D B-1・2号土坑墓、D-4～7・9号土坑が中世、W-1・3号溝跡、D-8号土坑、硬化面が近世・近代に比定される。W-2号溝跡は北側の蒼海（44）W-2号溝跡につながる埋跡で、蒼海城に関連することが予想される。なお、遺構名を発掘調査時から次のとおりに変更した。D-2→D B-1、D-3→D B-2。

遺物は収納箱（60×44×15cm）で2箱分が検出された。縄文土器、石器、土師器、須恵器、羽釜、灰釉陶器、綠釉陶器、かわらけ・中世陶器、軟質陶器、白磁・近世陶磁器類、瓦・石製品、古錢、人骨などが出土し、検出遺構を反映して土師器や須恵器がそのほとんどを占める。

2. 1区堅穴住居跡

1区H-1号住居跡（遺構：Fig. 7, PL. 2 / 遺物：Fig. 13, Tab. 3, PL. 11）

位置：X88・89、Y175。北側が調査区外に続く。重複：本遺構→D-1、P-25・26。主軸方位：N-89°-E。規模：主軸長4.13m、副軸長[2.01]m、深さ0.46m。面積：[8.30]m²。形態：平面は不整な方形ないし長方形を呈すると推測される。床：浅い掘り方に暗灰黄色土を充填して床とする。床下には土坑状の掘り込みが複数穿たれていた（D 1～4）。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁に敷設し、燃焼部が堅穴の内側に位置する。東壁から40cmほど手前に粗質安山岩による袖石が据えられており、長い袖部・煙道壁を擁していたことが窺われる。また、幅20cmを測る袖石間から、狭い焚口が予想される。右袖石には敲打痕が見受けられた。煙道は燃焼部との高低差がなく、袖石間と同様の幅で堅穴外に延びる。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土・暗褐灰色土が圓状に堆積する。遺物：多量で、土師器甕、須恵器甕・甌、綠釉陶器、羽釜、瓦、石器（スクレイバー）が出土した。破片が多く、カマド周間に集中する。床面上で良好な須恵器甕（1）が検出されている。掘り方のD 3でも羽釜片が散見された。時期：出土遺物から平安時代（10世紀前半）に求められる。

1区H-2号住居跡（遺構：Fig. 8, PL. 2 / 遺物：Fig. 13・14, Tab. 3, PL. 12）

位置：X88・89、Y176。南側が調査区外に続く。重複：H-4、P-7・28・29→本遺構→P-21。主軸方位：N-114°-E。規模：主軸長3.40m、副軸長[1.89]m、深さ0.52m。面積：[6.43]m²。形態：平面は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると推測される。床：総社砂層を地床とし、黒褐色土が敷かれている。床下は北側に土坑状の掘り込みが穿たれ、その底部には床面と同様の黒褐色土が薄く堆積していた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：北壁中央に、北壁側をえぐる土坑状のD 1が設えられる。壁面には工具痕がみられた。柱穴：検出されなかった。覆土：中・下層に灰黄褐色土・褐灰色土が厚く堆積し、上層を黒色土・黒褐色土が覆う。遺物：中量で、土師器甕、須恵器甕・甌・盤・甌、灰釉陶器、羽釜、瓦が出土した。ほとんどは破片で、中～下層に分布する。北隅の床面上で残存状態の良好な内面黒色須恵器甕（1）が検出された。時期：出土遺物から平安時代（10世紀後半）に求められる。

1区H-3号住居跡（遺構：Fig. 9・10, PL. 3 / 遺物：Fig. 14, Tab. 3・4, PL. 12）

位置：X86・87、Y175・176。北側が調査区外に続く。重複：H-5→本遺構→W-1、P-10。主軸方位：N-74°-E。規模：主軸長 4.47 m、副軸長 [3.50] m、深さ 0.36 m。面積：[13.03] m²。形態：平面は隅丸長方形ないし隅丸長方形を呈すると推測される。床：やや深い掘り方に灰黄褐色土を充填して床とし、南東側が硬化する。床下には壁際に帯状の、カマド前に土坑状の掘り込みが穿たれていた。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁の南寄りに敷設し、燃焼部が堅穴の外側に位置する。燃焼部のやや奥に粗質安山岩による支脚が据えられる。支脚には加工痕があり、四角錐に成形されている。側壁に粘土が残存し、被熱痕が散見された。貯蔵穴：南東隅に深いピット状の D I が設えられる。柱穴：南壁際で P 1 （深さ 29cm）を確認したが、用途不明である。覆土：黒褐色土・暗褐色土が急な勾配で凹状に堆積する。遺物：中量で、土師器壺・甕・須恵器蓋・甕・台石、葦編石が出土した。下層～床面上に分布し、南壁際では残存状態の良好な土師器壺（1・2）や9点の葦編石（安山岩・砂岩・ホルンフェルス）が検出されている。時期：出土遺物から古墳時代後期（7世紀後半）に求められる。

1区H-4号住居跡（遺構：Fig. 8, PL. 3 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 12）

位置：X87・88、Y175・176。南側が調査区外に続く。重複：本遺構→H-2、D B-1、P-7・16・21。主軸方位：N-109°-E。規模：主軸長 [1.67] m、副軸長 [3.33] m、深さ 0.23 m。面積：[4.96] m²。形態：平面は方形ないし長方形を呈すると推測される。床：部分的に浅い掘り方に褐灰色土を充填して床とする。壁周溝：西壁に施される。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：灰黄褐色土・黒褐色土が傾斜堆積する。遺物：微量で、土師器壺・甕・須恵器塊が出土した。いずれも破片である。時期：重複関係や出土遺物から平安時代（9世紀）に求められる。

1区H-5号住居跡（遺構：Fig. 9, PL. 3 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 12）

位置：X85・86、Y175・176。重複：本遺構→H-3、P-10・18。主軸方位：N-66°-E。規模：主軸長 1.88 m、副軸長 2.55 m、深さ 0.13 m。面積：4.79 m²。形態：小型で、平面は主軸方向が短い長方形を呈する。床：浅い掘り方に灰黄褐色土を充填して床とする。床下には壁際に帯状の掘り込みが穿たれていた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土・灰黄褐色土が傾斜堆積する。遺物：微量で、土師器壺がみられる。いずれも破片である。時期：重複関係や出土遺物から古墳時代後期（6世紀後半）に求められる。

3. 1区溝跡

1区W-1号溝跡（遺構：Fig. 11, PL. 4 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 12）

位置：X86～88、Y176。重複：H-3・4→本遺構。主軸方位：N-91°-E。規模：全長 5.23 m、上端幅 0.36～0.45 m、下端幅 0.14～0.22 m、深さ 0.49～0.66 m。形態：東西方向へ直線的に走行し、断面は狭い逆台形状を呈する。底面：中央が 15cm ほど低い。工具痕が残る。覆土：総社砂層ブロックを多く含む暗灰黄色土や黒褐色土などが互層状に堆積する。人為埋没。遺物：微量で、土師器甕・須恵器甕・近世陶器壇・擂鉢・土器、近代磁器（銅板鑄）、ガラス目薬瓶が出土した。破片が多い。時期：出土遺物から近代に求められる。

1区W-2号溝跡（遺構：Fig. 11, 卷頭写真 1, PL. 4 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 12）

位置：X91～93、Y175・176。北・南側が調査区外に続く。重複：D-9→本遺構→W-3。主軸方位：N-5°-E。規模：全長 [2.75] m、上端幅 5.74 m、下端幅 0.42 m、深さ 2.64 m。形態：北北東～南南西方向へ直線的に走行し、蒼海（44）W-2号溝跡につながると推測される。断面は箱築研状を呈する。総社砂層の層理面にあたる

壁面中位が抉れる。底面：ほぼ平坦。覆土：黒褐色砂質土が凹状に堆積する。10・11層は總社砂層ブロックを大量に含み、壁面中位の抉れに起因するものと予想される。中層に大型礫の混入が目立つ。上層に薄い砂層（3層）が堆積し、最上層は黒褐色土で埋め立てられる。遺物：微量で、縄文土器、土師器甕、須恵器壺・甕、かわらけ、瓦が出土した。いずれも破片である。かわらけ（1）は下層で検出された。時期：出土遺物から室町時代（15世紀後半～16世紀初頭）には埋没が始まり、近世に埋め立てられたものと推測される。備考：配置・形態・出土遺物などから蒼海城に関連する堀跡に想定される。

1区W-3号溝跡（遺構：Fig. 11, PL. 4）

位置：X91、Y175-176。北・南側が調査区外に続く。重複：W-2→本遺構。主軸方位：N-3°-E。規模：全長 [2.74] m、上端幅 0.24 ~ 0.30 m、下端幅 0.14 ~ 0.16 m、深さ 0.09 m。形態：北北東-南南西方向へ直線的に走行し、断面は弧状を呈する。覆土：W-2号溝跡最上層と同じ黒褐色土が埋没する。遺物：検出されなかった。時期：埋没状態から近世に埋め立てられたものと推測される。

4.1 区土坑墓

1区D-B-1号土坑墓（遺構：Fig. 10, PL. 4 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 13）

位置：X87・88、Y176。南側が調査区外に続く。重複：H-4→本遺構。主軸方位：不明。規模：長軸長（1.26）m、短軸長（1.01）m、深さ 0.10 m。形態：掘削を始めた時点でH-4号住居跡と混同しており、不明確である。平面は不整な楕円形を呈すると推測され、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。覆土：As-B を含む黒褐色土が一括埋没する。遺物：土坑の西側に寄って、北頭西顎横臥屈葬の人骨が検出された（VII章参照）。頭蓋骨片とわずかな頸椎片・四肢骨片がみられるのみで、残存状態は悪い。頭蓋骨の脇において古銭（宋錢「政和通宝」）が出土した。時期：出土遺物から中世に求められる。

1区D-B-2号土坑墓（遺構：Fig. 10, PL. 4 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 13）

位置：X84、Y175。北端が調査区外に続く。重複：D-4→本遺構。主軸方位：N-0°。規模：長軸長 [1.16] m、短軸長 0.98 m、深さ 0.35 m。形態：平面は長方形を呈し、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。覆土：總社砂層ブロックを多く含む黒褐色土・褐灰色土が急な勾配で傾斜堆積する。遺物：土坑のやや西側に寄って、北頭西顎横臥屈葬の人骨が検出された（VII章参照）。頭蓋骨・四肢骨・腰椎・寛骨が揃うものの、残存状態は良くない。出土遺物は微量で、須恵器壺・かわらけ、軟質陶器や、頭蓋骨の南東脇において古銭（宋錢「淳祐元宝」）が出土した。時期：出土遺物から室町時代（14世紀後半～15世紀前半）に求められる。

5.1 区土坑（遺構：Fig. 12, Tab. 1, PL. 5 / 遺物：Fig. 14, Tab. 4, PL. 13）

平面が円形・楕円形・長楕円形を呈する多様な土坑が認められ、長楕円形で底面に段をもつD-4・5・6が調査区北西側でまとまって検出された。土坑から出土した遺物は微量で、破片ばかりである。D-7号土坑では土器片に加えて密集する10点の小礫が出土した。小礫は粗質安山岩・安山岩・凝灰岩からなり、粗質安山岩が多い（60%）。また、打痕を擴するものが半分を占める。硬化面から出土した遺物と似ており、道路の補修坑など硬化面に関連することが予想される。各土坑の時期は、D-1・4~6・9号土坑がAs-B を含む覆土から中世以降に比定され、重複関係や配置からD-4~6・9号土坑は中世に限定される。出土遺物や重複関係からD-7・8号土坑は近世と判断した。

なお、各遺構の計測値などはTab. 1に示す。

Tab. 1 1区土坑一覧表

計測値(n)

遺構名	位置	規模(長・短・深)	平面形	断面形	出土遺物	重複・新旧関係	時期
D-1	X 88・Y 175	0.81・0.54・0.06	椭円形	逆台形		H-1→本遺構	中世以降
D-4	X 84・Y 175	[0.90]・0.36・0.15	長椭円形	逆台形		本遺構→D-B-2	中世
D-5	X 83・Y 175	0.84・0.45・0.33	長椭円形	逆台形			中世
D-6	X 84・Y 175	1.08・0.48・0.12	長椭円形	逆台形	常滑陶器		中世
D-7	X 84・Y 176	0.48・0.47・0.13	円形	逆台形	織多數・羽条・軟質陶器	本遺構→硬化面	近世
D-8	X 89・Y 176	[0.96]・0.96・0.21	不整円形	長方形	土師器環・甕・須恵器環・甕・灰釉陶器・かわらけ・近世陶器	本遺構→P-23・24	近世
D-9	X 93・Y 175	1.14・[0.93]・0.84	不整弧状	土師器甕		本遺構→W-2	中世

6. 1区ピット (遺構: Fig. 6・12, Tab. 2, PL. 1・5 / 遺物: Tab. 2)

確認数は多くない。覆土に As-B を含む B類が調査区中央 (X 87～X 90) にややまとまる。一方、As-C を含む C類は調査区中央から西側に散見される。箱状の掘り込みと柱端底をもつ P-7 は大型掘立柱建物の柱穴に想定され、南側に展開することが予想される。重複関係から平安時代 (9～10世紀) に比定される。ピットから出土した遺物はほとんどなく、P-5 から細片が出土しただけである。

なお、各遺構の計測値などは Tab. 2 に示す。

Tab. 2 1区ピット一覧表

計測値(cm)

遺構名	位 置	覆土分類	規 模 (長・短・深)	備 考	遺構名	位 置	覆土分類	規 模 (長・短・深)	備 考
P-1	X88・Y176	B	30・24・23		P-16	X88・Y176	B	32・26・14	H4→本遺構
P-2	X89・Y176	B	30・26・26	P3→本遺構	P-17	X86・Y176	B	42・36・41	
P-3	X89・Y176	B	25・25・15	本遺構→P2	P-18	X86・Y176	B	30・24・36	H5→本遺構
P-4	X88・Y175	B	22・16・14	P5→本遺構	P-19	X85・Y176	B	27・23・15	
P-5	X88・Y175	B	22・22・17	本遺構→P4 土師器片出土	P-20	X84・Y176	B	44・34・23	本遺構→硬化面
P-6	X88・Y175	B	25・24・21		P-21	X88・Y176	B	20・16・37	H2・4、P7→本遺構
P-7	X88・Y176	C	67・60・52	H4→本遺構→H2,P21	P-22	X85・Y176	C	67・54・31	
P-8	X88・Y175	B	31・30・23	P9→本遺構	P-23	X89・Y176	B	39・24・30	H8→本遺構
P-9	X88・Y175	B	24・19・36	本遺構→P-8	P-24	X89・Y176	B	21・20・18	H8→本遺構
P-10	X86・Y175	C	34・32・29	H3・5→本遺構	P-25	X89・Y175	B	22・18・69	H1→本遺構
P-11	X87・Y176	B	34・28・34		P-26	X89・Y175	C	30・28・21	H1→本遺構
P-12	X87・Y176	B	36・27・15		P-27	X91・Y176	B	22・21・28	
P-13	X87・Y176	B	34・34・28		P-28	X88・Y176	C	30・24・41	本遺構→H2
P-14	X87・Y176	B	62・40・25		P-29	X88・Y176	C	38・22・36	本遺構→H2
P-15	X87・Y176	B	36・36・25		覆土分類 B: As-B を含む。 C: As-C を含む。 「」は純粋砂層ブロックを多く含むことを示す。				

7. 1区硬化面 (遺構: Fig. 12, PL. 5 / 遺物: Fig. 14, Tab. 4, PL. 13)

調査区南東側(X83～85、Y176)のAs-B混入土層であるIII d 層下で帯状に硬化する範囲が確認され、道路跡に想定される。西南西～東北東方向(N-5°E)に走向し、全長5.44m・幅1.12～1.62mに及ぶ。掘り方は見受けられないが、倒木痕と重複することから不明確である。重複するD-7号土坑が関係する可能性がある。遺物は微量で、硬化面の北東側で砾と共に土師器・須恵器甕・甕・陶器塊の破片が出土した。時期は出土遺物から近世に比定される。

8. 1区遺構外出土遺物 (遺物: Fig. 14, Tab. 4, PL. 13)

遺構外として、縄文土器(前期後～末葉)、石器(スクレイパー)、土師器環・甕・軟質陶器・白磁・近世陶器が少量検出された。また調査区南西端の倒木痕用トレーナーでは瓦・磨石とともに多量の砾(19点)が出土している。砾は粗質安山岩・安山岩・砂岩・石英が認められ、粗質安山岩がほとんどを占める(74%)。また、砾には打痕・磨痕を擁するものが多く(13点)、D-7号土坑の出土遺物に似る。倒木痕中に判別できなかった硬化面に関連する掘り込みが包蔵されていた可能性がある。

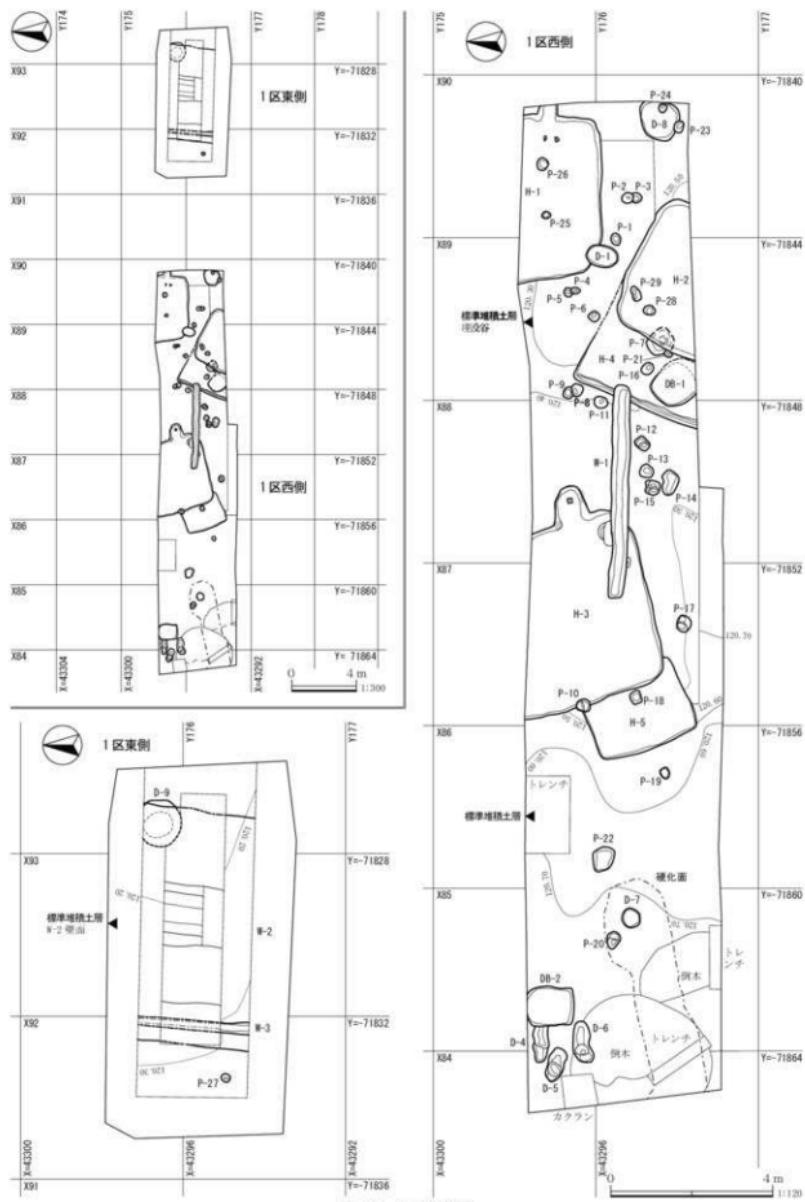
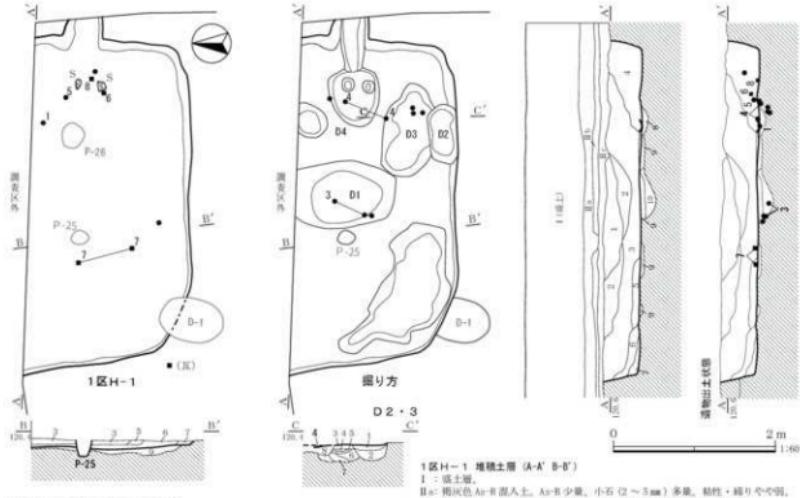
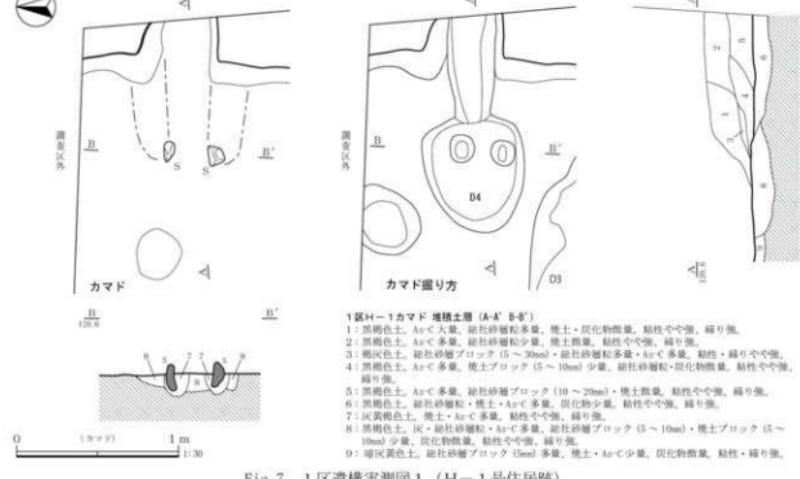
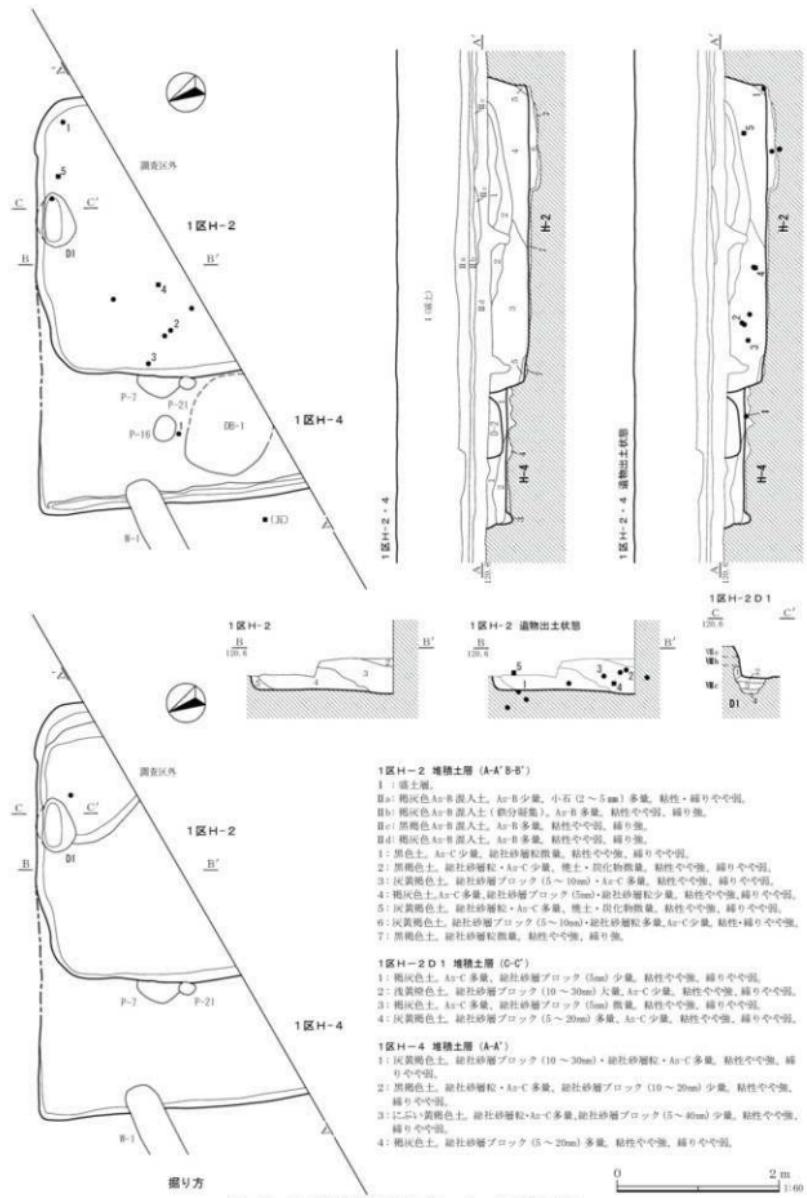


Fig. 6 1区全体図



- 1: 黑色土。粒状砂砾多量。Ar-C 多量。粒状砂砾ブロック (5mm) 少量。粘性や少強、弱り強。
- 2: 黑色土。Ar-C 多量。粒状砂砾ブロック (5mm)。粒状砂砾少量。粘性や少強。弱り強。
- 3: 深灰褐色土。粒状砂砾ブロック (5 ~ 20mm)。粒状砂砾層・Ar-C 多量。微土量。
- 4: 深灰褐色土。Ar-C 多量。粒状砂砾少量。土性・微土量。粘性や少強。弱り強。
- 5: 深灰褐色土。粒状砂砾ブロック (5 ~ 10mm)。Ar-C 多量。粒状砂砾少量。粘性や少強。弱り強。
- 6: 黑色土。Ar-C 多量。粒状砂砾少量。粘性や少強、弱り強。
- 7: 深灰褐色土。粒状砂砾・Ar-C 多量。粘性や少強、弱り強。
- 8: 黑色土。粒状砂砾層・Ar-C 多量。粒状砂砾ブロック (5mm) 少量。粘性や少強、弱り強。
- 9: 深灰褐色土。粒状砂砾少量。土性・Ar-C 多量。粘性や少強。弱り強。
- 10: 深灰褐色土。Ar-C 多量。粘性や少強。弱り強。
- 11: 黑色土。Ar-C 多量。粘性や少強、弱り強。
- 12: 深灰褐色土。Ar-C 少量。粒状砂砾微量。粘性や少強、弱り強。
- 13: 深灰褐色土。Ar-C 大量。粒状砂砾微量。土性・微土量。粘性や少強。弱り強。
- 14: 深灰褐色土。Ar-C 多量。粒状砂砾少量。土性・微土量。粘性や少強。弱り強。
- 15: 深灰褐色土。粒状砂砾ブロック (5 ~ 10mm)。Ar-C 多量。粒状砂砾少量。粘性や少強。弱り強。
- 16: 黑色土。Ar-C 多量。粘性や少強、弱り強。
- 17: 黄褐色土。粒状砂砾・Ar-C 多量。粘性や少強、弱り強。
- 18: 黄褐色土。Ar-C 多量。粘性や少強、弱り強。
- 19: 深灰褐色土。粒状砂砾微量。粘性や少強、弱り強。
- 20: 深灰褐色土。Ar-C 多量。粘性や少強、弱り強。





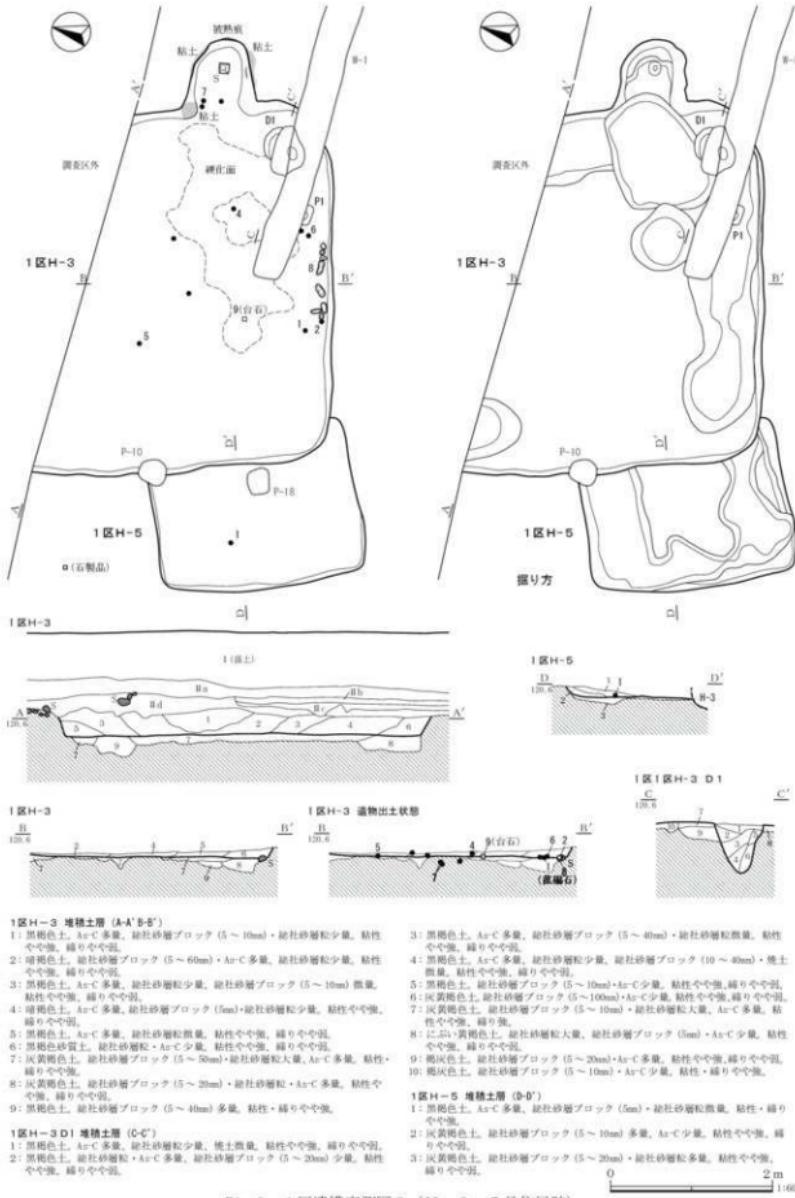


Fig. 9 1区構造実測図3 (H-3 · 5号居住跡)

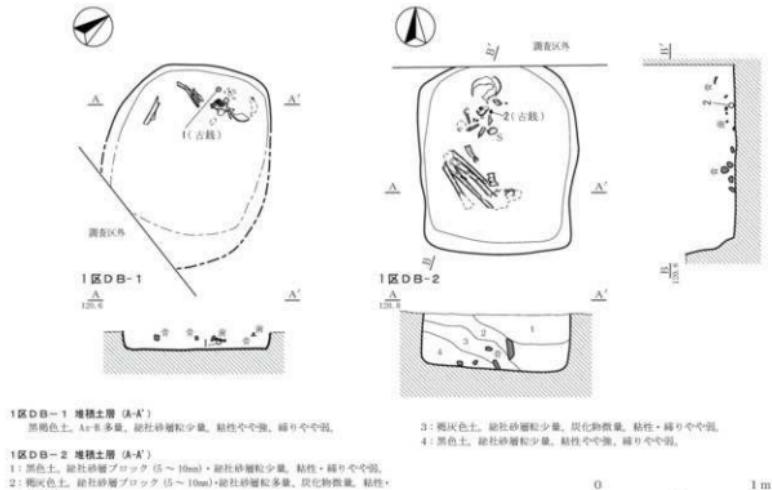
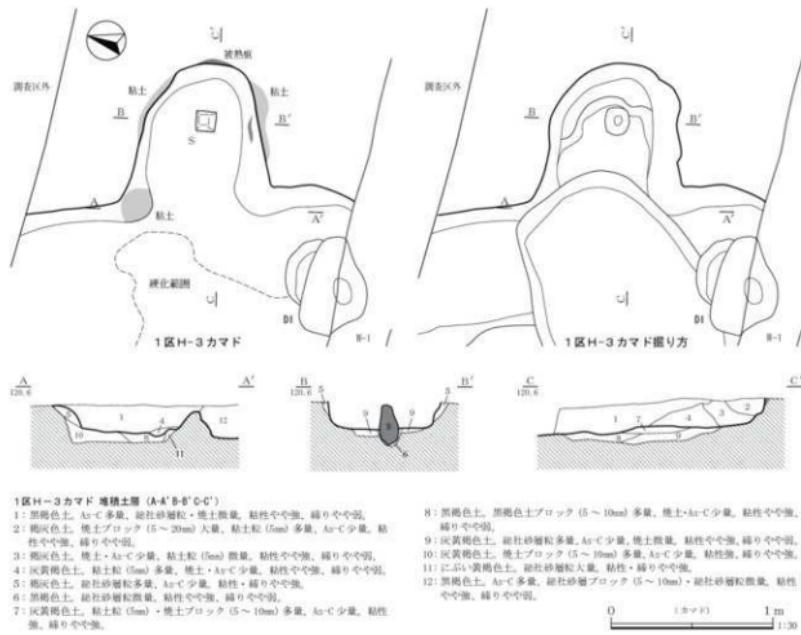


Fig. 10 1区遺構実測図4 (H-3号住居跡、DB-1・2号土坑墓)

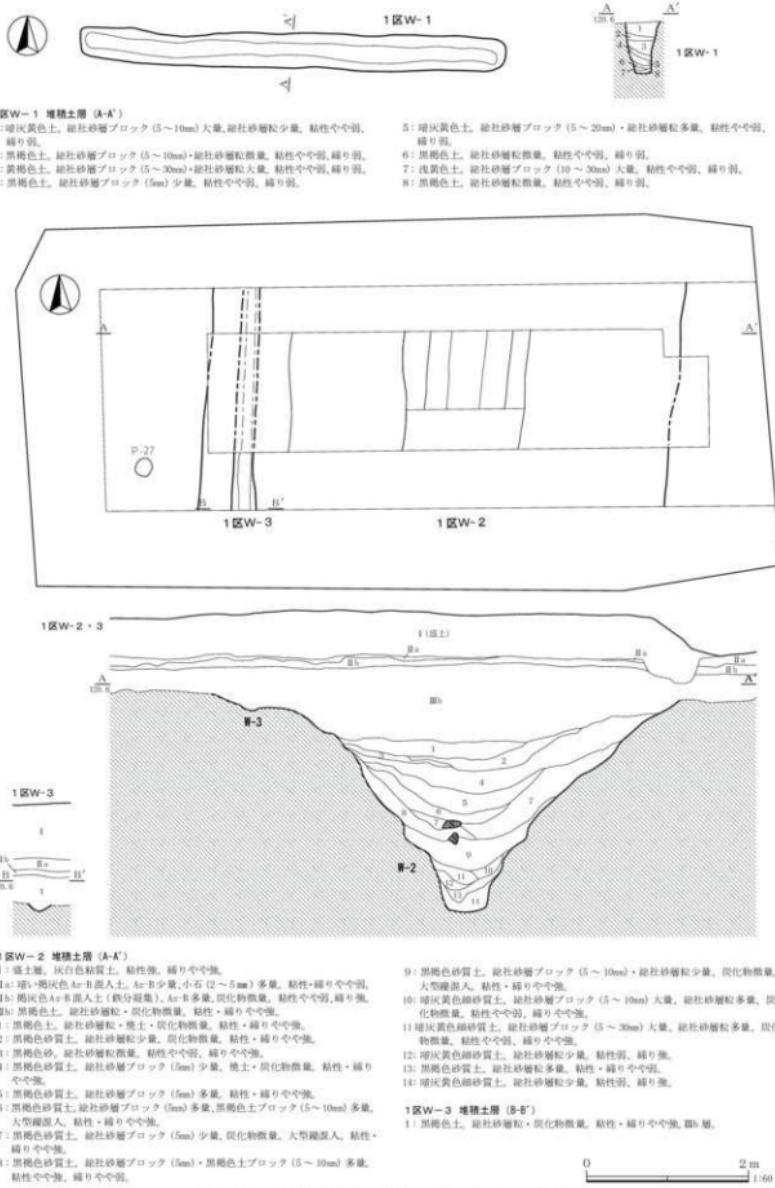
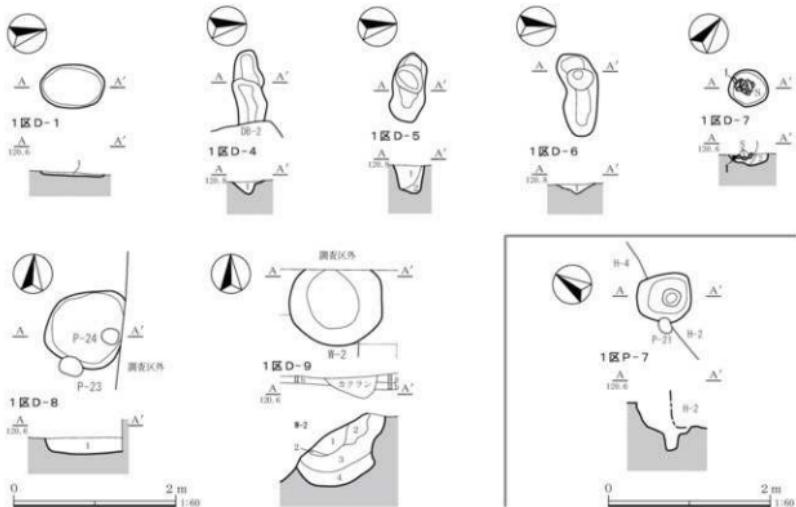


Fig.11 1区遺構実測図5 (W-1・2・3号溝跡)



1区D-1 堆積土層 (A-A')

- 1: 黒褐色土。総社砂層粘多量、As-H 多量。地土・炭化物微量。粘性やや弱、繊りやや強。

1区D-4 堆積土層 (A-A')

- 1: 黒褐色土。総社砂層ブロック (5~20mm)・総社砂層粒・As-H・As-C 少量。炭化物微量。粘性・繊りやや強。

1区D-5 堆積土層 (A-A')

- 1: 黒褐色土。総社砂層ブロック (5~30mm) 多量。総社砂層粒・As-H・As-C 少量。粘性・繊りやや強。

1区D-6 堆積土層 (A-A')

- 1: 黒褐色土。総社砂層ブロック (5~20mm) 多量。粘性弱。繊りやや強。

1区D-7 堆積土層 (A-A')

- 1: 黒褐色土。総社砂層ブロック (5mm) 少量。粘性・繊りやや強。
2: 増殖土層。総社砂層粘多量、総社砂層ブロック (5mm) 少量。粘性・繊りやや強。

1区D-8 堆積土層 (A-A')

- 1: 黒褐色土。総社砂層粘多量、総社砂層ブロック (5mm)・As-H・As-C 少量。地土・炭化物微量。粘性やや強。

1区D-9 堆積土層 (A-A')

- 1: 黄褐色土。総社砂層粘多量、総社砂層ブロック (5~10mm)・総社砂層粒・As-H 少量。粘性・繊りやや強。
2: 硫化鉄黄色土質。総社砂層ブロック (5~10mm) 大量。As-H 少量。炭化物微量。粘性・繊りやや強。
3: 黄褐色砂質土。As-H 少量。総社砂層粘多量。粘性・繊りやや強。
4: 黑褐色砂質土。総社砂層粒・As-H 少量。粘性・繊りやや強。

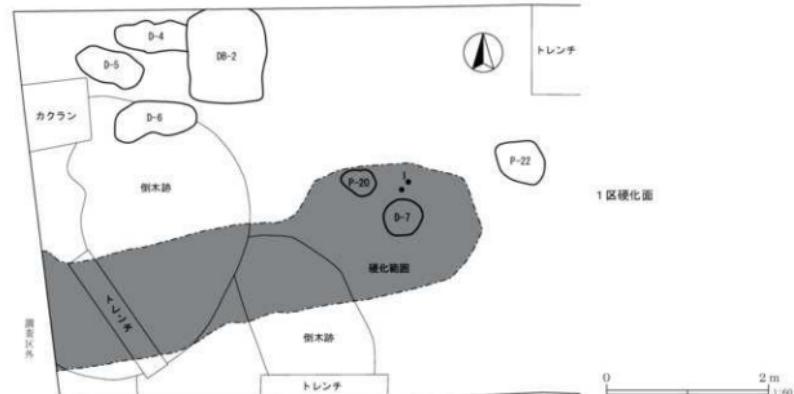


Fig. 12 1区遺構実測図6 (D-1・4・5・6・7・8・9号土坑、P-7号ビット、硬化面)

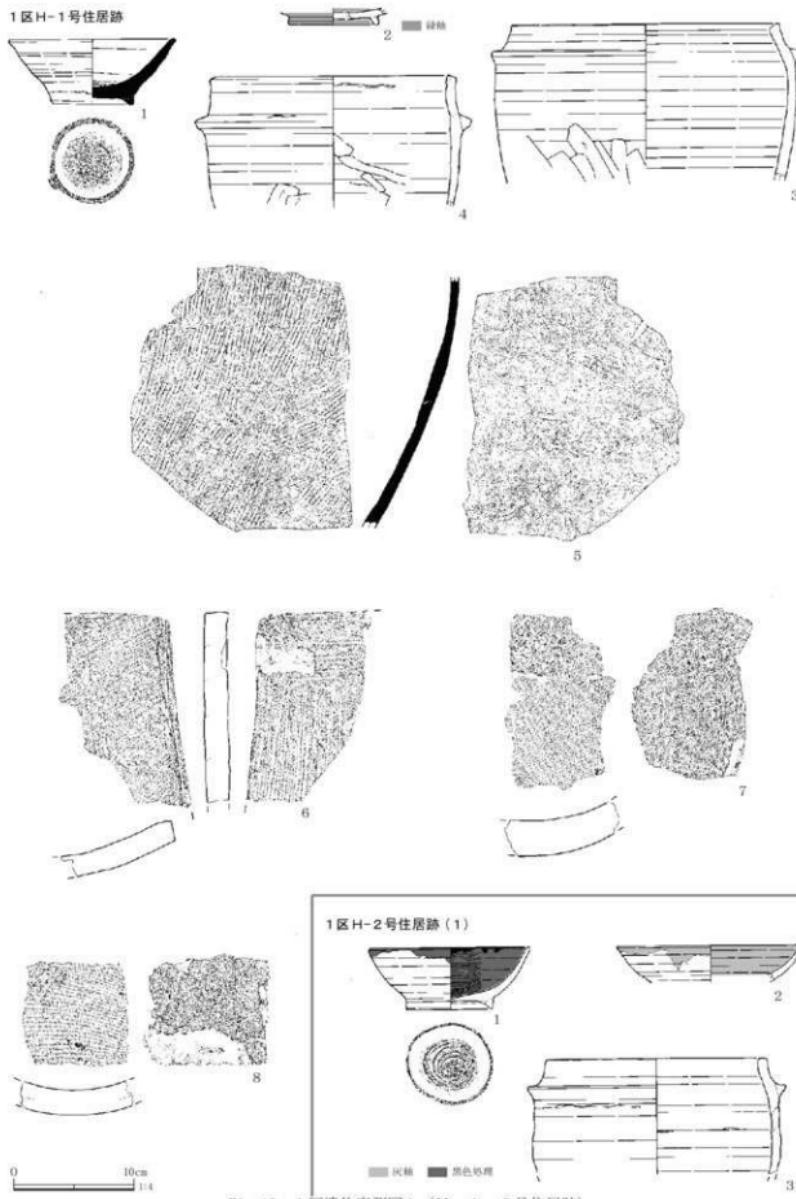


Fig. 13 1区遺物実測図1 (H-1・2号住居跡)

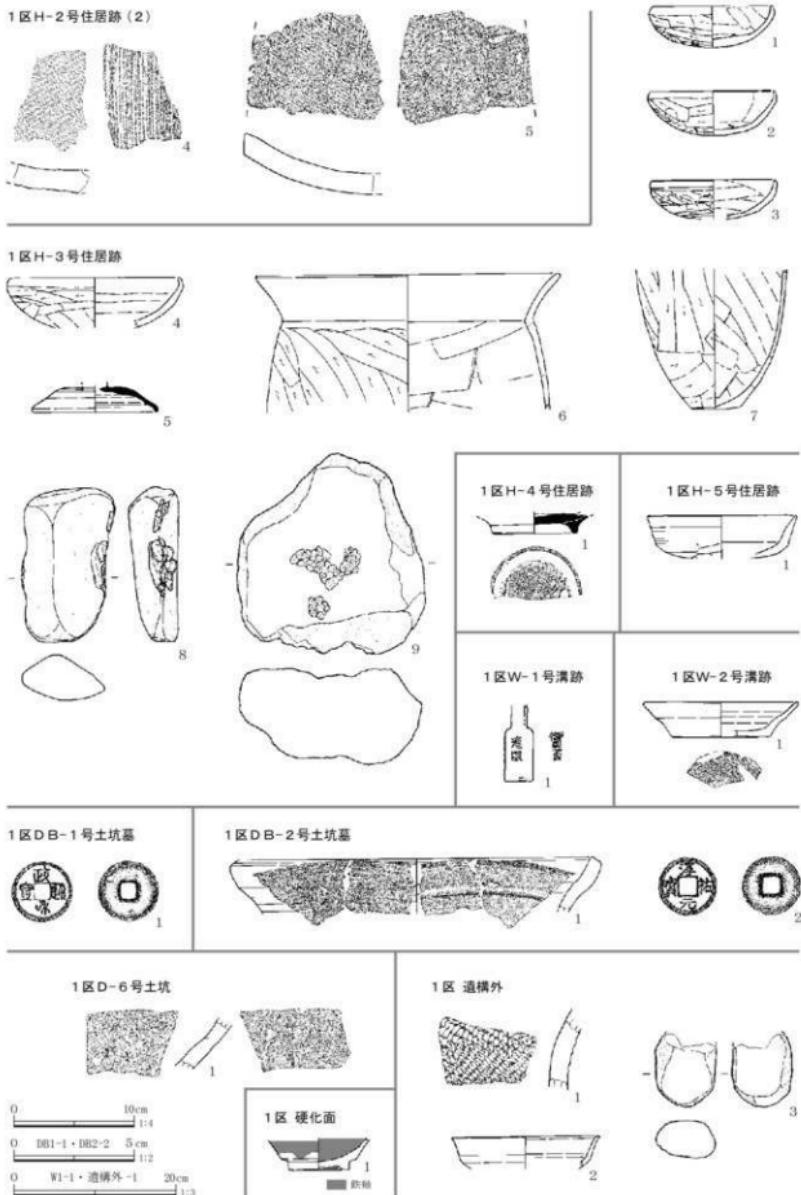


Fig. 14 1区遺物実測図 2 (H-2～5号住居跡、W-1・2号溝跡、DB-1・2号土坑墓、D-6号土坑、硬化面、道横外)

Tab. 3 1区出土遺物観察表(1)

計測値(cm・g)

番号	種別	計測値	①焼成 ②色調(外/内) ③胎土 ④残存	特徴	備考
1KH-1 1	須恵器 塊	口径: (13.7) 底径: 6.8 器高: 5.4	①還元焰 ②灰黄/灰黄褐 ③白色粒子 ・角閃石 ④4/5	外面: 口縁へ体部回転ナデ。底部回転、 糞切後高台貼付。 内面: 回転ナデ。	
1KH-1 2	綠釉陶器 塊	口径: - 底径: (7.3) 器高: -	①還元焰 ②明緑灰 ③黒色粒子 ④底部1/5	外面: 回転ナデ。底部回転糞切後高台 貼付。緑釉。 内面: 回転ナデ。緑釉。	器面剥落。
1KH-1 3	羽釜	口径: (22.0) 底径: - 器高: [12.9]	①還元焰 ②褐灰/灰黄褐色 ③石英・ 白色粒子 ④口縁へ胴部破片	外面: 回転ナデ後胴部タケズリ。 内面: 回転ナデ。	
1KH-1 4	羽釜	口径: (20.2) 底径: - 器高: [10.8]	①還元焰 ②灰/灰白 ③白色粒子・ 石英 ④口縁へ胴部破片	外面: 回転ナデ後胴部タケズリ。 内面: 回転ナデ後部分にナデ。	
1KH-1 5	須恵器 甕	長さ: - 幅: - 厚さ: -	①還元焰 ②灰黄/黄灰 ③白色粒子 ④胴部破片	外面: 平行タキ目。 内面: 同心円文當て具痕後丁寧なナデ。	
1KH-1 6	瓦 平瓦	長さ: [16.0] 幅: [10.9] 厚さ: 2.0	①還元焰 ②灰白/黄灰 ③黒色粒子・ 抛光粒子 ④破片	凹面: 粘土板糞切痕→布目痕。 凸面: 粘土板糞切痕→窪目タキ。砂 付着。	秋間窯跡群座。
1KH-1 7	瓦 平瓦	長さ: [14.8] 幅: [10.1] 厚さ: 2.9	①還元焰 ②暗灰/灰 ③長石 ④破 片	凹面: 布目痕。 凸面: ナデ。	凸面の一部に胎土 付着。藤岡・吉井 窯跡群座。
1KH-1 8	瓦 平瓦	長さ: [9.5] 幅: [10.6] 厚さ: 2.1	①還元焰 ②明褐/黄灰 ③長石・赤 色粒子 ④破片	凹面: 粘土板糞切痕→布目痕。 凸面: ナデ。	凹面に粘土付着。 藤岡・吉井窯跡群 座。
1KH-2 1	須恵器 塊	口径: 13.1 底径: 7.0 器高: 5.1	①酸化焰 ②棕/黑 ③褐色粒子・白 色粒子・石英 ④完形	外面: 回転ナデ。底部回転糞切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ後ミガキ。黒色処理。	内外面口縁部に墨 色付着。
1KH-2 2	灰釉陶器 塊	口径: (15.4) 底径: - 器高: [3.0]	①還元焰 ②灰白 ③- ④口縁部破 片	外面: 回転ナデ。灰釉。 内面: 回転ナデ。灰釉。	釉面は濁け抜け。
1KH-2 3	羽釜	口径: (18.0) 底径: - 器高: [9.5]	①還元焰 ②灰褐 ③白色粒子・石英、 角閃石 ④口縁へ胴部破片	外面: 回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	外面にスス付着。
1KH-2 4	瓦 平瓦	長さ: [9.0] 幅: (6.4) 厚さ: 1.8	①還元焰 ②灰 ③白色粒子・石英・ 長石 ④破片	凹面: 布目痕。 凸面: 窪目タキ。砂付着。	秋間窯跡群座。
1KH-2 5	瓦 平瓦	長さ: (9.9) 幅: [11.5] 厚さ: 1.8	①還元焰 ②褐灰 ③長石 ④破片	凹面: 粘土板糞切痕→布目痕→一部ナ デ。 凸面: ナデ。	藤岡・吉井窯跡群 座。
1KH-3 1	土師器 壺	口径: 9.7 底径: - 器高: 3.4	①普通 ②橙 ③白色粒子・石英・角 閃石 ④完形	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。	
1KH-3 2	土師器 壺	口径: 10.2 底径: - 器高: 3.6	①普通 ②橙 ③角閃石・石英・赤 色粒子 ④完形	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ユビナ デ。下位ケズリ。 内面: ヨコナデ。	
1KH-3 3	土師器 壺	口径: (10.1) 底径: - 器高: [3.2]	①普通 ②に赤褐/灰褐 ③角閃石・ 白色粒子 ④1/5	外面: 口縁部ヨコナデ。体部上位ユビ ナデ。下位ケズリ。 内面: ヨコナデ。	
1KH-3 4	土師器 壺	口径: (13.7) 底径: - 器高: [3.1]	①普通 ②に赤褐/橙 ③角閃 石・白色粒子 ④1/5	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ケズリ後 ナデ。 内面: ヨコナデ。	
1KH-3 5	須恵器 蓋	口径: (10.1) 底径: - 器高: [2.2]	①還元焰 ②灰 ③白色粒子 ④1/3	外面: 回転ナデ後天井部回転ヘラケズ リ。 内面: 回転ナデ。	
1KH-3 6	土師器 甕	口径: (25.0) 底径: - 器高: [11.1]	①普通 ②に赤褐/灰褐 ③白色 粒子・長石・石英・赤色粒子 ④口縁 へ胴部破片	外面: 口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。 内面: 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	内面胴部にヨコナ デ。

Tab. 4 1 区出土遺物観察表（2）

計測値(cm・g)

番号	種別	計測値	①焼成 ②色調（外 / 内） ③胎土 ④残存	特徴	備考
1区H-3 7	土師器 甕	口径：— 底径：4.0 器高：[1.4]	①普通 ②にぶい赤褐色 / 灰褐色 ③角閃石・白色粒子・石英 ④胴～底部2/3 内面：ナデ。	外面：ケズリ。 内面：ナデ。	外面に墨斑。
1区H-3 8	石製品 瓦編石	長さ：12.4、幅：6.6、厚さ：3.6、重量：492.4、石材：砂岩。右側縁に直接打撃による剝離、両側縁に敲打痕。			
1区H-3 9	石製品 台 石	長さ：15.8、幅：15.2、厚さ：7.8、重量：1808.0、石材：安山岩。表面に磨痕→敲打痕。一部折損。			
1区H-4 1	須恵器 塊	口径：— 底径：(7.0) 器高：[1.6]	①還元焰 ②灰 ③白色粒子・黒色粒子 ④底部1/2 破片	外面：回転ナデ。底部回転糸切後高台貼付。 内面：回転ナデ。	
1区H-5 1	土師器 环	口径：(12.3) 底径：— 器高：[3.5]	①普通 ②橙 ③赤色粒子・石英 ④破片	外面：口縁部ヨコナデ。体部ケズリ後ナデ。 内面：ヨコナデ。	内外面にスス付着。
1区W-1 1	ガラス製品 小 瓶	口径：— 底径：1.7 器高：[4.7]	①— ②透明 ③— ④口縁部折損。	ガラスに気泡あり。 局部「碑目案」 「淹深」。	
1区W-2 1	かわらけ	口径：(12.7) 底径：(8.1) 器高：2.9	①酸化焰 ②にぶい黄褐色 ③黒色粒子・石英 ④破片	外面：回転ナデ。底部回転糸切後未調整。 内面：回転ナデ。	
1区BD-1 1	古 瓦	径：2.5、内部長0.6、厚さ：0.1、重量：2.3g。宋銘「政和通宝」。1111年初鉄。			
1区BD-2 1	内耳鏡	口径：(36.4) 底径：— 器高：[4.5]	①酸化焰 ②黑色 ③白色粒子・石英 ④口縁部破片 長石	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	
1区BD-3 2	古 瓦	径：2.4、内部長0.7、厚さ：0.1、重量：2.6g。宋銘「淳祐元宝」。1241年初鉄。			
1区D-6 1	陶 器 甕	長さ：— 幅：— 厚さ：—	①還元焰 ②暗赤褐色 / 灰褐色 ③長石 ④破片	外面：ナデ。 内面：ナデ。自然釉。	常滑。
1区硬化面 1	陶 器 塊	口径：— 底径：5.6 器高：[2.6]	①普通 ②暗赤褐色 / 灰白色 ③— ④底部完形 白色粒子	外面：回転ナデ。底部削り出し高台、鉄輪。 内面：回転ナデ。鉄輪。	瀬戸美濃系天目系焼。
1区遺構外 1	調紋土器 深 脚	長さ：— 幅：— 厚さ：—	①良好 ②褐赤褐色 / 橙 ③石英・長石・白色粒子 ④破片	外面：単筋羽状調紋 (RL・LR)。 内面：横模ナデ。	前期後～末葉。
1区遺構外 2	磁 器 碗	口径：(12.2) 底径：— 器高：[2.6]	①還元焰 ②灰白 ③黒色粒子 ④破片	外面：回転ナデ。釉。 内面：回転ナデ。釉。	H-2出土。
1区遺構外 3	石 器 磨 石	長さ：[5.7]、幅：4.9、厚さ：3.0、重量：74.1、石材：角閃石安山岩。内外面・側面の一部に顕著な磨痕。			倒木痕出土。

VI 2区の遺構と遺物

1. 2区の概要

2区は染谷川左岸の自然堤防に近い低地に位置し、現地表面でも段差が見受けられた。南東側に傾斜し、調査範囲約20m間で東側が25cmほど低くなっている。調査区の東側は近世以降の造成により総社砂層まで削平されていたが、西側には漸移層が残存しており、遺構がかろうじて壊されずにいた。

遺構は、堅穴住跡12軒（H-1～12）、溝跡1条（W-1）、土坑9基（D-1～7・9・10、D-8欠番）、ピット84基（P1～84）が確認され、時期は平安時代を主体とする。H-9号住跡が古墳時代中～後期、H-1～8・10・11号住跡が平安時代（9・10世紀）、W-1号溝跡、D-3～7・9・10号土坑が中・近世に比定される。住跡は、主軸方向が概して南東方向を指す傾向にあるが、平安時代でも後出のもの（10世紀代）は真東に近い向きに配置されていた。

遺物は収納箱（ $60 \times 44 \times 15$ cm）で2箱分が検出された。繩文土器、石器、土師器、須恵器、羽釜、灰釉陶器、軟質陶器、中世陶器、近世陶磁器類、瓦、石製品、鉄製品などが出土し、検出遺構を反映して土師器や須恵器がほとんどを占める。

2. 2区堅穴住居跡

2区H-1号住居跡（遺構：Fig. 16, PL. 7 / 遺物：Fig. 22, Tab. 7, PL. 13）

位置：X64、Y187。北側が調査区外に続く。重複：P-50・84→本遺構→H-2、P-3・7・8。主軸方位：N-107°-E。規模：主軸長2.70 m、副軸長[1.07] m、深さ0.13 m。面積：[1.88] m²。形態：平面は方形ないし長方形を呈すると推測される。床：浅い掘り方に暗灰黄色土を充填して床とする。床面は東側がやや低くなり、一部が硬化する。床下には南壁に沿って土坑状の掘り込みが複数穿たれていた。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁に敷設し、燃焼部が堅穴の外側に位置する。袖部を灰褐色粘土で築き、内側に凝砂岩による芯材が据えられる。削平により不明確であるが、幅の広い煙道が検出された。なお、燃焼部の底面下に浅い掘り込みが穿たれる。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土が西側から緩く傾斜堆積する。カマド前で炭化物がまとまって出土した。堅穴の南隅では薄い粘土の堆積が見受けられた。ただし、識別できなかった住居跡の床下土坑に伴う可能性も否めない。遺物：多量で、繩文土器、土師器壊・甕・須恵器壊・壇・甕・壺、灰釉陶器壊、羽釜、瓦が出土した。破片が多く、下層～床面上、カマド内、掘り方に散在する。時期：重複関係や出土遺物から平安時代（9世紀後半）に求められる。

2区H-2号住居跡（遺構：Fig. 17, 巻頭写真2, PL. 7 / 遺物：Fig. 22, Tab. 7・8, PL. 13）

位置：X63・64、Y187・188。北側が調査区外に続く。重複：H-1・5・11、P-46・47→本遺構→D-2、P-4・7・18・19・45・61・81。主軸方位：N-98°-E。規模：主軸長2.95 m、副軸長[18.4] m、深さ0.21 m。面積：[5.43] m²。形態：平面は方形ないし長方形を呈すると推測される。発掘調査時には、H-1・5・11号住居跡と一部混同していた。床：浅い掘り方に黒褐色土を充填し、硬化する貼床が施される。床下土坑（D 1）が穿たれ、灰白色粘土が埋没していた。P 1脇の床下でも灰白色粘土が認められた。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁に敷設し、燃焼部が堅穴の外側に位置する。焚口右側に粗質安山岩による芯材が据えられていた。燃焼部に頗著な被熱痕が残る。なお、カマド前の床下に浅い掘り込みが穿たれる。貯蔵穴：南東側にピット状のP 1が設えられる。柱穴：検出されなかった。覆土：褐灰色土・黒褐色土が緩く傾斜堆積する。上層で炭化物がまとまって出土した。遺物：多量で、繩文土器、土師器壊・甕・壺・須恵器壊・甕・瓦が出土した。カマドの周辺に集中し、残存状態の良好な須恵器壊（1・2）、同一個体の須恵器壊片（4）、羽釜片、瓦片（5）などが検出されている。P 1内でも羽釜片がみられた。時期：出土遺物から平安時代（10世紀前半）に求められる。

2区H-3号住居跡（遺構：Fig. 18, PL. 8 / 遺物：Fig. 22・23, Tab. 8, PL. 14）

位置：X63・64、Y188・189。重複：H-5・6・8、P-30～32→本遺構→H-12, W-1, D-1、P-1・2・5・6・20・49・62～64・71・82。H-4。主軸方位：N-90°-E。規模：主軸長3.52 m、副軸長3.42 m、深さ0.04 m。面積：12.04 m²。形態：削平や重複により不明確だが、平面は方形を呈する。床：南側は削平されている。やや浅い掘り方に黒褐色土を充填し、硬化する貼床が中央～北側に施される。床下には土坑（D 3・4）や浅いピット（P 1・2）が穿たれていた。壁周溝：北・南・西壁の一部に施される。カマド：東壁の中央に敷設し、燃焼部が堅穴の外側に位置する。焚口右側に凝砂岩による芯材が据えられていた。被熱した礫（安山岩）も出土しており、構築材の一部であったと予想される。なお、燃焼部の底面下に浅い掘り込みが穿たれていた。貯蔵穴：南東側で平面が幅の狭い長方形を呈する土坑状のD 2が、西壁際中央で段を有する土坑状のD 1が設えられる。D

1は貼床下にあり、H-6号住居跡に伴う可能性がある。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土が堆積する。遺物：中量で、土師器壺・甕、須恵器壺・壇・甕、灰釉陶器、瓦、鉄製品（釘）、石器（剝片）が出土した。残存状態の良好な須恵器壺・甕が床面上や貯蔵穴内から検出されている（2・4・5・6）。時期：出土遺物から平安時代（10世紀前半）に求められる。備考：検出状況から、本住居跡はH-6号住居跡の建て替えで、カマドは従前のものの隣に移設されたと推測される。

2区H-4号住居跡（遺構：Fig. 16, PL. 8 / 遺物：Fig. 23, Tab. 8, PL. 14）

位置：X62-63、Y188。北・西側が調査区外に続く。重複：H-5→本遺構→P-33・43・44・78。H-3。主軸方位：N-88°-E。規模：主軸長[1.76]m、副軸長[1.17]m、深さ0.10m。面積：[2.06]m²。形態：平面は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると推測される。床：浅い掘り方に黒褐色土を充填して床とする。床下の南東隅に灰白色粘土が認められた。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁に敷設し、燃焼部が堅穴の外側に位置する。上層に顯著な焼土がみられた。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土・灰黃褐色土が急な勾配で傾斜堆積する。遺物：少量で、土師器甕、須恵器壺・甕、羽釜、瓦が出土した。いずれも破片ばかりで、カマド周辺に集中する。時期：重複関係や出土遺物から平安時代（10世紀）に求められる。

2区H-5号住居跡（遺構：Fig. 17, PL. 8 / 遺物：Fig. 23, Tab. 8, PL. 14）

位置：X63、Y187・188。北側が調査区外に続く。重複：H-4、P-32→本遺構→H-2・3、D-6・9・10、P-18・19・20・61・81。主軸方位：N-133°-E。規模：主軸長[2.27]m、副軸長[2.54]m、深さ0.10m。面積：[5.77]m²。形態：平面は方形ないし長方形を呈すると推測される。発掘調査時はH-2号住居跡と一部混同していた。床：遺構確認面がほぼ床面に相当する。浅い掘り方に黒褐色土・褐色土を充填して床とする。床下土坑（D 1・2）が穿たれ、D 1には粘土が埋没していた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：南隅にピット状のP 1（深さ32cm）が設えられる。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土が堆積する。遺物：中量で、土師器甕、須恵器壺・壇、砥石（流紋岩）が出土した。P 1内に集中する。時期：出土遺物から平安時代（9世紀後半）に求められる。

2区H-6号住居跡（遺構：Fig. 18, PL. 8 / 遺物：Fig. 22・23, Tab. 8, PL. 14）

位置：X63・64、Y188。重複：H-7→本遺構→H-3。主軸方位：N-90°-E。規模：不明。面積：不明。形態：重複により、カマドのみ確認した。床：検出されなかった。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁に敷設される。煙道が設けられる。貯蔵穴：重複するH-3号住居跡D 1が本住居跡に伴う可能性がある。柱穴：検出されなかった。覆土：不明。遺物：微量で、土師器甕片、須恵器环片が出土した。時期：H-3号住居跡に建て替えられる前の住居跡である可能性があり、平安時代（10世紀前半）に求められる。

2区H-7号住居跡（遺構：Fig. 19, PL. 9 / 遺物：Fig. 23, Tab. 8, PL. 14）

位置：X63・64、Y188・189。南側が調査区外に続く。重複：H-10→本遺構→W-1。H-3・6、P-6・23～25・52～57・59・60・66～68・75・83。主軸方位：不明。規模：主軸長[2.78]m、副軸長不明、深さ0.13m。面積：不明。形態：削平や重複のため不明。発掘調査時はH-10号住居跡と混同していた。床：浅い掘り方に褐色土を充填して床とする。床下土坑（D 1・4）が穿たれ、明褐色粘土が埋没していた。壁周溝：検出されなかった。カマド：東壁に敷設し、燃焼部が堅穴の外側に位置する。H-10号住居跡の覆土中に位置することから判別に困難をきたしたが、多量に含まれる焼土を目安とした。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土・灰褐色土が傾斜堆積する。遺物：中量で、土師器甕、須恵器壺・壇・壺、灰

軸陶器塊が出土したものの、H-7号住居跡と一部混同している。時期：出土遺物から平安時代（10世紀前半）に求められる。

2区 H-8号住居跡（遺構：Fig. 19, PL. 9 / 遺物：Fig. 23, Tab. 8・9, PL. 14）

位置：X62・63、Y188・189。南側が調査区外に続く。重複：H-9、P-65→本遺構→H-3、P-62～64。主軸方位：N-74°-E。規模：主軸長〔3.02〕m、副軸長〔1.53〕m、深さ0.16m。面積：〔1.84〕m²。形態：重複のため不明瞭だが、平面は方形ないし長方形を呈すると推測される。発掘調査時は本住居跡より古いH-9号住居跡と一部混同していた。床：やや浅い掘り方に黒褐色土を充填し、硬化する貼床が一部に施される。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土が凹状に堆積する。遺物：中量で、土師器壺・鉢・甕、須恵器壺・塊・甕・壺・壺、灰釉陶器塊、瓦、石器（剥片）が出土したものの、H-9と一部混同している。時期：出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀前半）に求められる。

2区 H-9号住居跡（遺構：Fig. 19, PL. 9 / 遺物：Fig. 23, Tab. 9, PL. 15）

位置：X62・63、Y188・189。南・西側が調査区外に続く。重複：本遺構→H-8、W-1。主軸方位：N-78°-E。規模：主軸長〔2.05〕m、副軸長〔1.88〕m、深さ0.42m。面積：〔3.85〕m²。形態：平面は方形ないし長方形を呈すると推測される。床：やや深い掘り方にぶい黄褐色土を充填して床とする。P1脇で溝状の掘り込みが見受けられた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：深いP1が主柱穴に想定される。覆土：おもに黒褐色土が凹状に堆積する。上層で焼土が狭い範囲で見付かった。また、下層で炭化物がまとまって出土している。遺物：土師器壺・甕、須恵器壺・塊・甕が出土したものの、重複するH-8と一部混同している。P1脇の床面上で、接合する土師器甕片（1）が検出された。時期：出土遺物から古墳時代中期～後期（5世紀～6世紀初頭）に求められる。

2区 H-10号住居跡（遺構：Fig. 19, PL. 9 / 遺物：Fig. 23, Tab. 9, PL. 15）

位置：X63・64、Y188・189。南側が調査区外に続く。重複：本遺構→H-6・7、W-1。P-23～25・52～60・66・67・70・83。主軸方位：N-114°-E。規模：主軸長3.43m、副軸長〔3.44〕m、深さ0.13m。面積：〔9.23〕m²。形態：削平や重複のため不明瞭だが、平面は主軸が短い長方形を呈すると推測される。発掘調査時はH-7号住居跡と混同していた。床：総社砂層の漸移層を地床とする。床下土坑（D 2・3・5）が穿たれ、D 2・3には明灰褐色粘土が埋没していた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：黒褐色土が堆積する。遺物：中量で、土師器甕・小型甕、須恵器壺・塊・甕・壺・甕、瓦、鐵製品（釘）が出土したものの、H-7号住居跡と一部混同している。床下土坑（D 3）で土師器甕片・須恵器塊（2）・瓦片（5）がまとまって検出された。時期：出土遺物から平安時代（9世紀後半）に求められる。

2区 H-11号住居跡（遺構：Fig. 17, PL. 7・9 / 遺物：Fig. 23, Tab. 9, PL. 15）

位置：X63・64、Y188。重複：本遺構→H-2、P-48・49。主軸方位：不明。規模：不明。面積：不明。形態：削平により、床下土坑のみ確認した。発掘調査時にはH-2号住居跡と混同していた。床：床下に土坑（D 1）が穿たれたものと推測され、D 1には赤灰色粘土が埋没していた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：不明。遺物：微量で、D 1内で須恵器塊片・羽釜片が出土した。時期：出土遺物から平安時代（10世紀）に求められる。

2区H-12号住居跡（遺構：Fig. 18, PL. 8）

位置：X63、Y188・189。重複：H-3→本遺構。主軸方位：不明。規模：不明。面積：不明。形態：削平により、床下土坑のみ確認した。発掘調査時にはH-3号住居跡と混同していた。床：床下に土坑（D 1）が穿たれたものと推測され、D 1には灰白色粘土が埋設していた。壁周溝：検出されなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。覆土：不明。遺物：検出されなかった。時期：重複関係から平安時代（10世紀以降）に求められる。

3.2区溝跡

2区W-1号溝跡（遺構：Fig. 20, PL. 9）

位置：X62～65、Y188。西側が調査区外に続く。重複：H-3・6・7・9・10、D-1、P-24・25・53・57→本遺構。主軸方位：N-88°～E。規模：全長[10.16]m、上端幅0.32～0.43m、下端幅0.17～0.30m、深さ0.09～0.25m。形態：東西方向へ直線的に走行し、断面は弧状を呈する。底面：東側が33cm低くなる。工具痕が残る。覆土：As-Bを含む褐灰色砂質土と黒褐色砂質土が互層状に堆積する。遺物：少量で、繩文土器、土師器甕、須恵器壺・甕・壺、灰釉陶器耳皿、近世陶器（瀬戸・美濃系飴釉）が出土した。いずれも破片である。時期：出土遺物から近世に求められる。備考：覆土や底面の状態から用途は区画溝に想定される。

4.2区土坑（遺構：Fig. 20・21, Tab. 5, 卷頭写真2, PL. 9・10 / 遺物：Fig. 24, Tab. 9, PL. 15）

平面が円形・椭円形・長方形を呈する多様な土坑が認められ、調査区全面に散在する。D-1・2号土坑は深く、多量の総社砂層ブロックを含む人為埋没土が堆積する。D-3号土坑は壁面の中位が抉れ、覆土に抉れから派生した大型の総社砂層ブロックを包含する複数の層がみられた。調査範囲の制約により詳細は不明であるが、井戸ないし地下式坑である可能性が予想される。D-7号土坑は下端が四角柱状をなしており、柱の抜取痕を伴う柱穴に想定される。土坑出土の遺物は微量で、破片ばかりである。時期は、D-3～7・9・10号土坑がAs-Bを含む覆土から中世以降に比定され、出土遺物と重複関係からD-9・10号土坑は中世と判断した。

なお、各遺構の計測値などについてはTab. 5に示す。

Tab. 5 2区土坑一覧表

遺構名	位 置	規模（長・幅・深）	平面形	断面形	出土遺物	重複・新旧関係	時期	計測値 (m)
D-1	X 63・Y 188	1.14・1.08・1.08	円形	袋状	土師器甕、須恵器壺・甕・壺、羽釜、瓦	H-3・P-82→本遺構 →W-1		
D-2	X 64・Y 187	1.20・1.08・0.78	不整円形	弧状	土師器甕、須恵器甕・壺、灰釉陶器壺、瓦	H-2・P-4・9・72 →本遺構		
D-3	X 67・Y 187	[2.88]・[1.65]・[1.92]	不明	不整形	土師器甕、須恵器壺・甕・壺、羽釜、灰釉陶器壺、瓦、石製品		中世以降	
D-4	X 66・Y 187	0.78・0.58・0.21	長方形	逆台形			中世以降	
D-5	X 65・Y 188	0.96・[0.57]・0.12	長方形	逆台形			中世以降	
D-6	X 63・Y 187	[0.84]・0.78・0.18	楕円形	弧状	土師器甕・壺、須恵器甕・瓦	H-5→本遺構→D-9、 P-19・81	中世以降	
D-7	X 65・Y 188	0.84・0.63・0.39	長方形	逆台形	土師器甕		中世以降	
D-9	X 62・Y 187	2.10・[1.44]・0.60	矩形	逆台形	須恵器甕、軟質陶器	D-6・10、P-80→本 遺構	中世	
D-10	X 62・Y 187	[2.19]・[0.60]・0.69	矩形	逆台形		本遺構→D-9	中世	

5.2区ピット（遺構：Fig. 15・21, Tab. 6, PL. 6・10 / 遺物：Fig. 24, Tab. 6・9, PL. 15）

多量のピットが確認された。平面が方形のものも散見される。P-20・35・66では断面で柱痕が観察された。覆土にAs-Bを含むB類やAs-Cを含むC類が主体を占める。C類が最も多いが、As-Bの混入が目立たないⅢ層に由来する可能性も否めない。B類は東端を除いた調査区全体に分布する一方で、C類は中央より西側に偏在する。テフラが見られない暗褐色・褐灰色土のD類は、中央やや西側にまとまる。植栽の可能性もあるが、P-1

74など深いもの見受けられ、遺構外出土遺物を鑑みて縄文時代に帰属すると予測される。As-Aを含むA類は西端の2基のみであった。ピットから出土した遺物は微量で、破片ばかりである。

なお、各遺構の計測値などはTab. 6に示す。

Tab. 6 2区ピット一覧表

					計測値(cm)				
遺構名	位 置	覆土分類	規格(長・短・深)	備 考	遺構名	位 置	覆土分類	規格(長・短・深)	備 考
P-1	X63・Y188	B	20・15・26	H3→本遺構	P-42	X66・Y188	B	52・47・49	
P-2	X63・Y188	B	30・24・47	H3→本遺構	P-43	X62・Y188	A'	30・24・55	H4→本遺構 土師器甕出土
P-3	X64・Y187	C'	29・25・13	H1→本遺構	P-44	X62・Y188	A	30・25・50	H4→本遺構
P-4	X64・Y187	C	40・36・20	H2→本遺構→D2	P-45	X63・Y187	B	30・24・39	H2→本遺構
P-5	X63・Y188	C'	36・31・56	H3→本遺構	P-46	X63・Y187	D	30・25・34	H3→本遺構→H2
P-6	X63・Y188	C	28・25・26	H3→本遺構 土師器甕・須恵器甕出土	P-47	X63・Y187	D'	30・28・24	H2→本遺構
P-7	X64・Y187	C'	60・[12]・38	H1→2・P8→本遺構 瓦出土	P-48	X63・Y188	B	23・[8]・29	H11→本遺構→P49
P-8	X64・Y187	C	34・[6]・29	H1→本遺構→P7	P-49	X63・Y188	B	41・38・56	H11、P48→本遺構
P-9	X64・Y187	C	32・26・21	本遺構→D2	P-50	X64・Y187	D	32・32・40	本遺構→H1
P-10	X64・Y188	B	28・25・32		P-51	X65・Y188	D	40・32・25	
P-11	X64・Y188	B	26・22・15		P-52	X64・Y188	D	30・30・23	本遺構→H10
P-12	X64・Y188	D	35・32・24		P-53	X64・Y188	B	39・29・44	H7・10、P55・67→本遺構
P-13	X65・Y187	B	26・23・15		P-54	X64・Y188	B'	22・19・49	H7・10、P83→本遺構 灰釉陶器甕出土
P-14	X66・Y187	B	40・40・53		P-55	X64・Y188	C'	28・21・32	本遺構→P53 須恵器甕出土
P-15	X66・Y188	B	32・28・27		P-56	X64・Y188	C	28・24・30	本遺構→P23 須恵器甕・羽釜出土
P-16	X65・Y187	B	26・23・16		P-57	X64・Y188	C'	56・35・49	本遺構→P23・24
P-17	X65・Y187	D	31・24・30		P-58	X64・Y188	B	24・22・40	H10→本遺構
P-18	X63・Y187	B'	36・32・54	H2→本遺構 須恵器甕・塙出土	P-59	X64・Y188	C	26・22・24	須恵器甕・瓦出土
P-19	X63・Y187	B	35・34・44	H2・5・D6→本遺構	P-60	X64・Y188	B'	34・27・21	H7→本遺構 須恵器甕出土
P-20	X63・Y188	B	40・38・42	H3→本遺構 柱痕あり 土師器甕・須恵器甕出土	P-61	X63・Y187	B	33・24・24	H2・5→本遺構 土師器甕(鬼甕)出土
P-21	X64・Y188	C	33・25・15	P73→本遺構	P-62	X63・Y189	C'	30・23・32	
P-22	X64・Y188	C	24・16・11	P66・76→本遺構	P-63	X63・Y189	C	34・28・50	
P-23	X64・Y188	C	30・24・17	P56・57→本遺構	P-64	X63・Y189	C'	32・22・21	羽釜出土
P-24	X64・Y188	C	[2]・19・49	P57→本遺構→W1	P-65	X63・Y189	C	25・21・71	
P-25	X64・Y188	C	44・[3]・11	本遺構→W1	P-66	X64・Y188	C'	33・32・48	本遺構→P22・67 柱痕あり 土師器甕
P-26	X65・Y187	D'	25・22・16		P-67	X64・Y188	B	42・36・54	P66・83→本遺構→P63
P-27	X65・Y187	D	26・22・15		P-68	X64・Y188	C'	34・30・21	P69・75→本遺構
P-28	X65・Y188	D	24・15・12		P-69	X64・Y188	C'	30・[2]・34	本遺構→P68
P-29	X65・Y188	D	28・27・09		P-70	X64・Y188	B'	34・30・32	
P-30	X63・Y188	C	42・[20]・22	本遺構→H3 土師器甕・須恵器甕出土	P-71	X63・Y188	D	38・36・35	本遺構→P82
P-31	X63・Y188	C'	36・32・33	本遺構→H3	P-72	X64・Y188	C'	43・24・30	本遺構→D2
P-32	X63・Y188	C'	50・42・34	本遺構→H3・5 須恵器甕・塙出土	P-73	X64・Y188	C'	30・28・33	本遺構→P21
P-33	X62・Y188	C'	26・25・35	H4→本遺構 須恵器蓋(宝珠)出土	P-74	X64・Y188	D	33・28・55	
P-34	X65・Y188	B	26・23・29		P-75	X64・Y188	C	28・[2]・32	本遺構→P68
P-35	X65・Y188	B	46・39・77	柱痕あり	P-76	X64・Y188	D'	32・14・50	本遺構→P22
P-36	X65・Y188	B	42・32・27		P-77	X64・Y188	C	24・22・16	
P-37	X65・Y188	B	35・28・15		P-78	X62・Y188	B	31・26・21	
P-38	X65・Y188	C	26・24・32	須恵器甕出土	P-79	X64・Y188	B	26・19・16	
P-39	X64・Y188	B	34・27・25		P-80	X62・Y187	C	[28]・[26]・67	本遺構→D9
P-40	X65・Y188	C	24・21・09		P-81	X63・Y187	C	44・30・31	66→本遺構
P-41	X66・Y188	B	38・29・39		P-82	X63・Y188	C'	35・[26]・32	P71→本遺構→D1
					P-83	X64・Y188	C	40・27・36	本遺構→P54・67
					P-84	X64・Y187	C	40・[26]・22	本遺構→H1

覆土分類 A: As-Aを含む。B: As-Bを含む。C: As-Cを含む。D: テフラを含まない。「」は社跡砂層ブロックを多く含むことを示す。

6. 2区遺構外出土遺物 (遺物: Fig. 24, Tab. 9, Pl. 15)

縄文土器(諸磯b・c式)、石器(打製石斧)、土師器甕・甌・小型甕・須恵器甕・壺・蓋・甕・蓋・羽釜、灰釉陶器甕、軟質陶器捏鉢、中世陶器(常滑)、近世磁器(波佐見)・陶器(黄瀬戸)などが中量検出された。土師器甕では遺構から出土しなかった古墳後期の模倣甕も見受けられる。近世磁器波佐見碗はd層中から出土した。

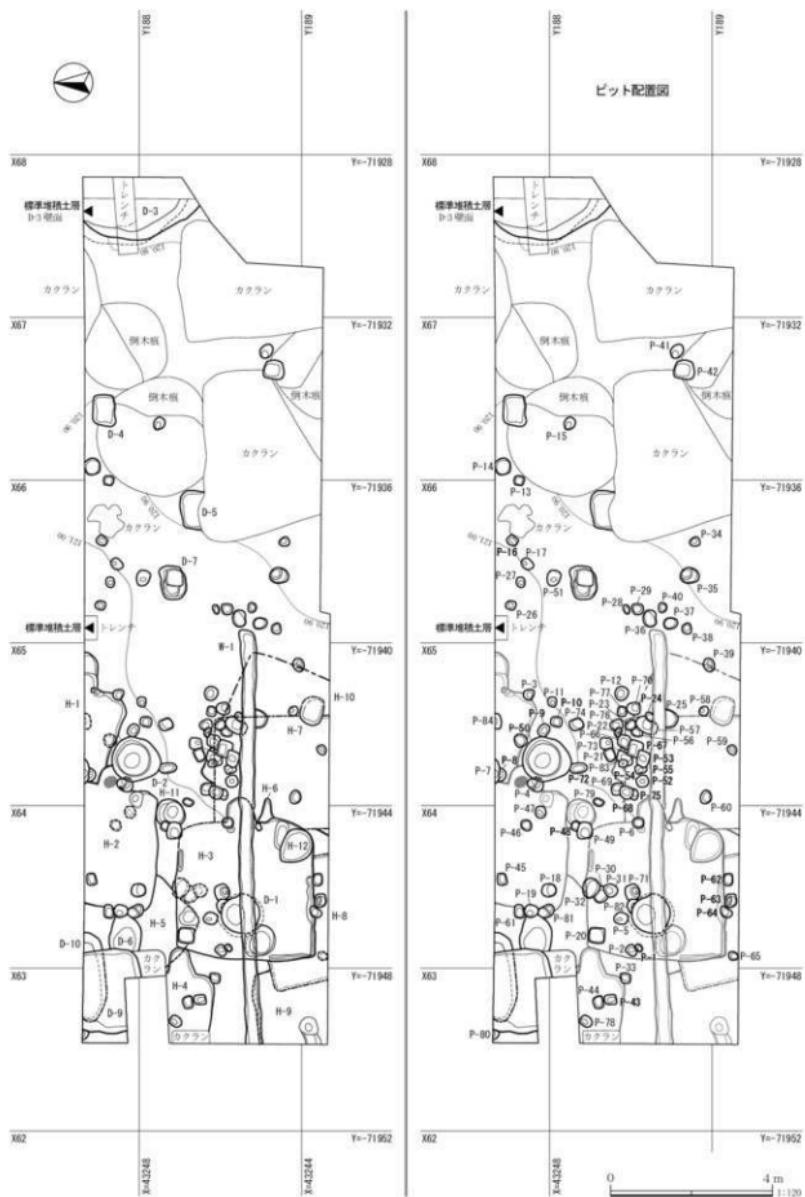
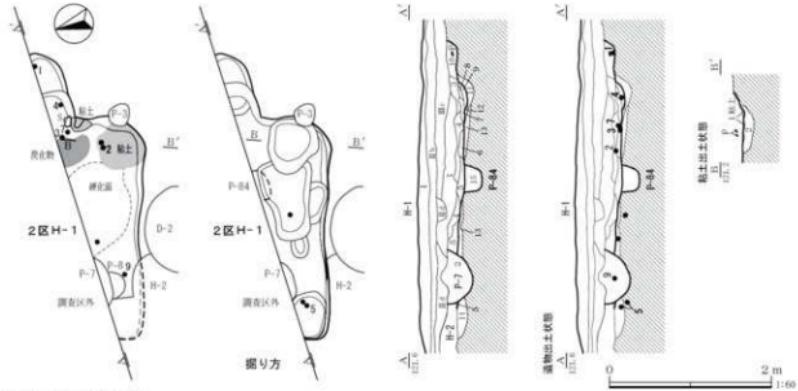


Fig. 15 2区全体図



2区H-1 堆積土層 (A-A')

- I: 黄土多量, 結社砂層微量, 黏性やや弱, 繊りやや弱。
- II: 黄褐色土, 鉱物多量, 結社砂層少量, 地下微量, 黏性やや強, 繊りやや強。
- 1: 黑褐色土, 砂・C多量, 結社砂層少量, 地下微量, 黏性やや強, 繊りやや弱。
- 2: 黄褐色土, 砂・C多量, 結社砂層微量, 地下微量, 黏性やや強, 繊りやや弱。
- 3: 黄褐色土, 砂・C少量, 結社砂層微量, 黏性やや強, 繊りやや弱。
- 4: 黑褐色土, 砂・C多量, 結社砂層少量, 地下微量, 黏性やや強, 繊りやや弱。
- 5: 黑褐色土, 砂・C多量, 結社砂層微量, 黏性やや強, 繊りやや弱。
- 6: 黑褐色土, 陶化物多量, 黏性・繊りやや強。
- 7: 黄褐色土, 砂・C多量, 黏土少量, 黏性やや強, 繊りやや弱。

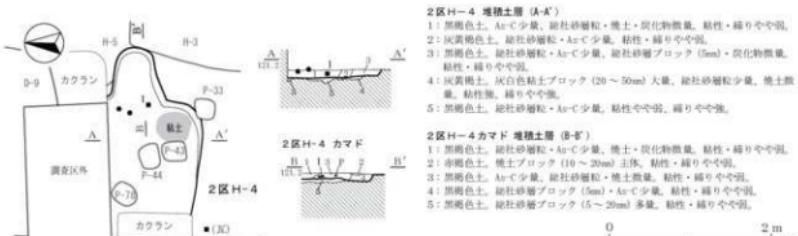


2区H-1 カマド部 堆積土層 (A-A')

- 1: 黄褐色土, 結社砂層ブロック (10mm) 微量, 黏性・繊りやや強。
- 2: 黑褐色土, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや強。
- 3: 黄褐色土, 結社砂層ブロック (5~20mm), 黑褐色土ブロック (20~50mm) 大量, 黏性やや弱, 繊りやや弱。
- 4: 黑褐色土, 結社砂層ブロック (10~20mm) 少量, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや強。

2区H-1 カマド部 堆積土層 (B-B')

- 1: 黄褐色土, 砂・C少量, 結社砂層少・土・礫物微量, 黏性・繊りやや弱。
- 2: 黄褐色土, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや弱。
- 3: 黑褐色土, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや強。
- 4: 黄褐色土, 白色粘土ブロック (20~50mm) 大量, 結社砂層少量, 地下微量, 黏性・繊りやや弱。
- 5: 黑褐色土, 結社砂層少量, 砂・C少量, 黏性やや弱, 繊りやや弱。



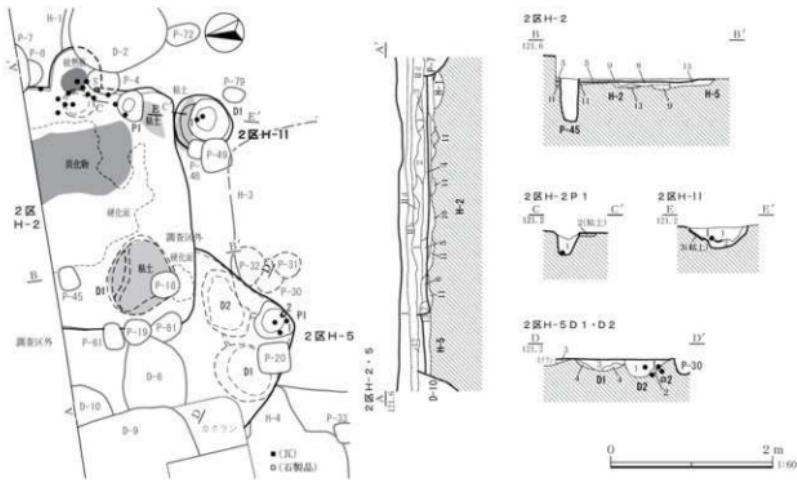
2区H-4 堆積土層 (A-A')

- 1: 黄褐色土, 砂・C少量, 結社砂層少・土・礫物微量, 黏性・繊りやや弱。
- 2: 黄褐色土, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや弱。
- 3: 黑褐色土, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや強。
- 4: 黄褐色土, 白色粘土ブロック (20~50mm) 大量, 結社砂層少量, 地下微量, 黏性・繊りやや弱。
- 5: 黑褐色土, 結社砂層少量, 砂・C少量, 黏性やや弱, 繊りやや弱。

2区H-4 カマド 堆積土層 (B-B')

- 1: 黄褐色土, 結社砂層少・土・礫物微量, 黏性・繊りやや弱。
- 2: 黄褐色土, 砂・C少量, 結社砂層少, 黏性・繊りやや弱。
- 3: 黄褐色土, 結社砂層少量, 黏性・繊りやや弱。
- 4: 黄褐色土, 結社砂層ブロック (5mm), 砂・C少量, 黏性・繊りやや弱。
- 5: 黑褐色土, 結社砂層ブロック (5~20mm) 多量, 黏性・繊りやや弱。

Fig. 16 2区遺構実測図1 (H-1・4号住居跡)



2区H-2-5 堆積土層 (A-A' B-B')

- I: 表土層, 褐色土・小石多量。粒状砂層・堆土・堆土性・ K -酸量。粘性・繊り易
II: 褐灰色土・ H_2O 混入。膨大量少。 $\text{A}-\text{B}$ 多量。堆土・堆土・堆土量。粘性・ y や強
繊り強。

III: 褐色土・ H_2O 混入。 $\text{A}-\text{B}$ 多量。粒状砂層・微細。粘性・ y や弱。

IV: 褐色土。粒状砂層・ $\text{A}-\text{C}$ 少量。土壌量。粘性・繊りや強。

5: 褐色土。褐化土 ($5 \sim 50$ mm)。 $\text{A}-\text{C}$ 少量。粒状砂層・堆土・堆土量。粘性
繊りや強。

3: 褐色土。 $\text{A}-\text{C}$ 少量。粘性・繊りや強。

4: 黑褐色土。 $\text{A}-\text{C}$ 少量。粒状砂層・微細。粘性・ y や強。

5: 褐色土。粒状砂層・ $\text{A}-\text{C}$ 少量。粘性・繊りや強。

6: 褐色土。粘土ブロック ($5 \sim 30$ mm)。 $\text{A}-\text{C}$ 多量。粒状砂層・少量化・堆土量。
粘性・ y や強。

7: 黑褐色土。 $\text{A}-\text{C}$ 少量化。粘性・繊りや強。

8: 褐色土。粘土ブロック ($5 \sim 30$ mm)。 $\text{A}-\text{C}$ 多量。粒状砂層・ブロック ($5 \sim 20$ mm) 少量。土壌量。粘性・ y や強・繊りや弱。

9: 黑褐色土。粘性・繊り強。

10: 褐色土。粒状砂層・ブロック ($5 \sim 40$ mm)。 $\text{A}-\text{C}$ 多量。粘性・ y や強・
繊り強。剥離。

11: 黑褐色土。粒状砂層・ブロック ($5 \sim 20$ mm)。 $\text{A}-\text{C}$ 多量。粘性・繊りや中強。

12: 黑褐色土。 $\text{A}-\text{C}$ 多量。粒状砂層・微細。粘性・ y や強。

- 13: 黒褐色土。細粒砂層・As-C 多量、細粒砂層ブロック (5 ~ 10mm) 少量、燒土・
炭化物微量、粘性・縮りやすい。

2区 H-2 P1 地積土層 (C-C')

- 1: 黒褐色土。細粒砂層ブロック (5~10mm) 多量。粘性やや強、縮りやや弱。
2: 灰白色粘土。粘性強、縮りやや強。

2区H-5D1-D2堆積土層

- 1 黒褐色土。A= C 多量、総社砂層ブロック (5mm)、総社砂層少少量。粘性やや強、繊りやや弱。
 - 2 黄褐色土。総社砂層少大量。粘性やや強、繊りやや弱。
 - 3 褐灰色土。総社砂層ブロック (10 ~ 80mm)、総社砂層少、A=C 多量。粘性やや強、繊りやや弱。
 - 4 灰黃褐色土。灰白色粘土ブロック (5 ~ 30mm) 大量。粘性強、繊りやや強。

2区H-11 堆積土層 (E-E')

- 1: 黒褐色土。 A_{tr-C} 多量、隕社砂層ブロック (5cm) 少量。塊土、炭化物微量。粘性やや強、繰りやや弱。
 2: 黒色土。隕社砂層ブロック (5~20cm) 多量、 A_{tr-C} 少量。粘性やや強、繰りやや弱。
 3: 紫灰色粘土。塑性強、繰りやや弱。

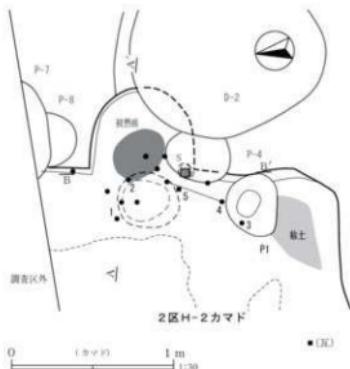


Fig. 17 2区遺構実測図2 (H-2・5・11号住居跡)

- 30 -

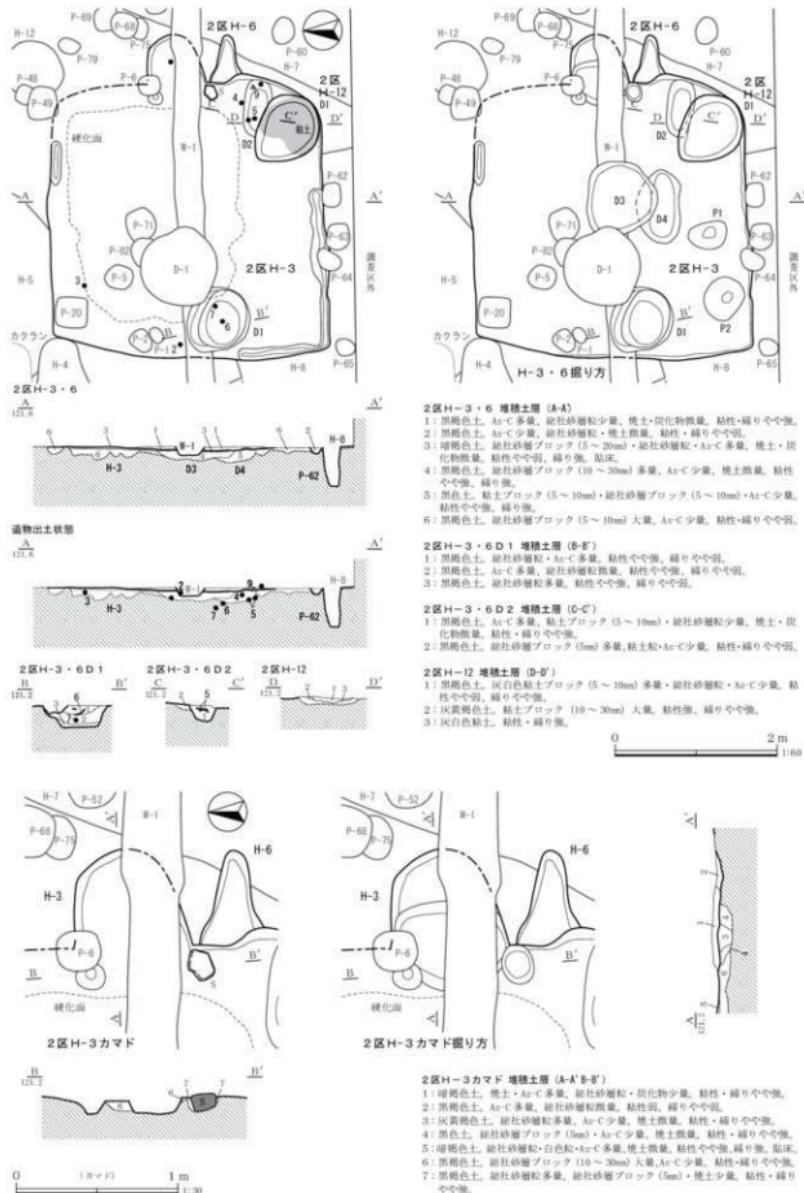
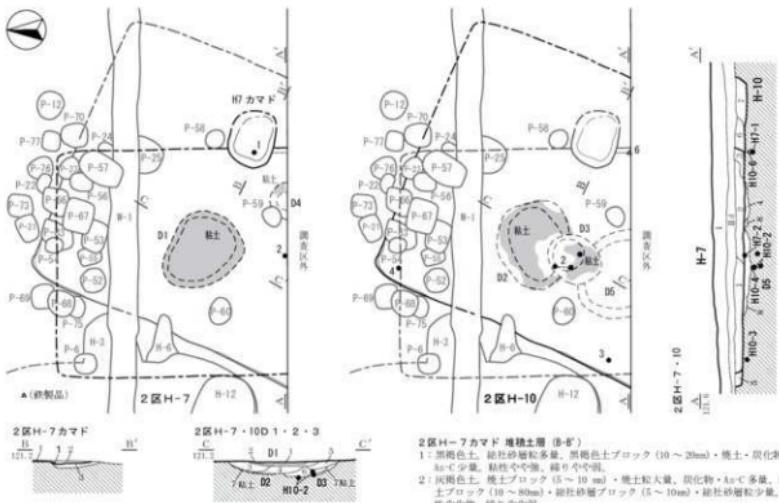


Fig. 18 2区造構実測図3 (H-3・6・12号住居跡)



2区H-7-10 堆積土質 (A)

- 1) 黒土層。紅褐色土。少々多量、絶社砂層と褐土・褐化物・Ac-C量多。粘性・縁り強。BD: 細粒砂層+H-8 褐土層。Ac-C 多量。絶社砂層微細。粘性少・中強。縁り強。
- 2) 黒色土。Ac-C 多量。絶社砂層ブロック (5mm)。絶社砂層少量化。褐土微細。粘性・縁り・中強。
- 3) 紅褐色土。絶社砂層ブロック (5mm)。絶社砂層・Ac-C 少量。褐土微量。粘性・縁り・中強。
- 4) 紅褐色土。絶社砂層少量化。粘性強。縁り・中強。
- 5) 黒色土。絶社砂層ブロック (5mm)。Ac-C 多量。粘性・縁り・中強。
- 6) 黒色土。絶社砂層・Ac-C 多量。絶社砂層少量化。粘性・縁り・中強。
- 7) 黒色土。Ac-C 多量。絶社砂層少量化。粘性・縁り・中強。
- 8) 黒色土。絶社砂層ブロック (5mm)。絶社砂層・Ac-C 多量。褐土供出。粘性・縁り・中強。

2区H-7-カマド種子層 (B'层)

- 1: 黒色土。結社砂層薄 (5mm)。黒褐色土ブロック (10~30mm)。無土-灰化物・As+少量。粘性や少強。繊維少々。
- 2: 黑褐色土。結社砂層 (5mm) (10~15mm)。無土鉢大量、灰化物、As+多量。粘性や少強。繊維少々。
- 3: 黑褐色土。結社砂層薄 (5mm) (20~30mm)。結社砂層少。粘性や少強。繊維少々。

2区H-7-10D-1-2-3 種子層土 (C'层)

- 1: 黑褐色土。結社砂層薄 (5mm)。As+多量。結社砂層ブロック (5mm) 少量。無土鉢。粘性や少強。繊維少々。
- 2: 明るい灰色粘土。粘性少。繊維少々。
- 3: 暗褐色土。結社砂層薄ブロック (5~40mm)。結社砂層とAs+多量。粘性や少強。繊維少々。
- 4: 黑褐色土。結社砂層薄ブロック (5mm)。結社砂層少。As+少量。粘性や少強。繊維少々。
- 5: 黑褐色土。As+少量。結社砂層少。無土鉢。粘性や少強。繊維少々。
- 6: 黑褐色土。結社砂層薄ブロック (5mm)。結社砂層多量。As+少量。粘性や少強。繊維少々。
- 7: 明るい褐色粘土。粘性少。繊維少々。

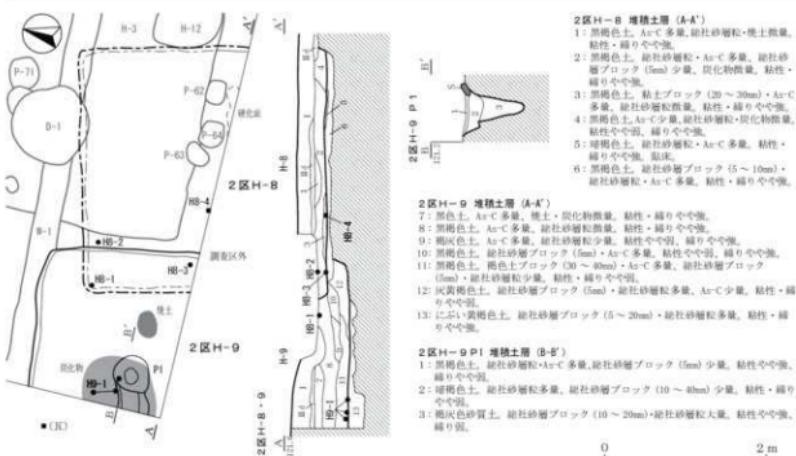


Fig. 19 2区遭構害測図4 (H=7・8・9・10号住居跡)

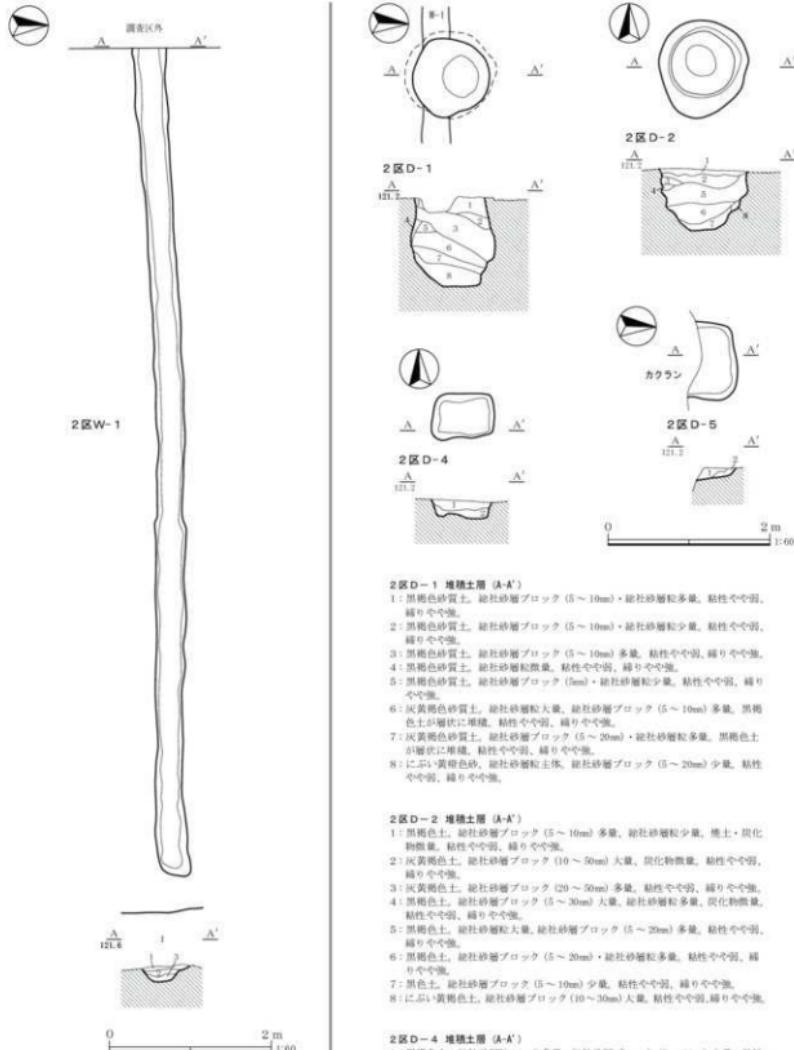
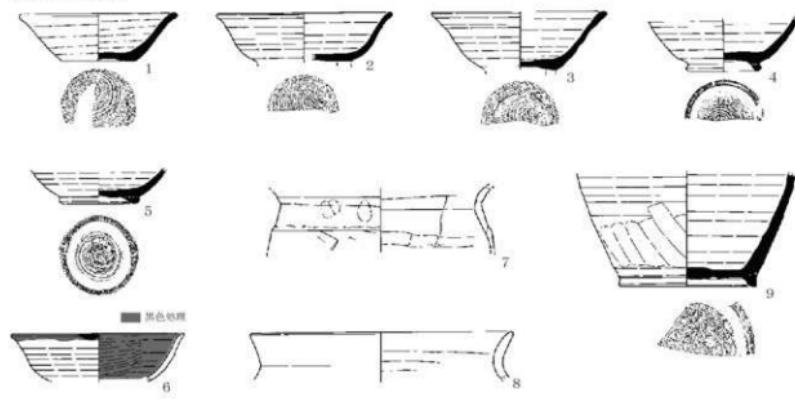
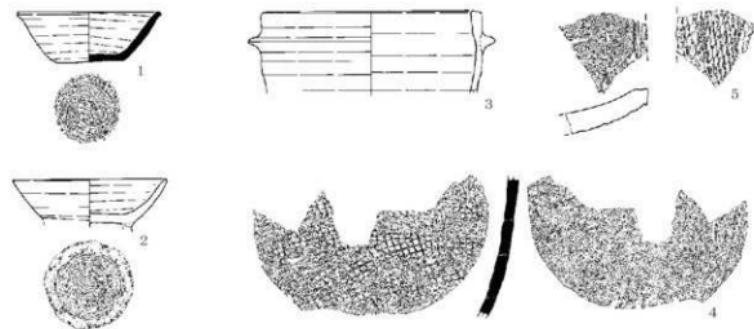


Fig. 20 2区構造実測図5 (W-1号溝跡、D-1・2・4・5号土坑)

2区H-1号住居跡



2区H-2号住居跡



2区H-3・6号住居跡(1)

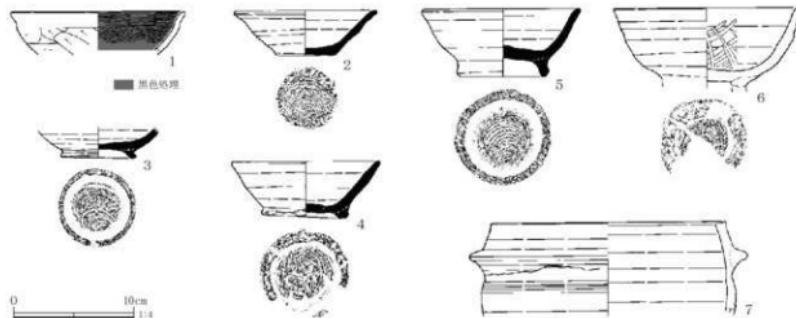
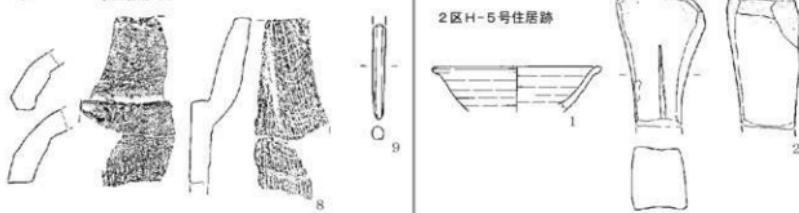
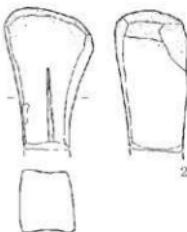
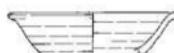


Fig. 22 2区遺物実測図1 (H-1・2・3・6号住居跡)

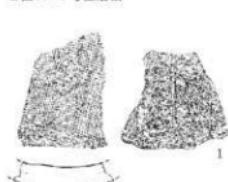
2区H-3·6号住居跡(2)



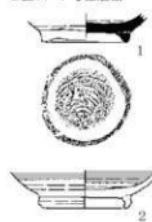
2区H-5号住居跡



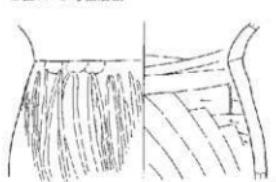
2区H-4号住居跡



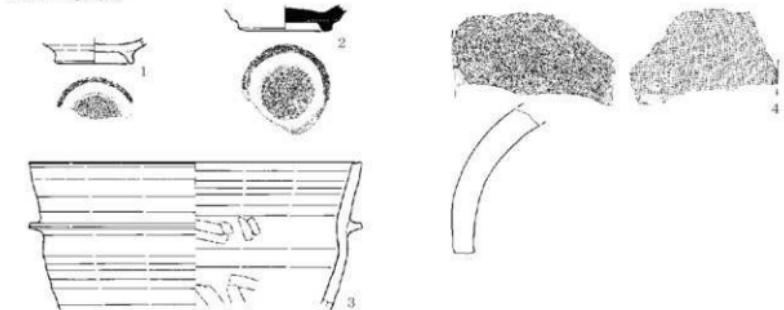
2区H-7号住居跡



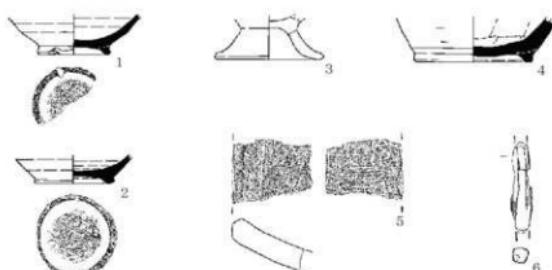
2区H-9号住居跡



2区H-8号住居跡



2区H-10号住居跡



2区H-11号住居跡

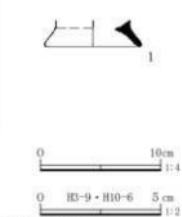


Fig. 23 2区遺物実測図2 (H-3·4·5·6·7·8·9·10·11号住居跡)

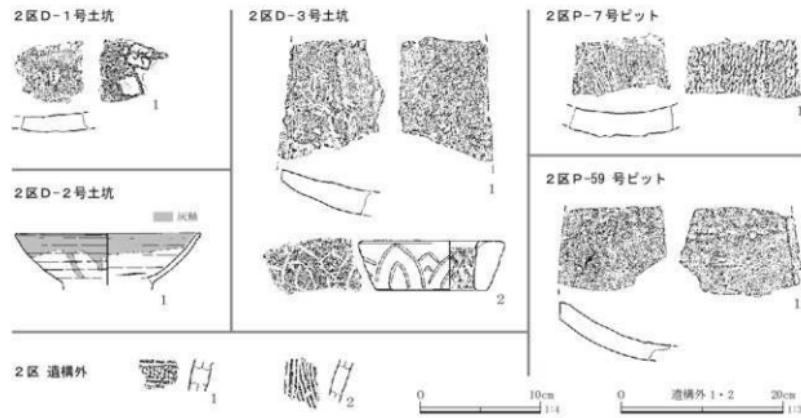


Fig. 24 2区遺物実測図3 (2区D-1・2・3号土坑, P-7・59号ビット, 遺構外)

Tab. 7 2区出土遺物観察表(1)

番号	種別	計測値	①焼成	②色調(外/内)	特徴	計測値(cm×g)
			③崩土	④残存		
2KH-1 1	須恵器 壺	口径: (13.0) 底径: (6.0) 器高: [3.9]	①還元焰 ②灰黄褐/にぶい黄橙 ③黑色粒子・長石・石英 ④1/4	外側: 回転ナデ。底部回転糸切後未調整。 内側: 回転ナデ。	還元不良。	
2KH-1 2	須恵器 壺	口径: (14.4) 底径: [—] 器高: [4.0]	①還元焰 ②灰黄 ③石英・白色粒子 ④高台以外1/3	外側: 回転ナデ。底部回転糸切後高台貼付(欠損)。 内側: 回転ナデ。	還元不良。	
2KH-1 3	須恵器 壺	口径: (14.4) 底径: [—] 器高: [4.8]	①還元焰 ②灰黄 ③石英・白色粒子 ④高台以外1/4	外側: 回転ナデ。底部回転糸切後高台貼付(欠損)。 内側: 回転ナデ。		
2KH-1 4	須恵器 壺	口径: [—] 底径: (6.2) 器高: [4.4]	①還元焰 ②灰黄/浅黄 ③褐色粒子・石英 ④底部1/3	外側: 回転ナデ。底部回転糸切後高台貼付。 内側: 回転ナデ。		
2KH-1 5	須恵器 壺	口径: [—] 底径: (6.5) 器高: [3.0]	①還元焰 ②灰黄 ③白色粒子 ④底部のみほぼ円形。	外側: 回転ナデ。底部回転糸切後高台貼付。 内側: 回転ナデ。		
2KH-1 6	須恵器 壺	口径: (14.2) 底径: [—] 器高: [4.0]	①酸化焰 ②にぶい橙/黒 ③白色粒子・角閃石 ④破片	外側: 回転ナデ。口縁部黒色処理。 内側: 回転ナデ後ミガキ。黒色処理。	口縁部内外に黒色付着物。外側全体に小円形状の剥落。	
2KH-1 7	土師器 壺	長さ: [—] 幅: [—] 厚さ: [—]	①普通 ②にぶい赤褐 ③白色粒子 ④破片	外側: 頂部ユビオサエ後ナデ。胴部ケズリ。 内側: ヨコナデ。	外側に黒色付着物。	
2KH-1 8	土師器 壺	口径: (21.6) 底径: [—] 器高: [3.8]	①普通 ②橙 ③白色粒子・赤色粒子・石英・角閃石 ④破片	外側: ヨコナデ。 内側: ヨコナデ。	外側スリッパ。	
2KH-1 9	須恵器 壺	口径: [—] 底径: (11.2) 器高: [9.4]	①還元焰 ②灰黄/にぶい橙 ③白色粒子・褐色粒子 ④底部1/5	外側: 回転ナデ後下位ナデ。底部回転糸切後高台貼付。 内側: 回転ナデ。	底部外側に小円形状の剥落。	
2KH-2 1	須恵器 壺	口径: (11.8) 底径: (5.3) 器高: (4.2)	①還元焰 ②灰 ③石英・白色粒子 ④完形	外側: 回転ナデ。底部回転糸切後未調整。 内側: 回転ナデ。	内側に黒色付着物。	

Tab. 8 2区出土遺物観察表(2)

計測値(cm・g)

番号	種別	計測値	①焼成 ②色調(外/内) ③胎土 ④残存	特徴	備考
2区H-2 2	須恵器 塊	口径: 12.5 底径: - 器高: [3.9] 部4/5	①酸化焰 ②にぶい赤褐 / 灰褐 ③角 閃石、石英、白色粒子、安山岩 ④坏	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付(欠損)。 内面: 回転ナデ。	内面に墨斑。
2区H-2 3	羽釜	口径: (18.1) 底径: - 器高: [6.9]	①酸化焰 ②にぶい橙 ③白色粒子・ 石英 ④破片	外面: 回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	
2区H-2 4	須恵器 塊	長さ: - 幅: - 厚さ: -	①還元焰 ②灰 ③白色粒子・石英 ④破片	外面: 格子目状タキ。 内面: 当て具痕後ナデ。	
2区H-2 5	瓦 平瓦	長さ: [6.7] 幅: [7.1] 厚さ: 1.6	①酸化焰 ②灰黄褐 ③白色粒子 ④ 破片	背面: 布目痕→ナデ。工具痕。 凸面: 調目タキ。	背面・断面にスス付着。笠懸堂跡群 奥ノ川窓跡産。
2区H-3・6 1	土師器 塊	口径: (14.3) 底径: - 器高: [3.5]	①普通 ②にぶい黄褐 / 黒 ③白色粒 子・チャート ④破片	外面: 口縫部ヨコナデ。体部ケズリ。 内面: ミガキ。黒色處理。	
2区H-3・6 2	須恵器 塊	口径: 11.7 底径: 5.0 器高: 3.7	①還元焰 ②灰白 ③白色粒子・黑色 粒子・石英 ④完形	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後未調 整。 内面: 回転ナデ。	内外面スス付着。
2区H-3・6 3	須恵器 塊	口径: - 底径: 6.2 器高: [2.5]	①還元焰 ②褐灰 / 灰黄褐 ③白色粒 子・石英 ④底部完形	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	還元不良。
2区H-3・6 4	須恵器 塊	口径: 12.2 底径: 7.1 器高: 4.7	①還元焰 ②褐 ③白色粒子・石英 ④ほぼ完形	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	内面口縫部に黒色付着物。
2区H-3・6 5	須恵器 塊	口径: (13.1) 底径: 7.6 器高: 5.5	①還元焰 ②灰 ③安山岩 ④2/3	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	
2区H-3・6 6	須恵器 塊	口径: (15.3) 底径: - 器高: [6.4]	①酸化焰 ②にぶい黄褐 / にぶい橙 ③石英、角閃石・安山岩・黒色粒子 ④坏部3/4	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付(欠損)。 内面: 回転ナデ後ミガキ。	
2区H-3・6 7	羽釜	口径: (19.3) 底径: - 器高: [7.7]	①還元焰 ②褐灰 ③白色粒子・長石 石英 ④破片	外面: 回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	還元不良。
2区H-3・6 8	瓦 丸瓦	長さ: [14.6] 幅: [7.6] 厚さ: 2.0	①酸化焰 ②橙 / にぶい橙 ③白色粒 子 ④破片	凸面: 調目タキ→ナデ。 背面: 布目痕。	玉緑瓦。 笠懸堂跡群鹿ノ川 窓跡産。
2区H-3・6 9	鉄製品 釘	長さ: [3.8]、幅: 0.45、厚さ: 0.4、重量: 2.2g。			職業部の可能性も あり。
2区H-4 1	瓦 平瓦	長さ: [9.4] 幅: [8.7] 厚さ: 1.8	①還元焰 ②褐灰 / 暗灰黄 ③白色粒 子・長石 ④破片	背面: 布目痕。 凸面: ナデ。	二次被熱か。
2区H-5 1	須恵器 塊	口径: (13.9) 底径: - 器高: [3.2]	①酸化焰 ②にぶい橙 / 灰褐 ③白 色粒子・石英 ④口縫部1/5	外面: 回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	外面にスス付着。
2区H-5 2	石製品 紙石	長さ: [11.5]、幅: 4.5、厚さ: 5.2、重量: 620.5 石材; 流紋岩。2/3 残存。一面に刃痕あり。			
2区H-7 1	須恵器 塊	口径: - 底径: 7.2 器高: [2.3]	①還元焰 ②灰白 ③黒色粒子・石英 ④底部完形	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	
2区H-7 2	灰釉陶器 塊	口径: - 底径: (7.6) 器高: [3.1]	①還元焰 ②灰黄 ③- ④底部1/3	外面: 回転ナデ。底部回転ヘラ切り後 高台貼付。灰釉。 内面: 回転ナデ。灰釉。	釉薬は濁け掛け。 外表面部に黒色付 着物。
2区H-8 1	須恵器 塊	口径: - 底径: (6.5) 器高: [2.1]	①酸化焰 ②にぶい赤褐 ③赤色粒 子・白色粒子・角閃石 ④底部1/3	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	
2区H-8 2	須恵器 塊	口径: - 底径: (7.7) 器高: [2.2]	①還元焰 ②黄灰 ③石英・白色粒子 ④底部4/5	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	

Tab. 9 2区出土遺物観察表(3)

計測値(cm・g)

番号	種別	計測値	①焼成 ②色調(外/内) ③胎土 ④残存	特徴	備考
2区H-8 3	須恵器 瓶	口径: [27.3] 底径: - 器高: [12.0]	①還元焰 ②灰黄/にぶい黄橙 ③石英・赤色粒子 ④破片	外面: 回転ナデ。 内面: 回転ナデ後部分のナデ。	還元不良。
2区H-8 4	瓦 丸瓦	長さ: [6.6] 幅: [13.2] 厚さ: 2.2	①還元焰 ②灰/暗灰 ③長石 ④破片	凸面: ナデ。 凹面: 布目痕。	藤岡・吉井窯跡群 産。
2区H-9 1	土師器 甕	長さ: - 幅: - 厚さ: -	①普通 ②にぶい黒 ③白色粒子・石英・赤色粒子 ④破片	外面: 口縁部ヨロナデ。胴部ユビオサ 工後タテナデ・タテミガキ。 内面: 口縁部ヨロナデ。胴部ケズリ後 ナデ。	
2区H-10 1	須恵器 壺	口径: - 底径: (6.0) 器高: [2.3]	①還元焰 ②灰黄褐/黄灰 ③白色粒子・石英 ④底部1/3	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	還元不良。
2区H-10 2	須恵器 壺	口径: - 底径: 6.5 器高: [2.4]	①還元焰 ②灰 ③白色粒子・片岩 ④底部完形	外面: 回転ナデ。底部回転糸切後高台 貼付。 内面: 回転ナデ。	内外面・断面に粘 付着。
2区H-10 3	土師器 台付甕	口径: - 底径: (9.0) 器高: [3.6]	①普通 ②黒褐 ③白色粒子・褐色粒 子・石英 ④台脚1/2	外面: ヨコナデ。 内面: ヨコナデ。	内外面ヨグ付着。
2区H-10 4	須恵器 壺	口径: - 底径: 9.2 器高: [3.7]	①還元焰 ②黒褐 ③石英・白色粒子 ④底部3/4	外面: 回転ヘラケズリ。底部切り離し 不明後高台貼付。 内面: ヨコナデ。	外面粘付着。内 面ヨゴレ。
2区H-10 5	瓦 平瓦	長さ: [4.9] 幅: [6.7] 厚さ: 1.8	①還元焰 ②黄灰 ③白色粒子 ④破 片	凹面: 布目痕→ナデ。 凸面: 粘土板糸切痕→ナデ。	藤岡・吉井窯跡群 産。
2区H-10 6	鉄製品 釘	長さ: [3.7]、幅: 0.6、厚さ: 0.6、重量: 3.2g	残存不良。		
2区H-11 1	須恵器 壺	口径: - 底径: (8.0) 器高: [2.2]	①還元焰 ②灰白 ③白色粒子・石英 ④高台1/4	外面: 回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	
2区D-1 1	瓦 平瓦	長さ: [5.1] 幅: [5.7] 厚さ: 1.3	①還元焰 ②灰 ③白色粒子・黒色粒 子 ④破片	凹面: 布目痕。 凸面: ナデ。押印跡「萬田」。	
2区D-2 1	灰釉陶器 壺	口径: (15.2) 底径: - 器高: [4.2]	①還元焰 ②灰白 ③黒色粒子 ④ 1/5	外面: 回転ナデ。灰釉。 内面: 回転ナデ。灰釉。	釉裏は濁け剥け。
2区D-3 1	瓦 平瓦	長さ: [9.7] 幅: [7.6] 厚さ: 1.7	①酸化焰 ②橙/にぶい橙 ③長石 ④破片	凹面: ケズリ。 凸面: ナデ。	
2区D-3 2	石製品	上面径: (12.0)、下面径: (9.1)、高: 4.1、重: 70.5、石材: 安山岩。外面織目、内面加工痕。 内面一部面取り。			
2区P-7 1	瓦 平瓦	長さ: [4.7] 幅: [9.0] 厚さ: 1.9	①還元焰 ②灰白/にぶい黄橙 ③褐色粒子・石英・長石 ④破片	凹面: 粘土板糸切痕→布目痕。工具痕。 凸面: 織目タタキ。	秋間窯跡群産か。
2区P-59 1	瓦 平瓦	長さ: [7.0] 幅: [9.8] 厚さ: 1.4	①還元焰 ②黄灰 ③黒色粒子・長石 ④破片	凹面: 粗いナデ。 凸面: ナデ。	凹面にスス付着。 藤岡・吉井窯跡群 産か。
2区遺構外 1	繩紋土器 深鉢	長さ: - 幅: - 厚さ: -	①良好 ②にぶい黄橙 ③石英・長石・ 輝石・角閃石・安山岩 ④破片	外面: 単節繩紋(RL)→平行沈繩紋。 内面: 横位ミガキ。	H-2振り方出土。 諸磯b式。
2区遺構外 2	繩紋土器 深鉢	長さ: - 幅: - 厚さ: -	①良好 ②褐/にぶい赤褐 ③石英・ 長石・チベート・角閃石・安山岩・砂 岩 ④破片	外面: 集合沈繩紋。 内面: 横位ミガキ。	H-1振り方出土。 諸磯c式。

VII 元総社蒼海遺跡群(140)出土の人骨 (Fig. 25・26, Tab. 10)

國學院大學研究開発機構 田口哲也

新潟医療福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科 奈良貴史

はじめに

元総社蒼海遺跡群(140)の調査において1区DB-1号土坑墓と1区DB-2号土坑墓からそれぞれ1個体の埋葬人骨が出土したので以下に報告する。

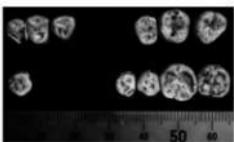
人骨の埋葬時期は、いずれの墓壙からも頭骨付近から六道錢が出土しており、全て渡来銭であること、また、埋葬姿勢が屈葬であるとから、中世～近世初期頃と推定される。歯の計測は藤田の方法(藤田, 1949)に従い、計測値をTab. 10に示した。歯冠サイズは男女差が見られる(權田, 1959)ことから、歯冠計測値の比較を行うためMatsumura(1995)の中世時代人のデータを引用した。また、歯の咬耗度についてはブローカ(1879)、エナメル質減形成については山本(1988)の分類を用いた。

1区DB-1号土坑墓出土人骨

(1) 人骨の埋葬状況：長軸を北東～南西方向に持つ不整橢円形の墓壙に、頭位を北、顔面部を西側に向けた横臥(側臥)屈葬の状態で埋葬されていた。人骨の遺存状況は不良で、一部の部位のみが確認されるのみであった。

(2) 人骨の出土部位：頭骨片の他、頸椎片、四肢骨片が出土している。頭骨については、後頭骨と頭頂骨の他、上顎骨、下顎骨の一部が確認できた。また、四肢骨については、上腕骨と橈骨、尺骨の一部、大腿骨の一部がそれぞれ確認できたが、遺存状況は全体的に不良であり、出土歯を除き詳細な観察は困難であった。同定できる歯は以下の歯式に示されるとおりである。水平線は上下顎の境界を、垂直線は正中線を表し、向かって左側が個体の右を示す。記号と数字の組み合わせが記入されているものが存在を確認された歯である。歯式に対応する上下の数字はブローカ(1879)の咬耗度を示す。歯の計測値は、Tab. 10に示す。写真は歯式と一致する。

2	2	2		2	2	2	
P2	P1	C		P2	M1	M2	
P2				P2	P2	M1	M2
2				2	2	2	2



出土歯については、検出時には遊離していなかった。歯の咬耗度はいずれも象牙質が部分的に露出するブローカの2度である。また、右上顎第1・2小白歯には山本(1988)の分類で軽微なエナメル質減形成が確認できる。なお、いずれの資料からも齶触は確認できなかった。

(3) 被葬者の個体数：出土人骨には重複する部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

(4) 被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値をTab. 10の中世時代人と近世時代人(Matsumura, 1995)の男性のものと比較すると、上顎右大臼歯、第1・2小白歯MD、左第1大臼歯、下顎右第2小白歯BL、同左第1・2小白歯BL、同第1大臼歯MDについては、2σ以上の開きがあることから被葬者は女性の可能性がある。

(5) 被葬者の死亡年齢：確認できた出土歯は全て永久歯であること、上・下顎の第2大臼歯の咬耗が象牙質まで及んでいることから成人段階に達していたと推定される。

1区DB-2号土坑墓出土人骨

(1) 人骨の埋葬状況：長軸を南北方向に持つ隅丸長方形の墓壙に、頭位を北、顔面部を西側に向けた横臥(側臥)屈葬の状態で埋葬されていた。人骨の遺存状況は不良で、出土した部位についても非常に脆

く、大部分は取り上げが困難であった。

(2) 人骨の出土部位：頭蓋骨片、四肢骨片、腰椎、寛骨が出土している。頭骨については、遺存状態は全体的に不良であったが、前頭骨片、頸頂骨片、側頭骨片の他、下顎骨の一部が確認できた。四肢骨について、遺存状態

Tab. 10 元総社若海遺跡群(140)出土人骨の歯冠計測値および比較表

上部 下部	遺構番号 埋葬姿勢・方向	1区D-B-1号土坑墓		1区D-B-2号土坑墓		中世時代人骨			江戸時代人骨		
		横臥(側臥)屈臥・北頭西臘	横臥(側臥)屈臥・北頭西臘								
		性別・年齢	成年・女性か 仕年前半・女性か	計測値	計測値	n	平均値	S.D	n	平均値	S.D
上部	計測項目	右	左	右	左						
	11	MD	—	—	—	77	8.48	0.5	37	8.78	0.6
	11	BL	—	—	—	80	7.29	0.47	37	7.52	0.48
	12	MD	—	—	—	77	6.98	0.55	50	7.16	0.48
	12	BL	—	—	—	79	6.55	0.46	49	6.74	0.43
	C	MD	7.02	—	—	90	7.96	0.52	71	8.01	0.42
	C	BL	7.58	—	—	97	8.50	0.60	73	8.66	0.53
	P1	MD	6.38	—	—	95	7.25	0.42	104	7.41	0.43
	P1	BL	9.22	—	—	95	9.46	0.6	103	9.67	0.51
	P2	MD	6.00	6.62	—	101	6.87	0.42	112	7.00	0.47
	P2	BL	9.07	—	—	102	9.39	0.58	112	9.55	0.58
下部	Y1	MD	—	9.39	—	91	10.45	0.42	178	10.61	0.58
	Y1	BL	—	10.37	—	97	11.81	0.59	176	11.87	0.64
	Y2	MD	—	9.87	—	100	9.65	0.59	151	9.88	0.6
	Y2	BL	—	10.78	—	103	11.72	0.64	151	12.00	0.78
	Y3	MD	—	—	8.48	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無
	Y3	BL	—	—	10.63	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無
	11	MD	—	—	—	39	5.42	0.37	31	5.45	0.45
	11	BL	—	—	—	43	5.78	0.42	32	5.78	0.41
	12	MD	—	—	—	47	6.04	0.43	41	6.09	0.5
	12	BL	—	—	—	49	6.22	0.42	41	6.29	0.42
下部	C	MD	—	—	—	53	6.88	0.46	60	7.06	0.46
	C	BL	—	—	—	54	7.82	0.61	58	8.04	0.51
	P1	MD	—	6.84	—	56	7.07	0.44	74	7.32	0.44
	P1	BL	—	6.91	—	56	8.10	0.63	75	8.34	0.48
	P2	MD	7.08	7.08	—	57	7.12	0.43	73	7.45	0.43
	P2	BL	7.46	7.46	—	59	8.49	0.57	73	8.68	0.48
	Y1	MD	—	11.23	—	10.78	11.56	0.59	99	11.72	0.64
	Y1	BL	—	10.78	—	10.80	11.00	0.54	101	11.15	0.54
	Y2	MD	—	10.01	—	10.88	11.06	0.67	92	11.39	0.69
	Y2	BL	—	9.90	—	10.27	10.55	0.63	94	10.75	0.55
	Y3	MD	—	—	—	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無
	Y3	BL	—	—	—	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無	データ無

註1. 計測値の単位はすべて、「mm」である。

註2. 埋葬種は、11(第1切歎), 12(第2切歎), C(大臼歎), P1(第1小白歎), P2(第2小白歎), Y1(第1大臼歎), Y2(第2大臼歎), Y3(第3大臼歎)を示す。

註3. 計測項目はMD(歯冠後遺存筋), BL(歯冠唇側舌筋)を意味する。

註4. 「破損」とは、歯冠が破損しており、計測不能であることを示す。

註5. 「—」は、出土しなかつたことを示す。

註6. 「空」は、Matsumura(1995)より引用した男性のデータ。なお、Matsumura(1995)には、第3大臼歎のデータはない。

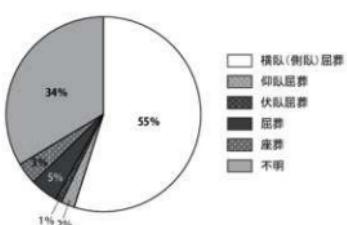


Fig. 25 前橋市の中世墓における埋葬姿勢の割合

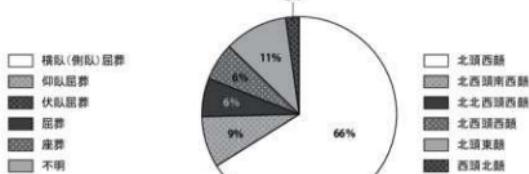
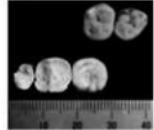


Fig. 26 横臥(側臥)屈臥における埋葬方向の割合

は全体的に不良であったが、左右不明の上腕骨片、尺骨片、橈骨片の一部、左右の大腿骨片と脛骨片、左腓骨片が確認できた。このうち、左大腿骨は、殿筋粗面は発達しておらず、華奢である。

同定できる歯は以下の歯式に示されるとおりである。歯の計測値は、Tab. 10 に示す。写真は歯式と一致する。

	2	1~3	M2	M3
P2	M1	M2		
2	1~2	1~2		



出土歯については、下顎第2大臼歯、上顎第2大臼歯及び第3大臼歯は検出時には遊離していた。なお、いずれの資料にも齶歯は見られなかった。

- (3) 被葬者の個体数：出土人骨には重複する部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。
 (4) 被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値をTab. 10の中世時代人と近世時代人 (Matsumura, 1995) の男性のものと比較すると、いずれも20歳以内であるが、小さい傾向があり、また、左大腿骨の殿筋粗面が発達しておらず、華奢であることから女性の可能性がある。
 (5) 被葬者の死亡年齢：第3大臼歯が萌出完了していることから成人段階には達していた。第3大臼歯の咬耗度が軽度であることから、成人段階でも比較的若い土年前半と推定される。

まとめ

本遺跡からは、中世の1区D B-1号土坑墓及び1区D B-2号土坑墓からそれぞれ1体の人骨が出土した。埋葬姿勢はいずれも横臥（側臥）屈葬で埋葬方向は北頭西顔である。これまで前橋市で出土した中世土葬墓85例（榎崎、2006a・2006b・2006c・2006d・2006e・2006f・2008・2016・2018）の埋葬姿勢の割合をFig. 25に示したが、これを見ると47例55%が横臥（側臥）屈葬である。さらにFig. 26に横臥（側臥）屈葬について埋葬方向の割合を示したが、31例66%が北頭西顔となる。これらのことから、横臥（側臥）屈葬・北頭西顔が中世における当該地域の一般的な埋葬姿勢であり、本遺跡の2例についてもこの範疇に入るということができる。

出土人骨については、年齢はいずれも成人に達していると推定される。性別については、1区D B-1号土坑墓出土人骨については、歯冠計測値を男性と比較すると、小さい傾向が顕著であることから女性の可能性がある。一方、1区D B-2号土坑墓出土人骨については、歯冠計測値は1区D B-1号土坑墓出土人骨ほど顕著ではないが小さい傾向にあり、観察できた左大腿骨は華奢なことから女性の可能性が指摘できる。

また、今回の出土人骨には齶歯が認められなかった。なお、前橋市の事例では、齶歯率は4.1%であるが、例えば佐倉（1964）によると、鎌倉時代人の齶歯率は5.5%、室町時代人は14.6%であり、これと比較すると出現率は低いといえる。

引用・参考文献

- 佐倉倉 1964 「日本人における齶歯頻度の時代的推移」『人類學雑誌』71(4), pp.153-177.
 藤田恒太郎 1949 「歯の計測基準について」『人類學雑誌』61, pp.1-6.
 横田加良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類學雑誌』67, pp.151-163.
 榎崎修一郎 2006a 「元総社蒼海道跡(5)出土人骨：遺構編」『元総社蒼海道跡(5)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.33-61.
 榎崎修一郎 2006b 「元総社蒼海道跡(5)出土人骨：遺構外編」『元総社蒼海道跡(5)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.62-63.
 榎崎修一郎 2006c 「元総社小見内Ⅲ遺跡出土人骨」『元総社蒼海道跡(5)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.64-80.
 榎崎修一郎 2006d 「元総社小見内Ⅲ遺跡出土人骨」『元総社蒼海道跡(5)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.89.
 榎崎修一郎 2006f 「元総社小見内Ⅲ遺跡出土人骨」『元総社蒼海道跡(5)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.90-92.
 榎崎修一郎 2008 「付録 元総社蒼海道跡(15)出土人骨」『元総社蒼海道跡(15)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.93-102.
 (15) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団, pp.61-62
 柳崎修一郎 2016 「第VI章 自然科学分析 元総社蒼海道跡(101) D-21号土坑出土の古代人骨」『元総社蒼海道跡(100)・(101)』前橋市教育委員会, pp.62-65.
 柳崎修一郎 2018 「Ⅱ 頭部・自然科學分析 1. 小島田清水尻遺跡出土人骨」『小島田清水尻遺跡』前橋市教育委員会, pp.111-113.
 山本美代子 1988 「日本古人骨久留のエナメル質質形成」『人類學雑誌』96(4), 417-433.
 Broca, P. (1879). Instructions relatives à l'étude anthropologique du système dentaire. In: Bulletins de la Société d'anthropologie de Paris, III^e Série. Tome 2, pp.126-163.
 Matsumura, H. (1995). A microevolutionary history of the Japanese people as viewed from dental morphology. A microevolutionary history of the Japanese people as viewed from dental morphology. National Science Museum Monographs, 9, pp.1-130.

VIIIまとめ

本調査では、元總社蒼海遺跡群に通有な古墳時代後期・平安時代の住居跡が多く検出された一方で、これらは著しく削平された状況にあった。その削平は室町時代の蒼海城整備や廢城後の水田・畑地造成によることが調査区壁面から読み取れ（II・IIIa層）、中近世における土地改変の規模に圧倒される。蒼海城は、14世紀以降に当地を基盤とした總社長尾氏の居城で、牛池川と染谷川を外堀とし、その内側に連郭式の堀や土塁を連ねる。この城は15世紀前半に最も繁栄し、16世紀中頃に廢城したとされる。本調査区は城郭中央部から離れた西側にあたるが、残された絵図や山崎（1971）による復元では空白地となっている。しかしながら、区画整理に伴う周辺の調査によって縦横にめぐる堀割りが確認されるようになり、本調査においてもその一部が検出された（1区W-2号溝跡）。近隣の蒼海（17）西通線区や蒼海（29）3区でも、多量のピットや井戸跡、溝で区画された掘立柱建物跡といった当該期の屋敷地が調査されており、本調査で散見された中世の遺構もその一端として理解する必要があろう。そうしたなかで、蒼海城造成に関連すると目されるIIIa層の下から中世墓が検出されており、蒼海城の形成に伴う土地利用の変化を見るうえで注目される。今回の調査では2基の土坑墓が見付かっており、群を構成しない散在型とみなされる。典型的な北頭西顔臥屈葬で、頭部辺に錢貨が供えられる。被葬者はいずれも成人女性の可能性が鑑定された（VII章）。以下では、周辺事例を参考に中世土坑墓の様相を概観し、元總社蒼海遺跡群の消長をたどる一助としたい（Fig. 27・28・29, Tab. 11・12）。

中世墓には、密集する群集型と単独ないし少数の墓が間隔をあけて配置される散在型が認められる。

群集型の中世墓は群1～5の5箇所に見受けられ、Y 80～Y 130グリッドを範囲とする帶状に分布する。これは蒼海城主要部から離れた北側および北西側に位置し、城域の端が採択されている可能性がある。その群集する性格から複数世帯の関与や継続性が窺われ、群1・2・4・5では寺院との関係が示唆されている。いずれにせよ群集型の造営時期には城下の整備とともに集団の集約化が進んだものと理解できる。土坑墓群の時期は蒼海（5）で14世紀後半～15世紀代に、国分僧寺・尼寺中間地点で15世紀～16世紀前半に比定されており、蒼海城と併行して進展したようである。群集型は複数の小群に分かれるが、小群内は混然としており、1・2条の列をなす近世墓（元總社小見内III遺跡6・18区、蒼海（29）2区）とは対照的である。群集型には少数ながら火葬跡および小児や獸骨を埋葬した土坑も加わる。群1では火葬跡が特定箇所にまとまる傾向にあり、その周りを土坑墓群が囲んでいるようにも見える。群2は方形に区画された溝（約20×17m）の埋没後に形成され、あたかも方形区画溝外の西側および南東側に小群を形成する。群4は区画こそないものの方形状の分布と列状の配置が見て取れる。西側の一角には五輪塔・宝篋印塔の部材や板碑などの石造物を含む集石が伴い、象徴的である。群3は埋没した堀の上に墓群が展開する事例で、8基の土坑墓が密集する。蒼海城改修ないし廢絶後の墓群にあたり、堀の跡地が選ばれていることは敷地の境が意識されていることを想起させる。なお、墓群中には大量のかわらけ片（746点）を包含する1号土器埋納土坑があり、何がしかの儀礼行為が連想される。

散在型はその性格から個別世帯単位で營まれた葬制と考えられる。遺跡群全体に見られるが、城郭主要部は非常に少ない。また、城郭主要部西側の低地にあたる本調査区周辺や国分尼寺跡の西側にやや多い傾向がある。

主郭（本丸）付近の数少ない事例である34は主郭北西側の土塁下において検出されている。城郭整備以前に造墓を伴う生活が營まれていた確実な範例である。33は主郭西側の堀底でかわらけと一緒に頭骨片が見つかっている。堀は15世紀から16世紀にいたる4回の改修が見込まれるなかで、2回目の15世紀中ごろに相当するが、開口する堀底でなされた特殊な状況下での事例といえる。これらのことから城郭機能時における主郭周辺への造墓は避けられていたことが予察される。片や、堀の埋没途上ないし埋没後に土坑墓や火葬跡が營まれる事が散見される。39～41は堀の縁に並び、埋没途上の中へ下層につくり出された道路跡と同時に機能していたことが指摘されている。14・15では堀跡の狭い範囲に規制されて、一般と異なる埋葬方向が採用されている。これら

Tab. 11 元総社蒼海遺跡群の散在型中世墓一覧

計測値(cm)

番号	遺跡名	遺構名	平面形態	方位	長軸	副軸	深さ	主要出土遺物	人骨の姿勢	性別	年齢	備考	
1	元総社蒼海遺跡群 (6)	DB - 1	長方形	N-4°~W	129	62	19	人骨	北頭西面横臥屈仰	—	—		
2	元総社蒼海遺跡群 (6)	DB - 2	楕円形	N-0°	183	103	20	人骨	北頭西面横臥屈仰	—	—		
3	元総社蒼海遺跡群 (12)	DB - 1	長方形	N-0°	—	106	72	罐上に頭骨	北頭西面	—	—	区间埋	
4	元総社蒼海遺跡群 (13) 7区	DB - 1	楕円形	不明	—	—	77	人骨片	—	—	—		
5	元総社蒼海遺跡群 (15)	DB - 1	楕円形	N-17°~W	110	75	35	—	北頭西面横臥屈仰	男性	20代	上層に織	
6	元総社蒼海遺跡群 (17)	DB - 1	楕円形	N-53°~W	51	32	12	人骨	—	—	—		
7	元総社蒼海遺跡群 (17)	DB - 2	楕円形	N-5°~W	73	48	8	人骨・錢貨6	—	—	—		
8	元総社蒼海遺跡群 (18)	DB - 1	不明	N-0°	—	—	—	他骨・縫合	—	—	—	火葬跡	
9	元総社蒼海遺跡群 (18)	DB - 2	T字状	N-0°	—	177	78	8	他骨	—	—	—	火葬跡
10	元総社蒼海遺跡群 (18)	D - 5	長方形	N-36°~E	107	67	15	頭骨4	—	—	—		
11	元総社蒼海遺跡群 (20) 9区	DB - 1	楕円形	N-10°~W	—	88	45	人骨・刀	北頭東面横臥屈仰	—	—		
12	元総社蒼海遺跡群 (26) 3区	DB - 1	不整長方形	N-0°	—	85	82	9	人骨	北頭西面横臥屈仰	—	—	
13	元総社蒼海遺跡群 (26) 3区	DB - 2	長方形	N-15°~E	98	—	15	人骨・錢貨4	北頭屈仰	—	—		
14	元総社蒼海遺跡群 (30)	DB - 1	長方形	N-98°~E	121	75	37	人骨	東頭南面横臥屈仰	女性	壮年		
15	元総社蒼海遺跡群 (30)	DB - 2	楕丸長方形	N-17°~W	91	52	27	人骨	西頭北面横臥屈仰	女性	壮年		
16	元総社蒼海遺跡群 (30)	1号火葬跡	T字状	N-5°~W	108	54	8	他骨・錢貨1	—	—	—	火葬跡	
17	元総社蒼海遺跡群 (32) 2区	DB - 1	円形	—	56	52	11	人骨	—	—	—	言塚	
18	元総社蒼海遺跡群 (33) 3区	DB - 1	楕円形	N-2°~E	112	79	17	人骨片	—	—	—		
19	元総社蒼海遺跡群 (34) 2区	DB - 1	楕丸長方形	N-0°	—	118	82	6	人骨・錢貨6・針	北頭東面横臥屈仰	男性	成人	
20	元総社蒼海遺跡群 (34) 2区	DB - 2	楕丸長方形	N-0°	96	60	10	人骨片・錢貨2・針	かわらけ	—	—		
21	元総社蒼海遺跡群 (34) 2区	DB - 3	不明	—	—	—	—	人骨・錢貨6	北頭東面横臥屈仰	男性	成人		
22	元総社蒼海遺跡群 (35) 1区	DB - 1	楕丸長方形	N-28°~W	110	91	39	人骨・錢貨6	北頭	—	—		
23	元総社蒼海遺跡群 (36) 7区	D - 1	長方形	N-6°~W	122	92	46	錢貨2	—	—	—		
24	元総社蒼海遺跡群 (48)	D - 4	楕円形	N-12°~W	81	51	5	人骨片・錢貨6	—	—	—		
25	元総社蒼海遺跡群 (48)	D - 10	不明	—	—	—	—	かわらけ	—	—	—		
26	元総社蒼海遺跡群 (53)	D - 8	長方形	N-16°~E	131	72	43	縫合	—	—	—	火葬跡	
27	元総社蒼海遺跡群 (57)	D - 5	長方形	—	—	77	44	人骨・錢貨7	北頭西面横臥屈仰	—	—		
28	元総社蒼海遺跡群 (56・61)	D - 5	長方形	—	—	77	44	人骨・錢貨7	北頭東面横臥屈仰	女性	成人		
29	元総社蒼海遺跡群 (64)	DB - 1	楕丸長方形	N-4°~E	131	77	54	人骨	北頭東面横臥屈仰	女性	成人	上層に織	
30	元総社蒼海遺跡群 (68)	D - 1	矩形	N-12°~W	—	94	37	錢貨1	—	—	—		
31	元総社蒼海遺跡群 (91)	1号土坑	不明	—	—	—	—	人骨	北頭西面横臥屈仰	—	—		
32	元総社蒼海遺跡群 (91)	6号土坑	不明	—	—	—	—	人骨片	北頭屈仰	—	—		
33	元総社蒼海遺跡群 (122) 7区	DB - 1	楕円形	N-0°	109	78	10	人骨	—	—	—		
34	元総社蒼海遺跡群 (124)	W - 3	不明	—	—	—	—	頭骨・かわらけ	不明	女性	30代	堆下層	
35	元総社蒼海遺跡群 (126)	D - 7	長方形	N-30°~W	113	75	36	人骨・錢貨6	北頭西面横臥屈仰	女性	成人	土煙下	
36	元総社蒼海遺跡群 (140) 1区	DB - 1	楕円形	—	126	101	10	人骨片・錢貨1	北頭西面横臥屈仰	女性	成人		
37	元総社蒼海遺跡群 (140) 1区	DB - 2	長方形	N-0°	—	98	35	人骨片・錢貨1	北頭西面横臥屈仰	女性	成人		
38	元総社小見田遺跡5区	D - 31	楕丸長方形	N-10°~W	132	72	6	人骨	北頭横臥屈仰	—	—	—	
39	元総社小見田遺跡5区	D - 1	不整長方形	N-0°	131	103	30	人骨	北頭西面横臥屈仰	女性	成人		
40	元総社小見田遺跡5区	D - 2	長方形	N-0°	118	70	54	人骨	北頭西面横臥屈仰	女性	成人		
41	元総社小見田遺跡5区	D - 3	方形容	N-10°~E	111	108	43	右跡	北頭西面横臥屈仰	女性	30代		
42	元総社小見田遺跡5区	D - 4	長方形	N-26°~E	78	60	36	錢貨4	北頭西面横臥屈仰	女性	成人5		
43	元総社草作V遺跡	DB - 1	不整長方形	N-15°~E	113	58	8	人骨片	—	女性	30代		
44	元総社草作V遺跡	DB - 2	楕円形	N-90°	118	69	43	人骨片	—	女性	成人		
45	元総社草作V遺跡	DB - 3	楕円形	N-90°	83	69	21	—	—	—	—		
46	元総社草作V遺跡	1号火葬跡	楕円形	N-18°~W	86	57	10	他骨	—	女性	火葬跡		
47	元総社小見内IV遺跡C区	D - 107	楕円形	N-3°~W	125	117	35	錢貨1	—	—	—		
48	元総社小見内X遺跡	DB - 1	長方形	N-0°	114	89	7	人骨・錢貨6	北頭西面横臥屈仰	女性	40代		
49	元総社小見内X遺跡	DB - 2	長方形	N-1°	150	152	62	人骨・錢貨3	北頭西面横臥屈仰	女性	30代		
50	元総社小見内X遺跡	1号火葬跡	T字状	N-13°~E	139	90	35	他骨	—	—	—	火葬跡	
51	元総社小見内X遺跡	D - 56	楕丸長方形	N-11°~E	148	77	11	他骨	—	—	—	火葬跡	

Tab. 12 元総社蒼海遺跡群の群集型中世墓一覧

番号	遺跡名	遺構	主要出土遺物	被葬者
群1	元総社蒼海遺跡群 17街区	土坑墓25、火葬跡3、土坑9	人骨・錢貨・かわらけ・石造物	成人男性12、成人性6、成入不明1、未成年男児1、未成年女児2、未成年不明2、不明1、合計25
	元総社小見内IV遺跡6区	土坑墓3、火葬跡7	人骨・錢貨	成人男性2、成人性7、合計9
	元総社小見内IV遺跡1区	土坑墓6	人骨・錢貨	成人男性3、成人性1、未成年不明2、合計6
群2	元総社蒼海遺跡群 (5)	土坑墓58、火葬跡2	人骨・錢貨・かわらけ・刀子・石造物	成人男性16、成人性22、未成年男児6、未成年女児11、未成年不明5、不明12、合計72
	元総社蒼海遺跡群 (29) 2区	土坑墓4、火葬跡2	人骨(他骨)・錢貨・吉原・花瓶	未成年定8
群3	元総社小見内IV遺跡A区	土坑墓8、土器埋納土坑	人骨・錢貨	未成年定8
群4	上野国分寺寺・尼寺中間地C区	土坑墓18、集石	人骨・錢貨・かわらけ・香炉・鉄錠	成人性5、成人性7、未成年不明3、合計18
群5	上野国分寺寺・尼寺中間地C区	土坑墓7	人骨・錢貨・かわらけ・鉄製品	成人男性1、成人性1、合計2

は城や屋敷が荒廃した跡地に展開するものであり、敷地の境界が意識され続ける状況が垣間見られる。

群集型と散在型の属性に違いは少ない。各土坑墓の平面形は長方形や椭円形がほとんどを占める。埋葬法は北頭位屈葬が多い。副葬品にはかわらけや渡来銭が目立ち、刀・刀子・紡錘車などが見られる。群集型では刀傷や鉄鎌で射られた痕をもつ人骨が4例報告されている。他方、群集型における被葬者の性差は大きくないが、元総社蒼海遺跡群の散在型では、鑑定がなされた人骨で比べると女性の割合が非常に高い。群集型とは異なる埋葬原理や動乱期の社会的背景を反映していた可能性もあり、今後の検証に期待が高まる。

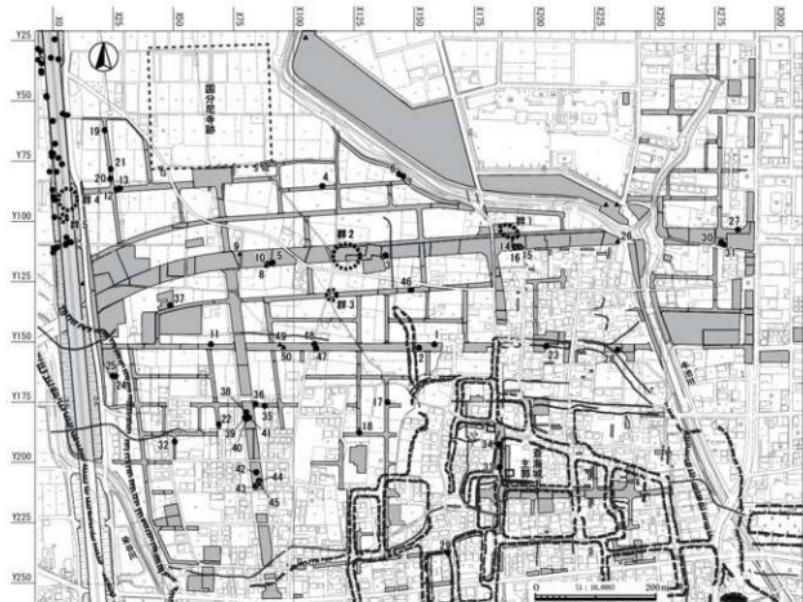


Fig. 27 元総社遺跡群における中世墓の分布

著者図の調査は山崎(1971)を引用

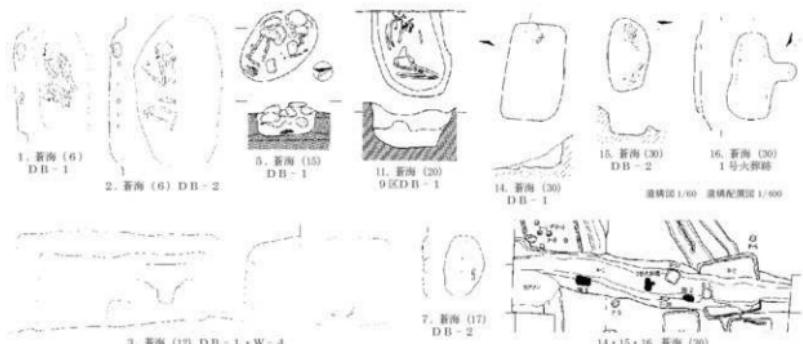


Fig. 28 元総社蒼海遺跡群の中世墓(1)

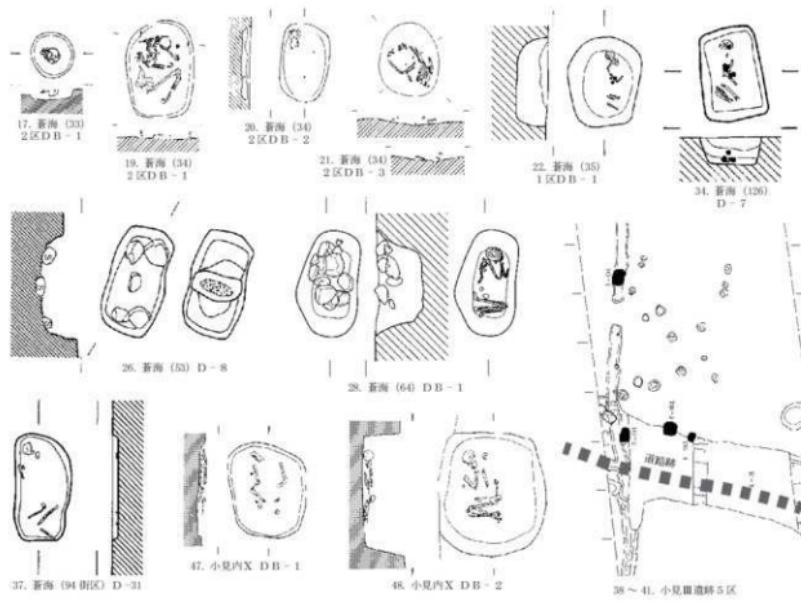
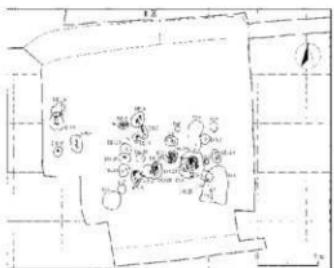


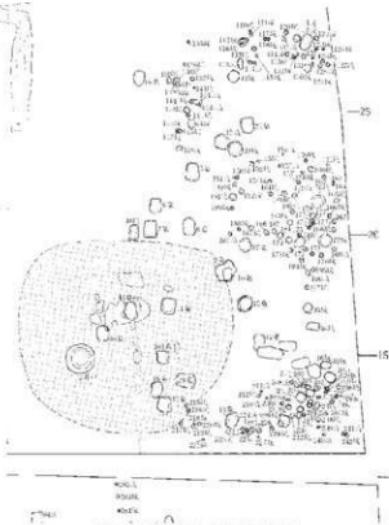
図29 元総社着海遺跡群の中世墓(2)



群2. 元総社着海遺跡群(5)



群1. 元総社着海遺跡群(17街区II区)



群4. 上野国分僧寺・尼寺中間地域C区

Fig. 29 元総社着海遺跡群の中世墓(2)

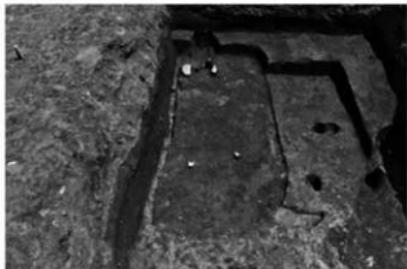
写 真 図 版



1区全景（上が北）



1区全景（東から）



1 区 H-1 号住居跡 (西から)



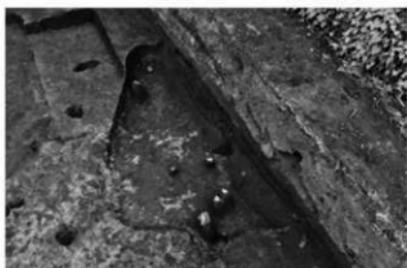
1 区 H-1 号住居跡 掘り方 (南から)



1 区 H-1 号住居跡 カマド (西から)



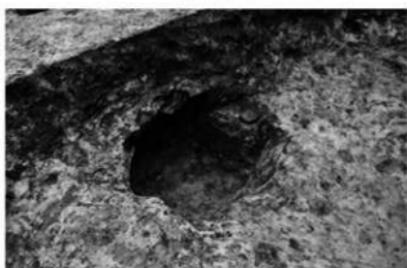
1 区 H-1 号住居跡 カマド断面 (西から)



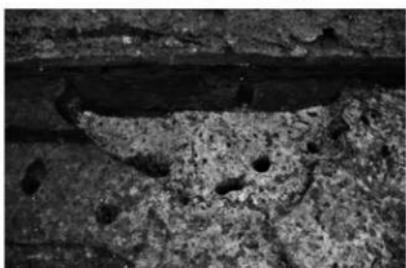
1 区 H-2 号住居跡 (北西から)



1 区 H-2 号住居跡 遺物出土状態 (北から)



1 区 H-2 号住居跡 D 1貯蔵穴 (西から)



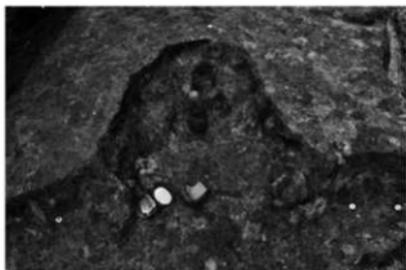
1 区 H-2 号住居跡 掘り方 (北から)



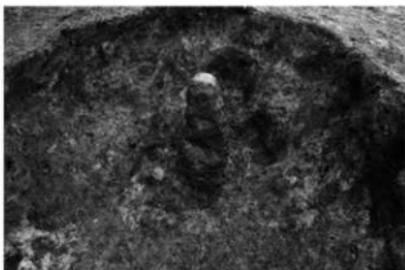
1区H-3号住居跡（南西から）



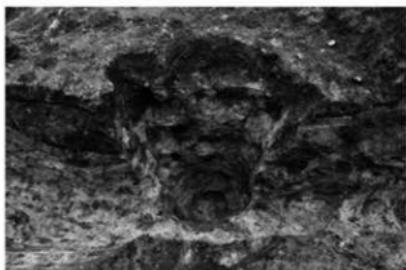
1区H-3号住居跡 遺物出土状態（南西から）



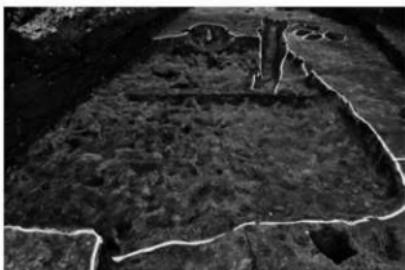
1区H-3号住居跡 カマド（南西から）



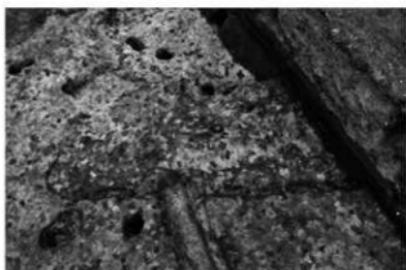
1区H-3号住居跡 カマド支脚（南西から）



1区H-3号住居跡 D1貯蔵穴（南から）



1区H-3号住居跡 挖り方（南西から）



1区H-4号住居跡（北西から）



1区H-5号住居跡（北東から）



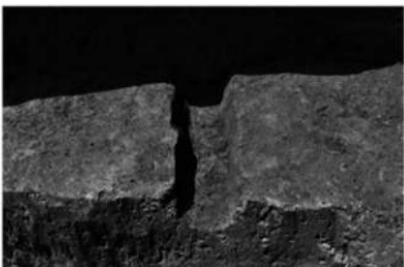
1 区W - 1号溝跡（西から）



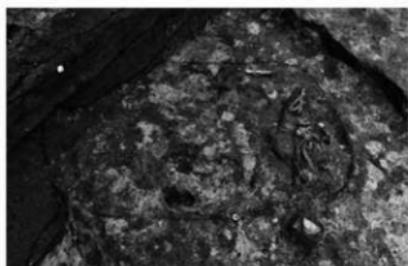
1 区W - 2号溝跡（南東から）



1 区W - 2号溝跡（南から）



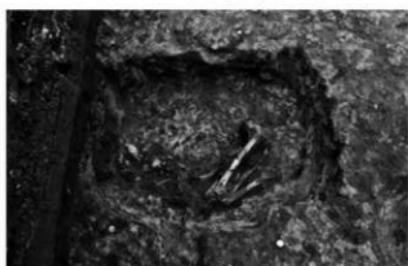
1 区W - 3号溝跡（北から）



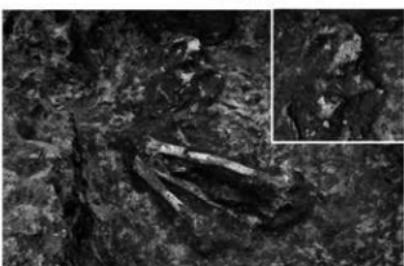
1 区DB - 1号土坑墓（北東から）



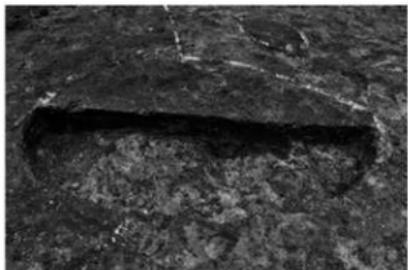
1 区DB - 1号土坑墓（南東から）



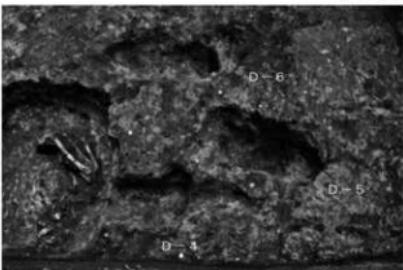
1 区DB - 2号土坑墓（西から）



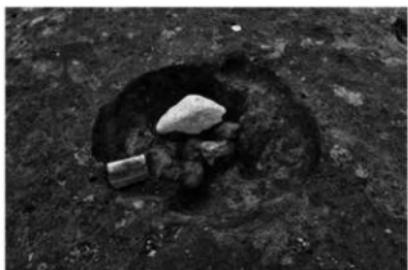
1 区DB - 2号土坑墓（南から）



1区D-1号土坑（西から）



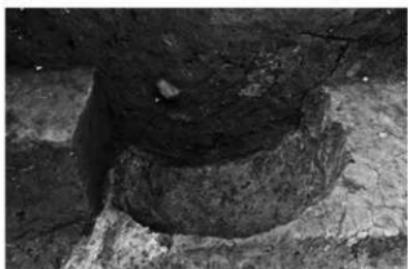
1区D-4・5・6号土坑（北から）



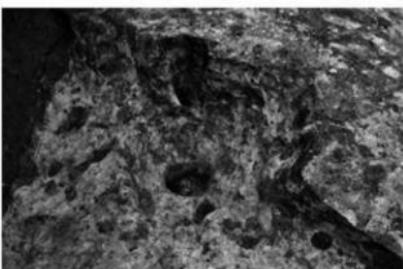
1区D-7号土坑（南西から）



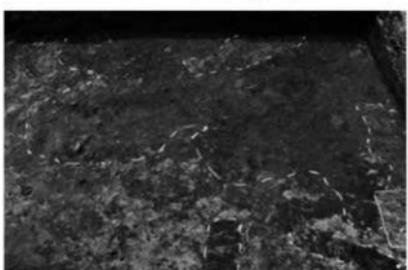
1区D-8号土坑（西から）



1区D-9号土坑（南から）



1区P-7号ピット（東から）



1区硬化面・倒木底（北から）



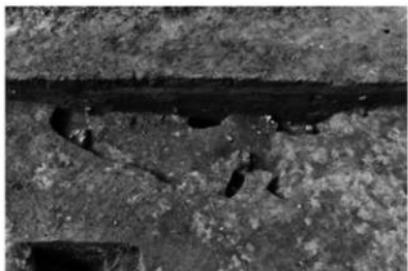
1区硬化面 遺物出土状態（南東から）



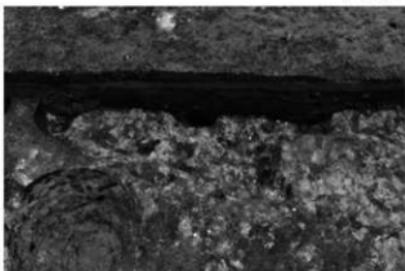
2区遠景（南西から）



2区全景（西から）



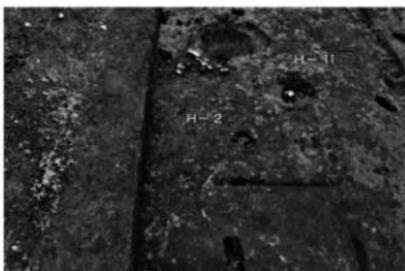
2区H-1号住居跡（南から）



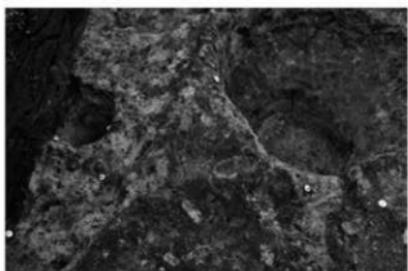
2区H-1号住居跡 挖り方（南から）



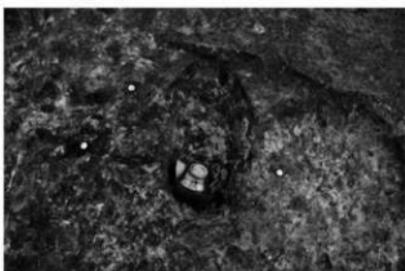
2区H-1号住居跡 カマド断割り（西から）



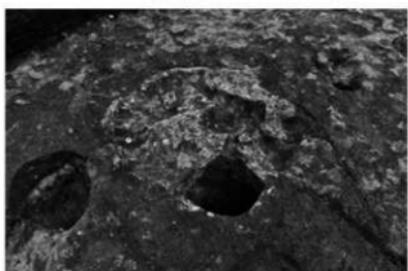
2区H-2・11号住居跡（西から）



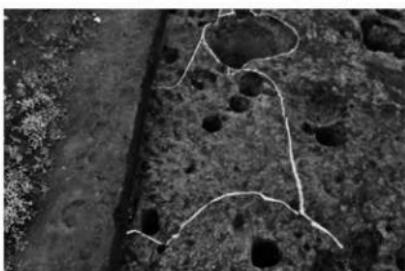
2区H-2号住居跡 カマド（西から）



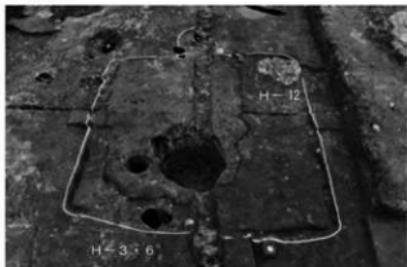
2区H-2号住居跡 P1貯蔵穴（西から）



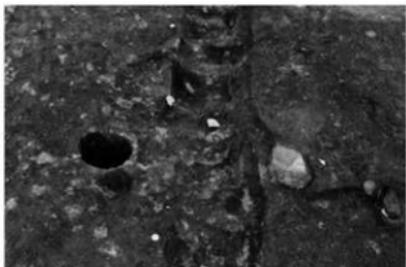
2区H-2号住居跡 D1床下土坑（南西から）



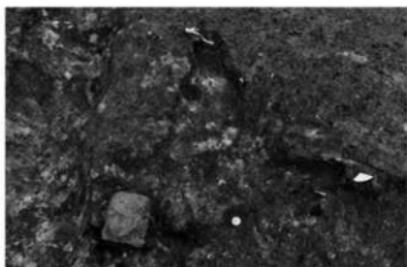
2区H-2号住居跡 挖り方（西から）



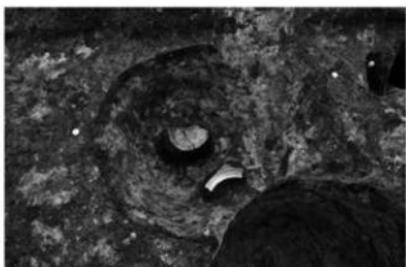
2区H-3・6・12号住居跡（西から）



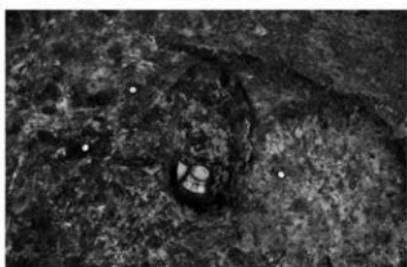
2区H-3号住居跡 カマド（西から）



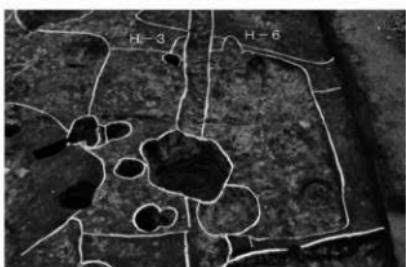
2区H-6号住居跡 カマド（西から）



2区H-3・6号住居跡 D1貯藏穴（東から）



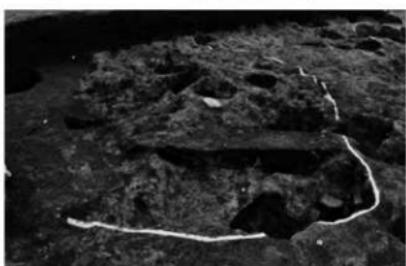
2区H-3・6号住居跡 D2貯藏穴（西から）



2区H-3・6・12号住居跡 挖り方（西から）



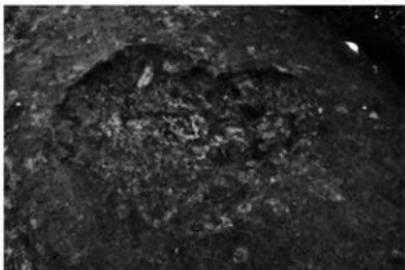
2区H-4号住居跡（西から）



2区H-5号住居跡（南西から）



2区H-7・10号住居跡（北西から）



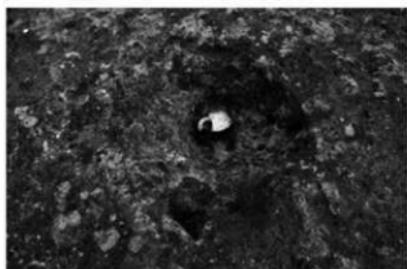
2区H-10号住居跡 D 2・3床下土坑（北西から）



2区H-8号住居跡（北から）



2区H-9号住居跡（東から）



2区H-11号住居跡 D 1床下土坑（西から）



2区W-1号溝跡（東から）



2区D-1号土坑（南西から）



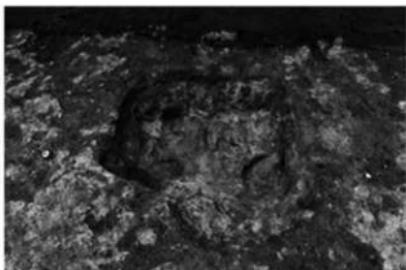
2区D-2号土坑（西から）



2区D-3号土坑（南から）



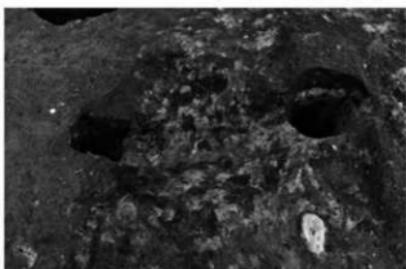
2区D-3号土坑 覆土堆積状態（南東から）



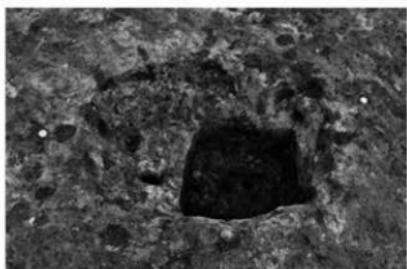
2区D-4号土坑（南から）



2区D-5号土坑（南から）



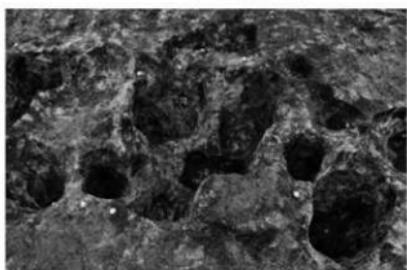
2区D-6号土坑（南から）



2区D-7号土坑（南から）



2区D-9・10号土坑（西から）



2区ピット群（H-7北側、南から）

1区H-1号住居跡



1 (1/3)



2 (1/3)



3 (1/3)



4 (1/3)



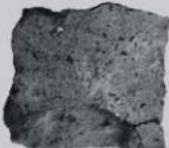
5 (1/3)



6 (1/3)



7 (1/3)



8 (1/3)

1区出土遺物1 (H-1号住居跡)

1区H—2号住居跡



1 (1/3)



2 (1/3)



3 (1/3)



4 (1/3)



5 (1/3)

1区H—3号住居跡



1 (1/3)



2 (1/3)



6 (1/3)



3 (1/3)



4 (1/3)



5 (1/3)



7 (1/3)



8 (1/3)



9 (1/3)

1区H—4号住居跡



1 (1/3)

1区H—5号住居跡



1 (1/3)

1区W—1号溝跡



1 (1/2)

1区W—2号溝跡



1 (1/3)

1区出土遺物2 (H—2・3・4・5号住居跡、W—1・2号溝跡)

1区DB-1号土坑墓



1 (1/1)

1区DB-2号土坑墓



1 (1/3)

1区D-6号土坑



2 (1/1)



1 (1/3)

1区硬化面



1 (1/3)

1区遗模外



1 (1/2)



2 (1/3)



3 (1/3)



3 (1/3)

2区H-1号住居跡



1 (1/3)



2 (1/3)



3 (1/3)



4 (1/3)



5 (1/3)



6 (1/3)



7 (1/3)



8 (1/3)



9 (1/3)

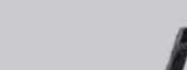
2区H-2号住居跡



1 (1/3)



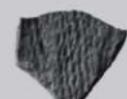
2 (1/3)



4 (1/3)



3 (1/3)



5 (1/3)

1区出土遺物3 (DB-1・2号土坑墓、D-6号土坑、硬化面、遺構外) 2区出土遺物1 (H-1・2号住居跡)

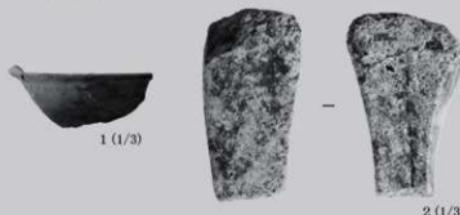
2区H-3・6号住居跡



2区H-4号住居跡



2区H-5号住居跡



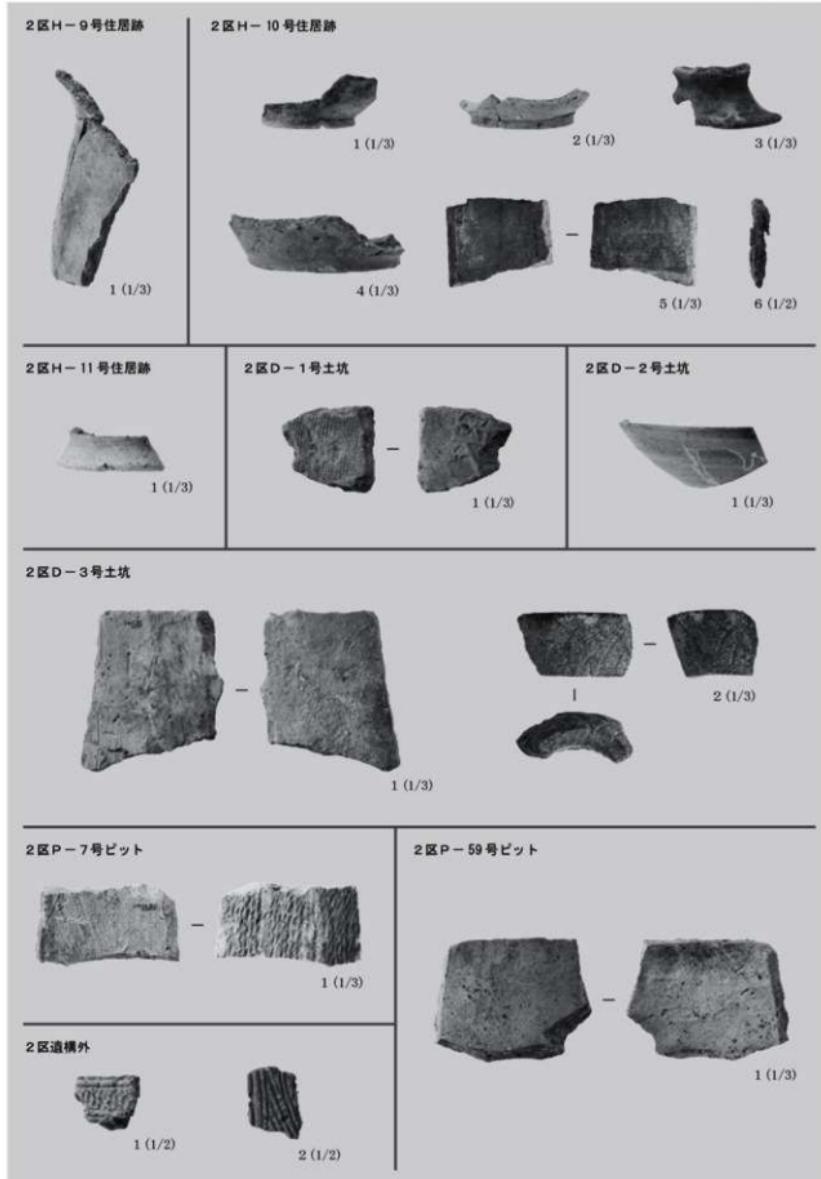
2区H-7号住居跡



2区H-8号住居跡



2区出土遺物2 (H-3・4・5・6・7・8号住居跡)



2区出土遺物3 (H-9・10・11号住居跡、D-1・2・3号土坑、P-7・59号ビット、遺構外)

抄 錄

フリガナ	モトソウジャオウミセキグン140
書名	元総社蒼海遺跡群(140)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
編著者名	高橋清文 小峰篤
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4 Tel 027-280-6511
発行年月日	西暦 2021年3月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(日本測地系)				
元総社蒼海 遺跡群(140)	群馬県前橋市 元総社町1388-1、 1388-9、1388-12、 1394、1395	102016	2A254	36° 39' 05"	139° 02' 85"	20200618 ~ 20200812	326	前橋都市計 画事業元総 社蒼海土地 区画整理事 業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海 遺跡群(140)	1区	縄文時代 古墳時代 平安時代 中世 近世 集落 城館跡	堅穴住居跡 溝跡 土坑墓 土坑 ビット	5軒 3条 2基 7基 29基	縄文土器 石器 土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 羽釜 布目瓦 かわらけ 軟質陶器 中世陶器 白磁 近世陶磁器類 石製品 古銭	低地に展開する古墳時代 後期・平安時代の集落 蒼海城関連の堀跡 中世の土坑墓
	2区	縄文時代 古墳時代 平安時代 中世 近世 集落	堅穴住居跡 溝跡 土坑 ビット	12軒 1条 9基 84基	縄文土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 羽釜 布目瓦 近世陶磁器類 石製品 鉄製品	古墳時代中・後期～平安 時代の堅穴住居跡が密集 する集落跡。

元総社蒼海遺跡群(140)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和3年3月9日印刷

令和3年3月16日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所

発行／前橋市教育委員会

前橋市総社町3-11-4

Tel 027-280-6511

印刷／朝日印刷工業株式会社